



籠城
×
攻城戦

シンポジウム

令和8年8月23日

三木城 夏の陣 2026

miki-jo natsu no jin

資料集

三木市中央公民館



「三木合戦軍図」より
(法界寺蔵・
三木市教育委員会提供)



三木城夏の陣2026 シンポジウム籠城・攻城戦 資料集

令和8(2026)年8月23日 三木市中央公民館

目次／プログラム

講師略歴	3
09：30～ 趣旨説明 宮田 逸民（三木甲冑倶楽部 会長）	
09：32～ ご 挨拶 大北 由美氏（三木市教育長）	
09：35～ 基調講演「信長・秀吉の攻城戦 -「鳥之かよひも無之」-」 中井 均氏（滋賀県立大学 名誉教授）	4
10：35～ 休 憩	
10：45～ 講演「丹波八上の籠城・攻城戦」 高橋 成計氏（城郭談話会）	14
11：25～ 講演「播磨三木城攻めの付城群」 金松 誠氏（三木市立みき歴史資料館）	24
12：05～13：00 お昼休憩	
13：00～ 講演「秀吉の鳥取攻めの付城群」 西尾 孝昌氏（朝来市文化財保護審議会委員）	34
13：40～ 講演「備中高松城攻めと陣城群」 和田 剛氏（岡山県古代吉備文化財センター）	44
14：20～ 休 憩	
14：30～ 討論会「籠城・攻城戦」 司会：高田 徹氏（城郭史料研究会） パネリスト：各登壇者	54
15：55～ 終了挨拶（16：00 終了予定）	
紙上報告「有岡城攻めにおける陣城群の構造」 山上 雅弘氏（兵庫県立考古博物館 名誉学芸員）	64
紙上報告「三木城包囲線の推移」 宮田 逸民（三木甲冑倶楽部 会長）	74
主な城郭用語	78



「三木合戦軍図」より（法界寺蔵・三木市教育委員会 提供）

ごあいさつ

ご盛会おめでとうございます。

残暑厳しき折、皆様におかれましてはご健勝のこととお喜び申し上げます。

「三木城夏の陣シンポジウム籠城・攻城戦」が三木市中央公民館大ホールにおいて、盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げますとともに、主催者である三木甲冑倶楽部の皆様が長きにわたり熱心に活動されてきたことに心からの敬意を表します。

今回のような素晴らしい活動が多くの人々の心を捉え、三木市が歴史と文化の活気あふれたまちに発展していくことを確信しております。

滋賀県立大学名誉教授の中井均先生の基調講演をはじめ、著名な先生方による研究成果の発表や討論会などは城のファンにとりましても大変興味深い内容となっています。

このシンポジウムが、当市の国指定史跡である三木城跡及び付城跡・土塁の研究と保存活用のみならず、「城」というテーマのもと皆様の心と心を繋ぐふれあいと交流の場になることを心より願っております。

本事業の開催に当たり、ご尽力いただきました関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、三木甲冑倶楽部のますますのご発展をご祈念申し上げ、お祝いのごあいさついたします。

令和8年8月23日



三木市教育長
大北 由美

登壇者／著者 略歴



中井 均氏（なかい ひとし） 滋賀県立大学名誉教授・日本城郭協会評議員・博士(文学)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て、2011年に滋賀県立大学人間文化学部准教授。2013年度より同教授。2021年に定年退職し名誉教授。金沢大学や大阪大学などの非常勤講師も務めた。専門は日本考古学で、特に中・近世城郭の研究、近世大名墓の研究。著書『戦国の城と石垣』(高志書院 2022)、『織田・豊臣城郭の構造と展開 下』(戎光祥出版 2022)、『織田・豊臣城郭の構造と展開 上』(戎光祥出版 2021)、『戦国期城館と西国』(高志書院 2021)、『中世城館の実像』(高志書院 2020)、『秀吉と家臣団の城』(KADOKAWA 2021)、『信長と家臣団の城』(KADOKAWA 2020)、『城館調査の手引き』(山川出版社 2016)、編著『戦国の城と一揆』(高志書院 2023)。



高橋 成計氏（たかはし しげかず） 丹波篠山市史編纂考古編専門部会協力委員 城郭談話会会員

著書『毛利・織田戦争と城郭』(ハーベスト出版 2024)、『織田信長の伊賀侵攻と伊賀衆の城館』(アメーzing出版 2021)、『明智光秀を破った丹波の赤鬼』- 荻野直正と城郭 (神戸新聞社出版部 2020)、『明智光秀の城郭と合戦』(戎光祥出版 2019)、『織豊系陣城事典』(戎光祥出版 2017)、『今田町の中世城館』(兵庫県今田町教育委員会 1997)。



金松 誠氏（かねまつ まこと） 三木市立みき歴史資料館係長

1977年宮崎県生まれ。奈良大学大学院文学研究科文化財史科学専攻博士前期課程修了。著書に『松永久秀』(戎光祥出版 2017)、『筒井順慶』(戎光祥出版 2019)、『秀吉の播磨攻めと城郭』(戎光祥出版 2021)、『畿内近国の城郭と縄張技術』(戎光祥出版 2025)がある。



西尾 孝昌氏（にしお たかまさ） 但馬城郭研究所代表 養父市・朝来市文化財保護審議会委員

1945年鳥取市生まれ。鳥取大学卒業後但馬の高校に勤務、1985年頃より山名城跡保存運動に参加。現在、但馬・因幡・丹後の中世城郭と山岳寺院を調査中。著書『但馬豊岡城』(豊岡市立郷土資料館 1993)、『史跡竹田城跡』(朝来市教育委員会 1994／改訂版 2014)、『此隅山城を考える1～5』(出石有子山城・此隅山城の保存を進める会 1987～1994)、『竹野町の中世城郭』(竹野町教育委員会 1998)、『鳥取城調査研究年報1～6』(鳥取市教育委員会 2008～2013)、『図説養父城郭辞典』(養父市教育委員会 2010)、『豊岡市の城郭集成I～II』(豊岡市教育委員会 豊岡市歴史文化遺産活用活性化事業実行委員会 2012～2013)、『但馬国・出石城を解剖する』(山名氏城跡保存会 2016)、『朝来市の城郭集成』(朝来市歴史文化遺産活用推進協議会 2019)。



和田 剛氏（わだ たけし） 岡山県古代吉備文化財センター勤務

岡山大学大学院文学研究科歴史文化学専攻考古学履修コースを修了後、岡山県古代吉備文化財センターおよび岡山県立博物館で埋蔵文化財の調査員、宗教美術の学芸員などを歴任し現在に至る。近年は岡山県中世城館跡総合調査に従事し、報告書編集、執筆を担当した。

主な著作に『中世城郭の新論点―石垣・畝状空堀群・海城・陣城・城郭類似遺構』(共著、戎光祥出版 2025)、『備前の山城』(編、ハーベスト出版 2026)などがある。



高田 徹氏（たかだ とおる） 城郭史料研究会

昭和40年名古屋市中区三の丸にて出生。皇學館大学文学部国史学科卒業。(財)日本城郭協会学術委員。著書『絵葉書から分析する近世城郭の建築と空間』(戎光祥出版 2020)、『近江の平城』(サンライズ出版 2021)、『縄張り図から読み解く近世城郭―西日本編』(戎光祥出版 2025)、『織豊・近世城郭の天守・天守台』(岩田書院 2026)。



山上 雅弘氏（やまがみ まさひろ） 兵庫県立考古博物館名誉学芸員

1958年淡路島生 甲南大学卒業、専門は城郭考古学、兵庫県教育委員会職員として県内各地の遺跡・城館の発掘調査に携わる。論文「兵庫県における中世城館の変遷」「五国の多様性と交流」(地方史研究協議会編 2025)、『戦国時代前半の中世城郭の構造と変遷』『中世城郭研究論集』(2022)、報告書：『播磨置塩城跡発掘調査報告書』(夢前町教育委員会 2006)、『豊池城跡』(兵庫県教育委員会 2014)など



宮田 逸民（みやた としたみ） 三木甲冑倶楽部会長 三木市文化財保護審議会委員長 城郭談話会会員

1956年 三木市内に生まれ。1978年 神戸商科大学卒、2017年 兵庫県ともしびの賞受賞。『日本城郭体系 第12巻』分担執筆(新人物往来社 1981)、『小野市史』別巻分担執筆(小野市史編纂専門委員会 1996)、『三田市史』第3巻 分担執筆(三田市史編さん専門委員 2000)、『置塩城跡総合調査報告書』分担執筆(夢前町教育委員会 2002)、『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』分担執筆(三木市教育委員会 2010)。

三木城夏の陣 シンポジウム籠城×攻城戦

2026/08/23

信長、秀吉の攻城戦 ―「鳥之かよひも無之」―

滋賀県立大学名誉教授 中井 均

◆はじめに

・付城とは何か ⇒ 攻城戦に際して築かれた臨時的な城郭【取出、要害、拵、対の城などと記されている】

これまで存在すら知られることのなかった城跡 ⇒ 戦国史研究における城の低い評価【分析することすら出来なかった】

付城の配置、縄張り、発掘調査 ⇒ 山中に残されている見事な城跡遺構【合戦を分析できる一級資料】

◆包囲網の萌芽 -佐和山城攻めの鹿垣と交野城のしゝ垣-

・元龜元年(1570)の信長による佐和山城攻め ⇒ 浅井領の南方最前線の佐和山城には伊香郡磯野の土豪磯野丹波守員昌が守備【坂田郡を中心とした土豪が立て籠もる】

「夫より佐和山の城、磯野丹波守楯籠り相拘へ候キ、直に信長公、七月朔日、佐和山へ御馬を寄せられ、取詰め、鹿垣結はせられ、東百々屋敷御取出仰付けられ、丹羽五郎左衛門置かれ、北の山に市橋九郎右衛門、南の山に水野下野、西彦根山に河尻与兵衛、四方より取詰めさせ、諸口の通路をとめ」(『信長公記』元龜元年7月1日条)

・北の山 ⇒ 物生山城跡【主郭は未削平で臨時築城を示唆しており、敵正面の西方には堀切と横堀を組み合わせた角馬出状の小曲輪を配置】

・元龜3年(1572)の松永久秀による河内交野城(私部城)攻め ⇒ 「安見新七郎居城交野へ差向け、松永弾正取出を申付け候。其時の大将として、山口六郎四郎・奥田三川兩人、勢衆三百ばかり取出に在城なり。信長公より、討果すべきの旨にて遣はさるゝ御人数、佐久間右衛門・柴田修理亮・森三左衛門・坂井右近・蜂屋兵庫・斎藤新五・稲葉伊豫・氏家左京亮・伊賀伊賀守・不破河内・丸毛兵庫・多賀新左衛門、

此外、五畿内公方衆を相加へ、後詰として御人数出だされ、取出を取巻き、しゝ垣結まはし置かれ候処に」(『信長公記』元龜3年(4月)条)

・松永久秀の交野城攻め ⇒ 取出を構えての包囲戦(信長の城攻め)【対して信長はその取出を取り巻きし、しゝ垣を結わせる】

※包囲網をさらに包囲するという二重の包囲戦を展開

「信長人数至河州交野着陣、於彼所三好方小城侯を取巻、相責候き、然共城中堅固にて、寄手之衆手あましなる軀にて候」(「誓願寺文書」正英書状元龜3年5月10日付)

・私部南遺跡で検出された堀 ⇒ 幅5～6m、深さ2.5mの薬研堀[23-15溝]【型の城の南

に位置しており、松永方の取出の堀か、信長軍のしゝ垣に伴う堀のいずれかの可能性大】

※出土遺物の下限は 16 世紀末の陶磁器

◆本格的な陣城の構築 -虎後前山取出-

- ・信長の小谷城攻め ⇒ 元亀元年(1570)の姉川合戦【「大谷(小谷)迄五十町追討ち、麓を御放火。然りといへども、大谷は高山節所の地に侯間、一旦に攻上り侯事なり難く思食され、」『信長公記』元亀元年 6 月 28 日条】
- ・そこで姉川左岸の横山城を小谷城攻めの最前線基地とする ⇒ 木下秀吉が定番として入れ置かれる【姉川を越えることが出来なかった】
そこで「与語・木本迄放火」、「越前境与語・木本地蔵坊中初めとして、堂塔伽藍・名所旧跡一字も残らず焼き払ひ」（『信長公記』）
- ・元亀 3 年(1572)に姉川右岸に進出 ⇒ 虎後前山に本陣を構築【「七月廿七日より虎後前山御取出の御要害仰付けらる。」『信長公記』元亀 3 年 7 月 27 日条、「虎後前山御取出御普請程なく出来訖。御巧を以て、当山の景気興ある仕立、生便敷御要害見聞に及ばざるの由侯て、各耳目驚かされ候」『信長公記』元亀 3 年 8 月 8 日条】
- ・その構造 ⇒ 虎御前山に構えられた諸将の陣 ⇒ それぞれが独立して構えられている
信長本陣【4 段に構えられた曲輪と切岸、堀切、豎堀】
木下秀吉陣【3 段に構えられた曲輪と、主郭に廻る土塁と横堀、**蒔**(かざし)の堀、枡形状虎口】
柴田勝家陣【簡易な堀切、不明瞭な削平地】
堀秀政陣【3 段に構えられた曲輪と切岸、堀切、豎堀】
秀吉陣の巧みな縄張り構造 ⇒ 実は信長本陣の可能性大【小谷城に最も近く、見せることが出来る】

※但し対峙する陣城であり、包囲網は形成していない

◆包囲戦の展開

- ・天正 6-8 年(1578-80)の三木城攻め
「別所小三郎楯籠候三木の城へ惣御人数取懸け、塞々に近々と付城の御要害仰付けられ御在陣候なり」（『信長公記』天正 6 年 7 月 15 日条）
「三木城郭。一里二里之間拵付城。二三ヶ所納御馬給矣。扱秀吉拵日平山峯為居城」、「依之為塞三木魚住通路。始君峯廻之付城五六十。其透々立番屋。堀。柵。乱杭。逆茂木。表引荊棘裡浚堀」、「同十月(天正 7 年)七日又被寄付城。南八幡山。西平田。北長屋。東大塚城近五六町。築地高一丈余。上二重堀入石。摸雁。舁楯。高結。重々築柵。川面伏地籠。打築杭。」（『播州征伐之事』）
- ・天正 6-7 年(1578-79)の有岡城攻め
「(天正 6 年)十二月十一日、所々に付城仰出だされ、信長公古池田に至って御陣を移さ

る。御取出御在番衆、」（『信長公記』天正 6 年 12 月 11 日条）

「(天正 7 年)かくのごとく四方に御取出仰付けられ、二重・三重堀をほり、堀柵を付け、手前々々堅固に申付けられ候」（『信長公記』天正 7 年 4 月 29 日条）

- ・池田城跡の発掘調査 ⇒ 本丸の礎石建物を切断して掘られた巨大な空堀が検出される【信長の本陣の可能性】
- ・天正 9 年(1581)の鳥取城攻め
「とつとりの東に、七・八町程隔て、並ぶ程の高山あり。羽柴筑前守彼山へ取上り、是より見下墨、則、此山を大將軍の居城に拵へ即時にとつとりを取りまかせ、頓て又、二ヶ所のつなぎの出城の間をも取切り、是又、鹿垣結ひまはしとり籠め、五・六町、七・八町宛に、諸陣近々と取詰めさせ、堀をほつては尺(柵)を付け、又、堀をほつては堀を付け、築地高々とつかせ、透間なく二重・三重の矢蔵を上させ、人数時の面々等の居陣に、矢蔵を丈夫に構へさせ、後巻の用心に、後陣の方にも堀をほり、堀・尺を付け、馬を乗りまはし候ても、射越の矢にあたらずごとくに、まはれば二里が間、前後に築地高々とつかせ、其内に陣屋を町屋作りに作らせ、夜るは手前々々に篝火たかせ、白中のごとくにして、廻番丈夫に申付け、海上には警固舟を置き、浦々焼払ひ、丹後・但馬より海上を自由に舟にて兵糧届けさせ、此表一着の間は、幾年も在陣すべき用意生便敷次第なり。」（『信長公記』天正 9 年 6 月 25 日条）
- ・太閤ヶ平 ⇒ 「大將軍の居城」とあることより秀吉の本陣ではなく、織田信長が来た場合のために築かれた陣城【包囲網から一步後退した位置に選地】

◆天正 18 年の菰山城攻め -統一戦争の最後-

- ・織田信雄、蒲生氏郷、細川忠興、福島正則ら 4 万 4 千 1 百人の軍勢による菰山城攻め
⇒ 「菰山之事、御人数三、四万にて被取巻、堀をほりまわし、堀柵を丈夫相付、鳥之かよひも無之仰付候」（鍋島直茂宛豊臣秀吉書状）
- ・「小田原陣之時菰山城仕寄陣取図」（『毛利家文書』山口県文書館所蔵）⇒ 菰山城攻めの豊臣軍の布陣が具体的に描かれている
菰山城の東北側 ⇒ 石治部(石田三成)、浅弾(浅野長政)、大刑(大谷吉継)【現在「太閤陣場」と呼ばれている】
但し陣城遺構は認められない
菰山城の東側尾根先端 ⇒ いなば(稲葉貞通)、はちすか陣取(蜂須賀家政)、あかし陣取(明石則実)、まへの陣取(前野長康)、いこま陣取(生駒親正)
菰山城の西側水田部 ⇒ 中川(中川秀政)、山崎(山崎賢家)、筒井(筒井定次)、きし田(戸田勝隆)※きし田は誤記、森右近(森忠政)、ふくしま(福島正則)、岡本(岡本重政)
「惣方取巻ノ人数二万五千人」
- ・西側の水田 ⇒ 現在陣跡の痕跡はまったく残されていない【昭和 23 年(1948)の米軍撮影の航空写真に楕円形に菰山城を囲い込むような細長い水田が写し出されていた】
- ・供出された梵鐘

興津清見寺の梵鐘 ⇒ 鐘楼に架けられた説明版の驚き！【「正和 3 年(1314)鑄造された
もので謡曲「三井寺」に出づ、又天正 18 年(1590)豊臣秀吉菰山城攻伐の際陣鐘に
用いた】

- ・静岡県文化財に指定されている正和 3 年在銘の梵鐘 ⇒ 無文の区画に擦痕が認められる
擦痕、秀吉朱印の存在 ⇒ 明らかに菰山城攻めに用いられた陣鐘【日本で唯一の明らか
な陣鐘として貴重】
- ・北条氏最初の城 ⇒ そのシンボリックな城を包囲網戦に選んだ【力攻めではなく包囲戦を
選択】

※小田原攻めの背面からの後詰を阻止

◆おわりに

- ・信長、秀吉の攻城戦 ⇒ 敵城を囲い込む【包囲網の設定と陣城の構築】
なぜ包囲戦を選択したのか？⇒ 「大谷は高山節所の地に侯間、一旦に攻上り侯事なり
難く思食され」【要害堅固の城に対しては力攻めをしない】
※自軍の兵力の温存と相手方の戦意喪失を狙う
- ・一方で力攻めで攻め落とされる城も存在する ⇒ 天正 18 年(1590)の小田原城攻め【包
囲戦：小田原城、菰山城、力攻め：山中城、八王子城】
※使い分けられた包囲戦と力攻め
- ・完全包囲としてのしゝ垣(鹿垣) ⇒ 遺構の残らない佐和山城攻めの鹿垣【柵？】、遺構の
残る鳥取城攻めの鹿垣【土塁と堀】
- ・絵図に描かれた包囲網 ⇒ 天正 15 年(1587)の肥後国人一揆で和仁親実、親範、親宗と
辺春親行の立て籠もる田中城の周囲に二重の柵と櫓が設けられる【小早川秀包を総大将
に、立花宗茂、高橋直次、筑紫広門、鍋島直茂、安国寺恵瓊ら九州大名と戸田勝隆、福
島正則、生駒親、蜂須賀家政らの四国大名らが参陣】
- ・天正 12 年(1584)の美作岩屋城攻め ⇒ 毛利方の中村頼宗の立て籠もる岩屋城を宇喜多
秀家が攻める【花房職之を総大将に、岡家利、長船貞親、戸川秀安、江原親次らが包囲
網を構える】
※織田方となった宇喜多氏の攻城戦



図 1 元亀元年の佐和山城攻めの陣城配置図

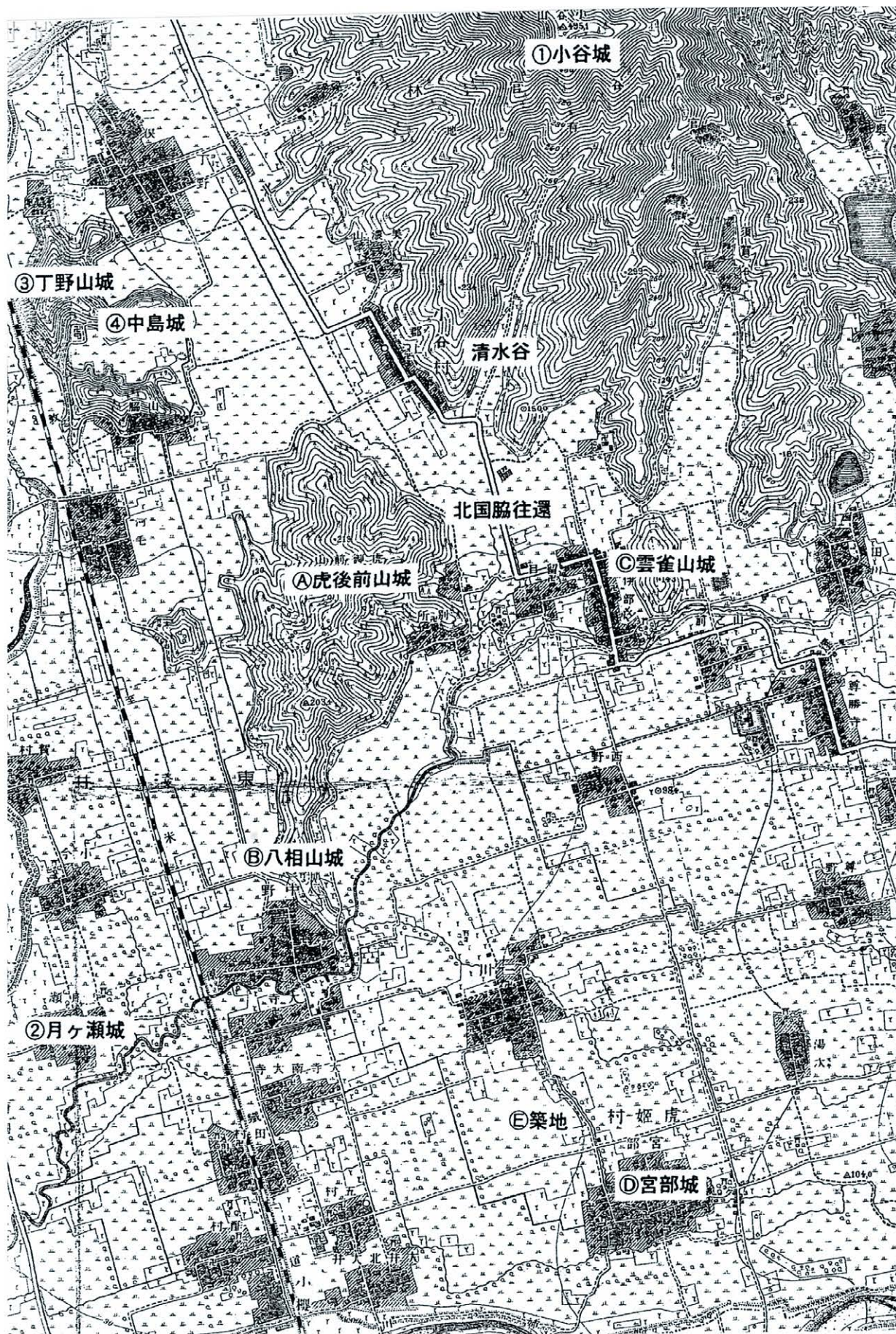
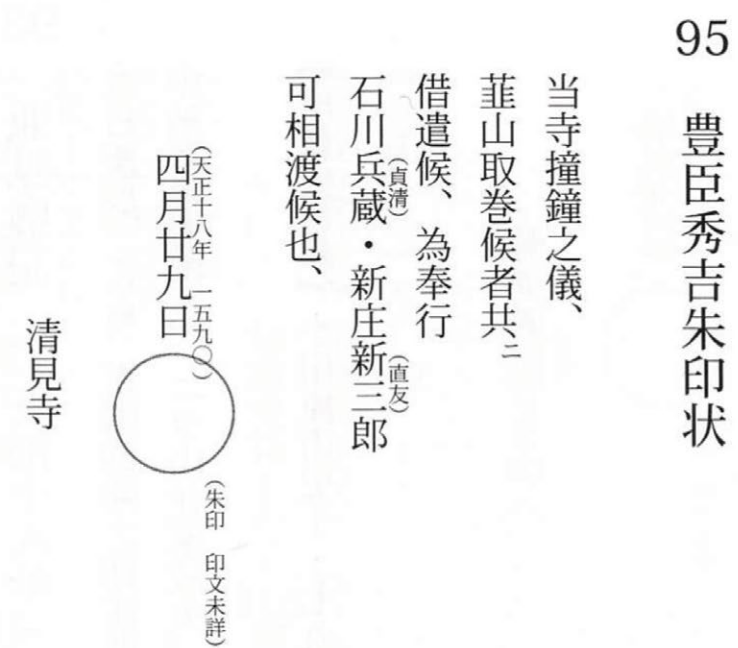


図2 小谷城攻めの織田軍、浅井軍の布陣図



史料1 豊臣秀吉朱印状(清見寺文書)

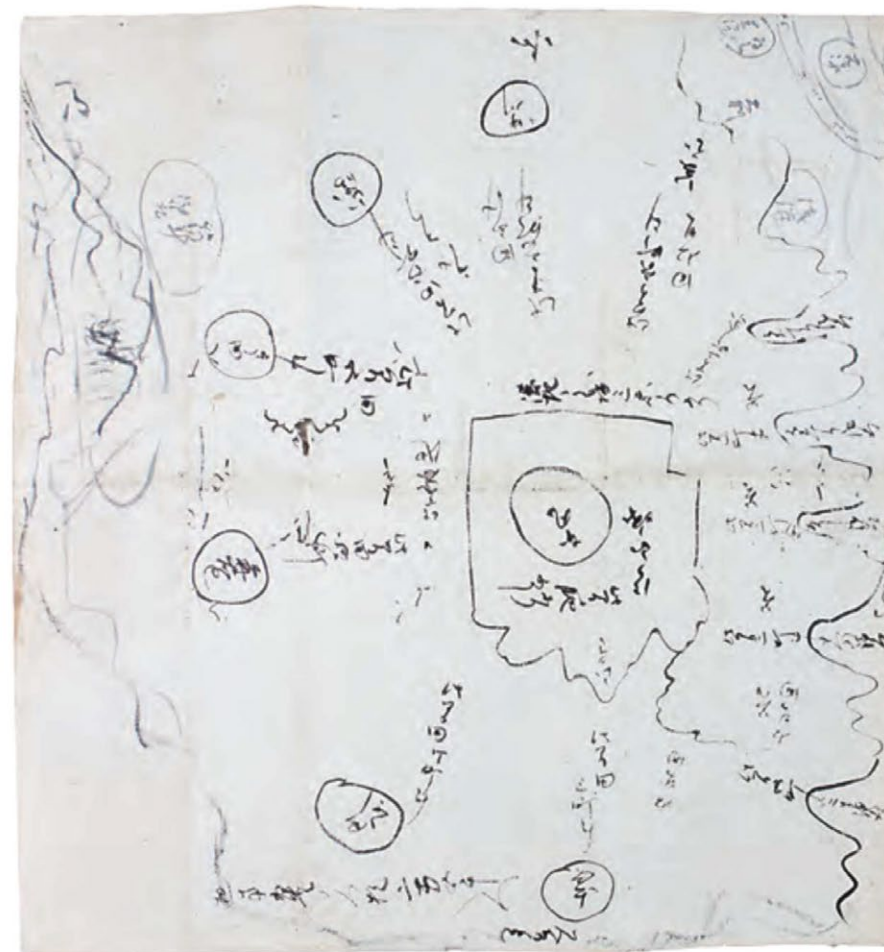


図3 小田原陣之時葦山城仕寄陣取図(山口県公文書館蔵)

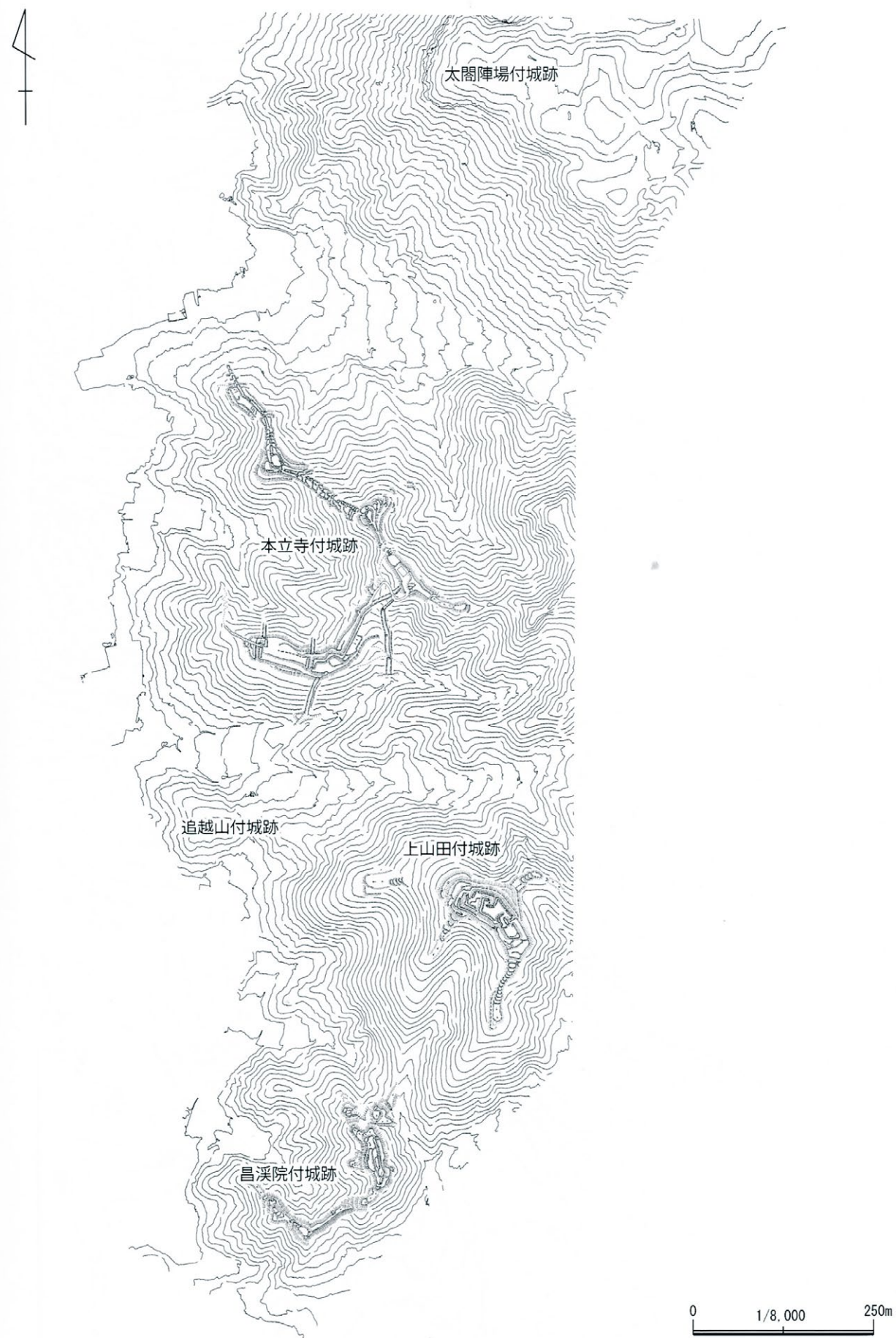


図4 葦山城攻めの付城跡群分布図(『葦山城跡及び付城跡群総合調査報告書』)

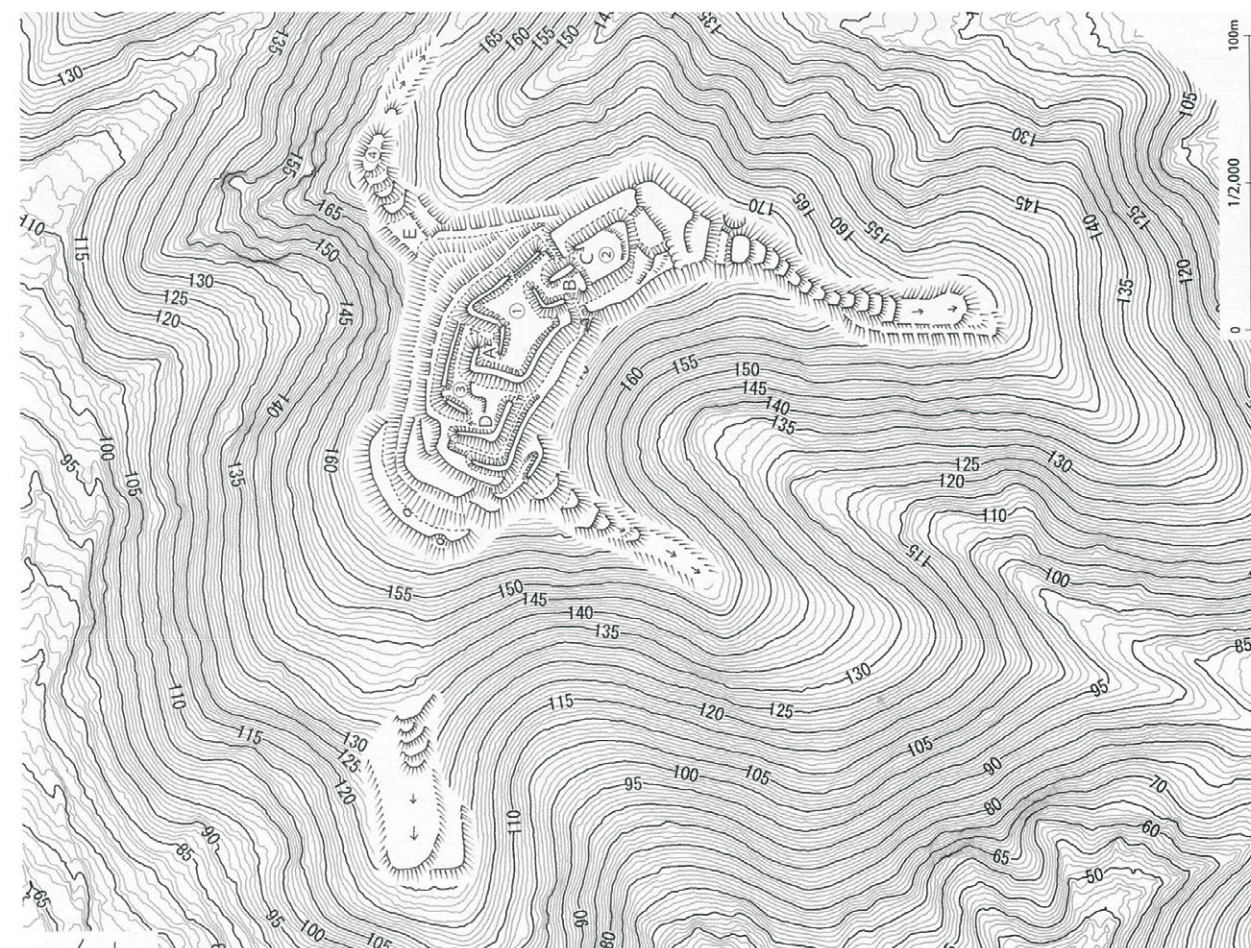


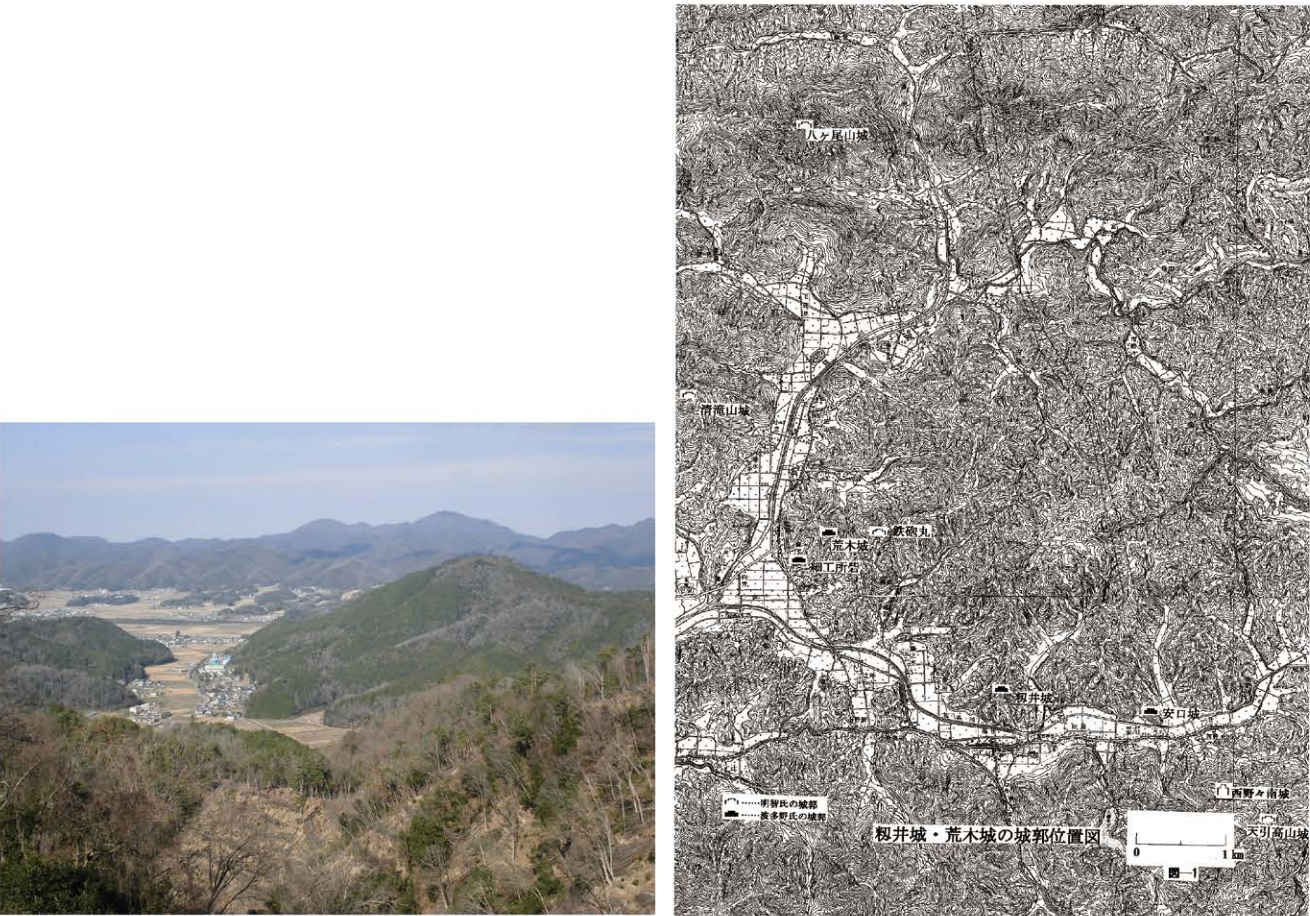
図5 上山田付城跡概要図(中井均作図)



図6 辺春和仁仕寄陣取図(山口県文書館所蔵)

はじめに

明智光秀の丹波攻略は、天正3年（1575）10月の黒井城包囲である。しかし、同4年（1576）正月15日に、丹波国人の波多野秀治が突如裏切り、光秀は黒井城から退却を余儀なくされた。その後石山本願寺合戦では、同4年（1576）4月14日に織田信長の命令により、細川藤孝とともに森口（大阪府守口市）と森河内（同東大阪市）に砦の構築を申しつけられた。だが5月23日に所労のため帰京し、医師曲直瀬道三宅で静養し、その後坂本城に戻って療養した。同5年（1577）正月晦日には、丹波国人小畠永明・長沢又五郎・森安（森安芸守カ）に、亀山城（京都府亀岡市）の惣堀工事を命じており、丹波の拠点として亀岡城の普請を開始した。



左が殿町（奥谷）右が八上城 南から

1 八上城攻めの前哨戦

明智光秀は、天正3年（1575）の第1次黒井城合戦において、波多野秀治の裏切りにより、黒井城から退却を余儀なくされた。以後、両者は対立を深め、同5年（1577）10月下旬に波多野氏への攻撃を開始した。（図一1）を参照

(1) 榎井城合戦

『兼見卿記』の天正5年（1577）10月29日の条に、「惟任日向守、丹州モミキ館へ手遣云々」とあり、10月に多紀郡の入口にあたる榎井城が攻略された。11月17日付の光秀書状には「榎井両城乗取候」とあり、両城とは榎井城と安口城（はだかす）のことである注1。この時、織田の傭兵として働いていた山中鹿介

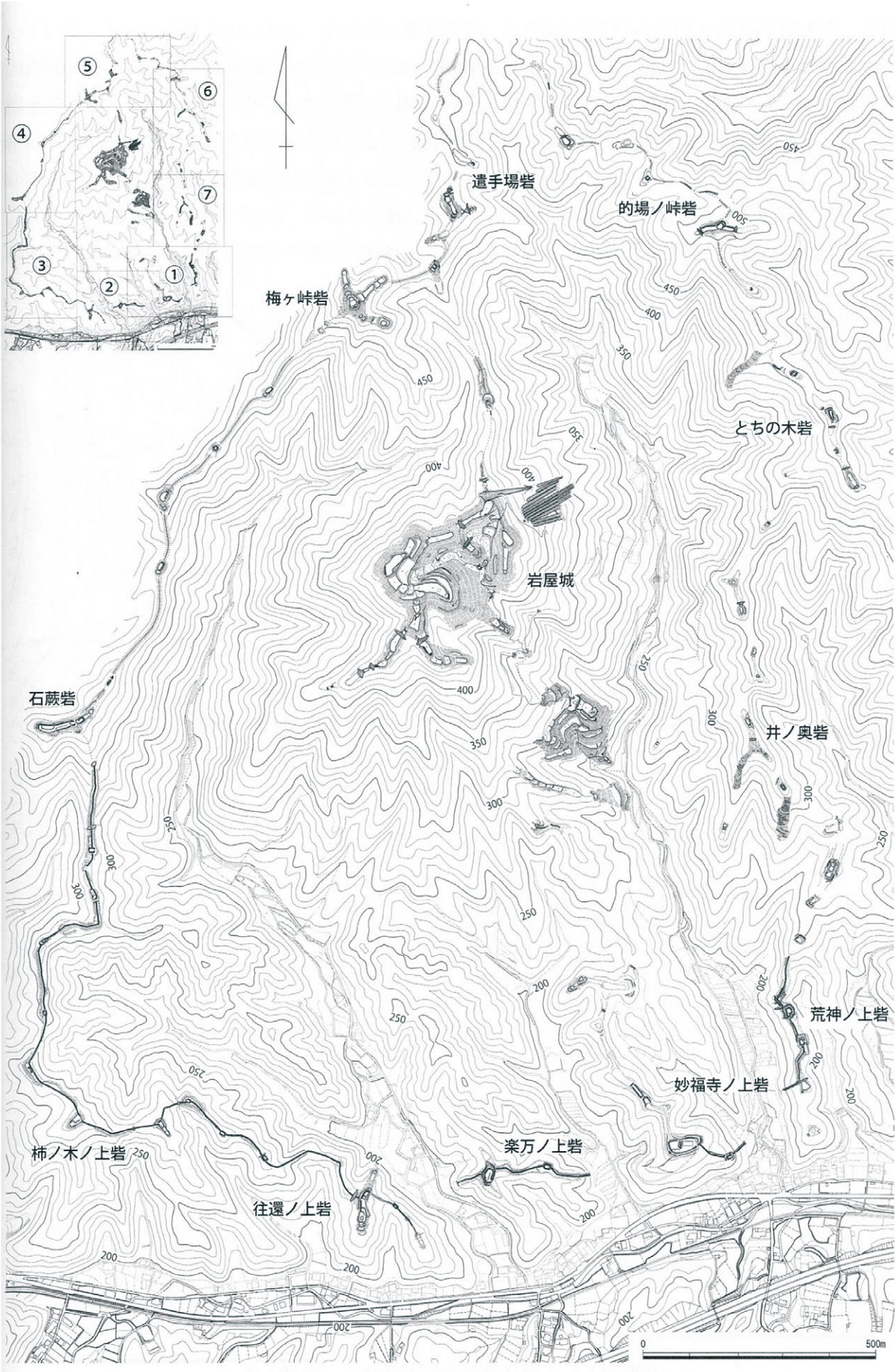


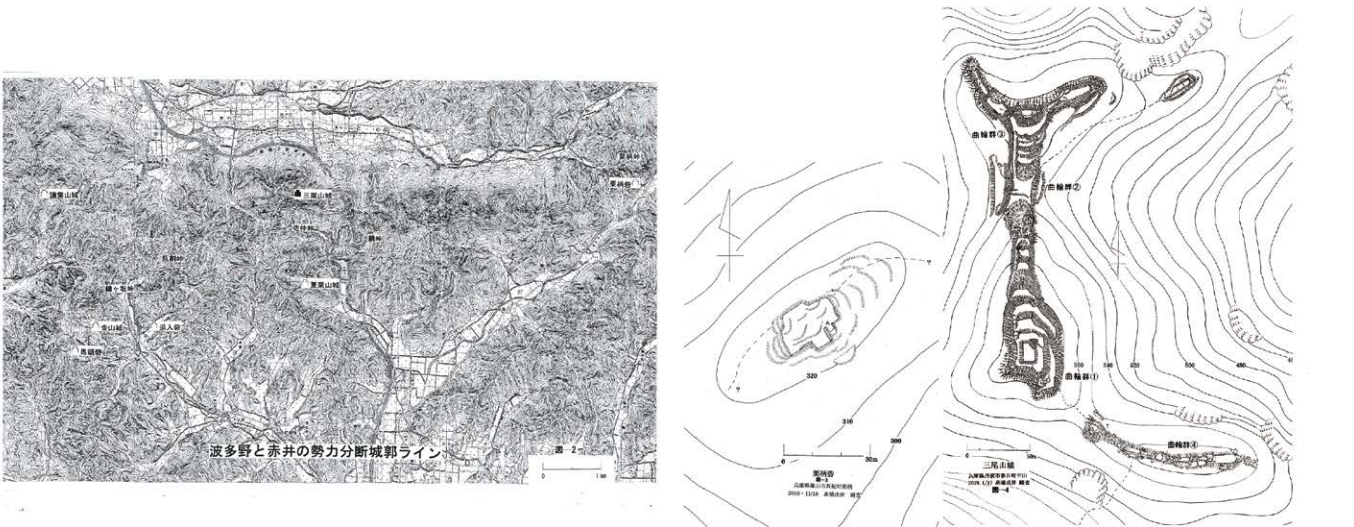
図7 美作岩屋城跡と陣城群(『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第3冊 -美作編-』)

の記述がある。「丹波之靱井之城、明知殿被取詰之時、うしろまきとして荻野悪右衛門・波多野罷出、明知衆敗軍之節、敵討逼ニ付而、鹿介返合、及一戦之時、敵相くつれ、分捕仕候、明知殿一段御ほうひ申事、」とある注2。記述のように、波多野氏と荻野氏が靱井氏の援軍に出陣したことが判明した。その後「郡内敵城十一ヶ所落去候、依之荒木・波多野両城ニ罷成候」とある注3。

なお、11月には播磨国三木城（兵庫県三木市）の別所長治が、八上城に拠る波多野氏を助けるために援軍を送ってきた。光秀はこれを阻止するために、亀岡の石田長保を出兵させ、11月3日に丹波篠山の小野原・不來坂（このさか）・高仙寺で合戦し、石田氏はこれに勝利して信長から感状を賜った注4。波多野氏と別所氏は婚姻関係にあったといわれ、そのための援軍派遣であろう。

(2) 荒木城合戦

天正6年（1578）4月波多野氏の有力家臣である荒木氏を攻撃するため、明智光秀の他に織田の家臣が参戦している。『信長公記』によると、4月10日に滝川一益・丹羽長秀が荒木氏綱の城を包囲し、水の手を止めて落城させたとあり、丹羽長秀の書状によると、「荒木山城守城五間十間ニ取詰、水之手相止候条、落居可為五三日中候」とある注5。



2 八上城合戦における周辺の防御

同6年（1578）3月4日に、信長は細川藤孝に指示し、自ら丹波に出馬するので、来る20日以前に丹波国の多紀郡や奥郡への道を二筋も三筋も整備するように命じている注6。なお、3月10日には黒井城主荻野直正が病死した。同6年9月13日付光秀文書によると、津田加賀守に対し、18日に八上城に出陣し、背後の山に陣を構えて10日ばかり逗留するので出兵するように命じている注7。

同6年11月朔日（ついたち）付光秀書状によると、小島永明に対して陣所をいずれも堅固に守備するように伝え、三田城（兵庫県三田市）に拠る荒木重堅軍が山伝いに来援して、砦が危うくなったら、早馬で連絡するように指示し、亀山（亀岡市）へ明智秀満を向かわせ、我々も一両日中に向かうと伝え、孫十郎（明智カ）が若年のため「頼入り候」とある注8。

(1) 波多野氏と赤井氏の分断

第一次黒井城合戦での敗戦が、明智光秀に黒井城（丹波市春日町）と八上城を分断する陣城市群を構築させた。天正6年（1578）11月19日付で小島永明に宛てた明智光秀書状によると、「錦（金）山・国料（領）為見、廻被相越候処、何も堅固候由尤候」とあり、永明が金山城と国領城の見廻りを実施している。国領城とは従来指摘されてきた平地の国領にあった流泉寺跡ではなく、三尾山城のことを指している注9。三尾山城は、荻野直正が死亡した同6年3月より明智氏が陣を置いたが、その後、赤井氏に奪還されたた

め、同7年（1579）9月に南1.5 kmに夏栗山城を構えて落城させた。では各城郭の役割を考えてみたい。東の栗柄砦は、栗柄峠を監視する役割があり、中央部にある夏栗山城は佐仲峠と鏡峠の監視で、三尾山城（国領城）の向城でもある。西にある金山城は瓶割峠と鐘ヶ坂峠の監視が目的である。東の讃葉山城は柏原（高見城）方面と黒井城方面への監視が目的で構築された。（図－2）を参照

・栗柄砦（丹波篠山市栗柄）（図－3）

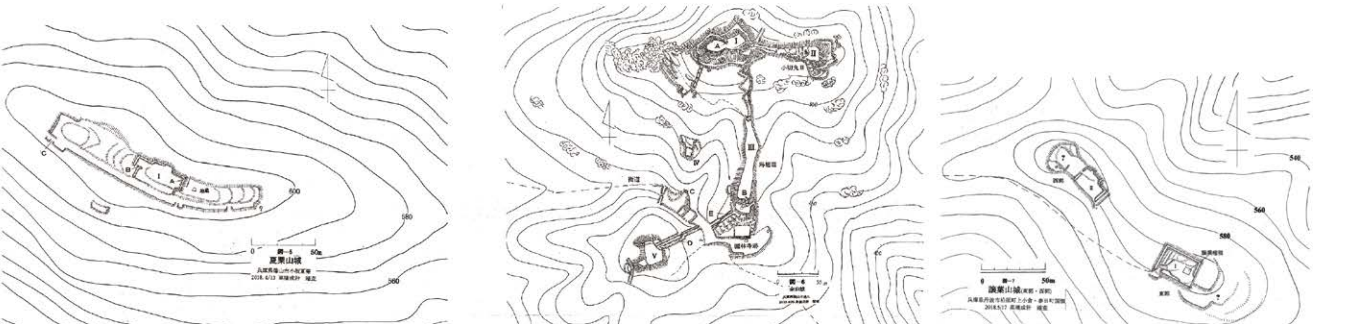
【概要】栗柄峠は、東の京都方面から西の丹波市春日町に通じる交通の要衝である。城は標高330 mに位置し、規模は東西25 m、南北20 mほどで、南東に虎口Aが開口しており、塁線には折りが見られる。黒井城から栗柄峠を経て南の八上城に通じるため、明智氏が構築した分断の陣城である。

・三尾山城（丹波市春日町）（図－4）

【概要】黒井城から南東へ6.5 kmの、標高586 mに位置する。西には丹波篠山へ越える佐仲峠と、東には鏡峠がある。特に山頂からは北西の黒井城方面への展望が良好である。『丹波志』によると、城主は赤井幸家といわれ、荻野直正死亡後明智氏が陣を置いていたが、その後、赤井氏に奪還されてしまったため、翌天正7年（1579）9月に、三尾山城の南1.5 kmに夏栗山城を構えて落城させた注10。城域は三つの峰で構成されており、南の曲輪群①～北の曲輪群③である。南の夏栗山城に対峙する曲輪群④は、狭い岩盤上に構築された曲輪である。山全体が岩盤で構成されており、曲輪の造成に難儀がある。黒井城と八上城を分断するには最も中心的な位置にあるため、明智氏と赤井氏の争奪戦が行われた。明智方は「国領城」と呼んでいる。

・夏栗山城（丹波篠山市小坂）（図－5）

【概要】佐仲峠を隔てて三尾山城から南へ1.5 kmほどの、標高600 mに位置する。天正7年（1579）9月23日付の光秀書状によると、「同廿一日ヨリ先年拙者在城申候国領城之上へ、深山を一里余切抜、新道を付、同廿二未明より国領へ取懸、申下刻ニ責破、悉打果、三ヶ年以來之鬱憤散候」とあり注11、三尾山城を攻撃するために明智方が構築したという。中心部の曲輪Ⅰは東、西、北の一部に低土塁Aを巡らし、西側に喰い違い虎口Bがある。また、塁線の折りや張出しがあり、西には桁形虎口Cがある織豊系陣城である。



・金山城（丹波市柏原町／丹波篠山市追入）（図－6）

【概要】丹波市と丹波篠山市の境界上に位置し、西の柏原から東の篠山に通じる鐘ヶ坂峠があり、北から金山城東山麓へと通じる瓶割峠がある。山頂の曲輪Ⅰの北側には虎口Aがあり、西側には石垣が見られる。東尾根の岩盤が露出した場所に曲輪Ⅱがあり、10 mほど下った南東斜面には小規模の曲輪がある。通路は南尾根を下り、通称「馬場」といわれる曲輪Ⅲに到る。南には虎口Bがあり、虎口には石積があったといわれ、石は旧園林寺（おんりん）の本堂の石垣に移転したという。曲輪Ⅲから西の谷を隔てた所に曲輪Ⅳがあり、60 m下の水場Cを守備している。旧園林寺の西の小山には曲輪Ⅴがあり、鞍部の両斜面には堅堀Dと堅土塁Eが敷設され、西の柏原方面からの街道を引き込んで番所を設け、通行人の監視を実施してい

た可能性がある。

・**護葉山城**（丹波市柏原町）（図－7）

【概要】丹波市柏原町の北東部、標高 594 m に位置する。黒井城や高見城への展望が良好である。曲輪は東の曲輪群Ⅰと西の曲輪群Ⅱに分かれ、両曲輪とも土塁囲みで、西曲輪群には折りや張出しのある織豊系陣城である。



(2) 三田城に対する陣城

天正 6 年（1578）10 月荒木村重が突如として織田信長に反旗を翻した。毛利氏は同 6 年 5 月～6 月の上月合戦に勝利し、この頃から村重への裏切り工作を働きかけていた。上月合戦に勝利した毛利氏には、播磨国の別所氏、宇野氏、丹波国の赤井氏、波多野氏が毛利方となり、播磨国においては黒田氏を除く殆どの者が毛利氏に協力した。この年の 12 月、光秀は三田城主荒木重堅（三田市）に対し、八上城への攻撃を阻止するために陣城を構築している。（図－8 を参照）勿論信長の命令であり、八上城、伊丹城、三木城攻めの連携の陣城である。同年 12 月 20 日付で小寺高友に宛てた光秀書状によると、「付城四ヵ所申付候、今日普請首尾候」とあり、12 月 20 日に完成したという注 12。陣城は南から五良谷城、釜屋城、平方城、中西山城の 4 城であるが、現在五良谷城を残して他の 3 城は、北摂三田ニュータウン建設で消滅してしまった。



(3) 三木城への繋ぎの城

「つなぎの城」とは、城と城との連絡を保つために、その中間地点に設けられた城（施設）で、連携を密にするため、兵員の移動時の休憩や通信等を補助する施設である。ここで八上城と三木城をつなぐ城として中尾城（三田市）を取り上げた。（図－12 を参照）

・**中尾城**（三田市下相野）（図－13）

【概要】東の平地からは見えない谷筋の奥まった場所にあり、丘陵の頂上部から尾根の北側に下がった場所に立地する。城は谷間に突き出した小尾根先端に構えられ、北の谷入口と南西からの街道沿いに展望が可能な場所にある。東の丘陵の頂上からは、三田方面への展望が良好である。北に位置する八上城から三田北部経由で行く場合、吉川谷に入る近道である。なお、美囊川（みのうがわ）を下ると三木城に到る。

天正 6 年（1578）12 月 20 日と推定される光秀書状によると、「我等ハ為一人、油井口へ横川谷（吉川谷カ）由候、つなぎの城□□（普請）明日申付候、佐右、羽藤先至三木表被罷越候、其面諸事御忠節此節候」とあり注 13、八上城と三木城間の「つなぎの城」として中尾城が築かれた。

近畿自動車道舞鶴線の建設によって発見されたが、現在は南西部に堀切と曲輪の一部が残っている。城域は南北 45 m、東西 30 m ほどで、尾根の両側を堀切で遮断し、五つの曲輪で構成されていた。主郭は曲輪Ⅰと考えられ、内部の削平状態は良好で、礎石を据え付けた痕跡や雨落溝などが検出された。曲輪Ⅱは緩やかに北に傾斜して自然地形を残していたが、曲輪内部からは土坑や段状遺構が検出され、遺物や炭、焼土などの生活痕跡が多数確認できた。曲輪Ⅰよりも豊富な生活痕跡を残している。曲輪Ⅲからは土坑が検出され、遺物や炭、焼土などの生活痕跡が多数確認できた。遺物の様相は曲輪Ⅱと共通する。曲輪Ⅳからは遺物等の出土がなく、曲輪Ⅴからは土坑が検出され、丹波焼の甕と多量の炭化穀物が出土したため、貯蔵機能を担った曲輪であったと考える。

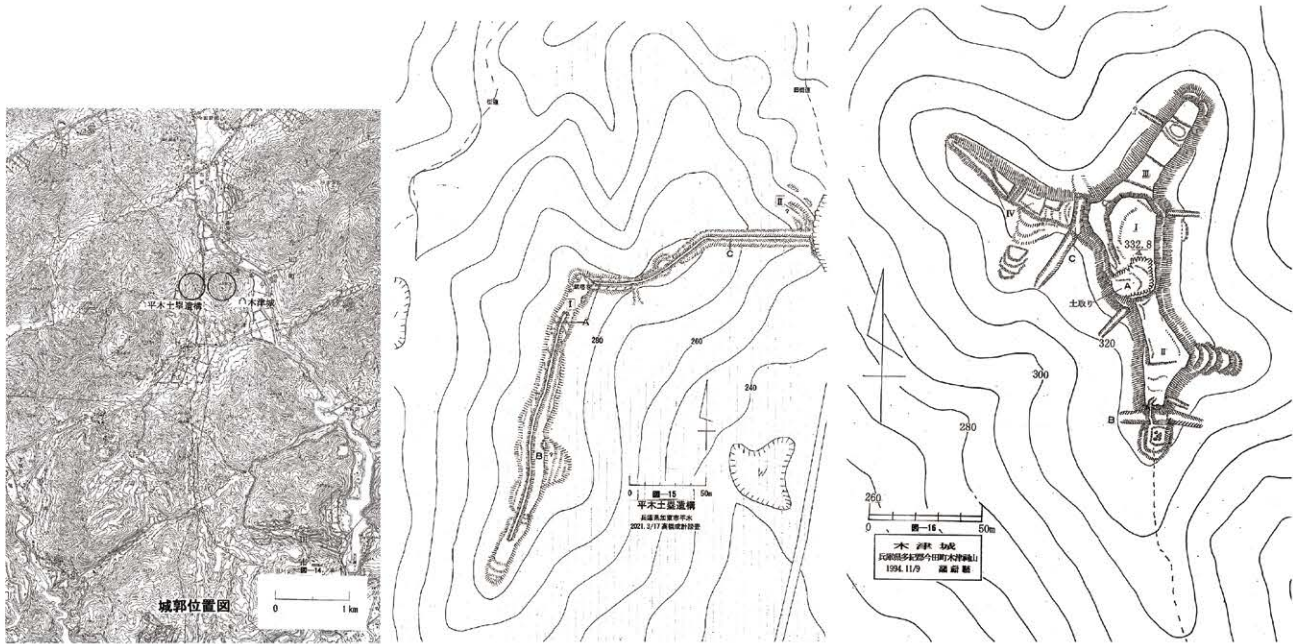
曲輪内の建物は礎石建物で構成されており、建物は曲輪Ⅰ・Ⅱ・Ⅲで計五棟見つかり、曲輪Ⅰには規模の大きな建物があった可能性がある。また、『三田市史』によると、出土遺物の散乱状態から、当城は最終的に破却された可能性が指摘されている注 14。

出土物としては土師器皿、埴（るつぽ）、丹波焼すり鉢、こね鉢、甕、壺、德利、備前焼壺、德利、瀬戸、美濃焼の天目茶碗、皿、中国産染付、白磁皿や鉄製品（鉄鍋・鎌・槍先）、銅銭、石臼、茶臼、砥石などがある。丹波焼の占有率が高く、銅銭はすべて曲輪Ⅰから出土している。

曲輪の構成は単純で、眺望も良くなく、尾根の先端の傾斜地を選地しており、城郭として目立ってはいけない立地となっている。曲輪Ⅰは公的な場所、曲輪ⅡとⅢは駐屯地や煮炊きなどの場所、曲輪Ⅴは穀物貯蔵機能を有している。遺物の出土量は豊富で生活痕跡もあり、恒常的な生活が営まれていた可能性があることから、「つなぎの城」として通信や兵員の交替時の休憩所として機能し、三田城に対する陣城や三木城包囲の応援等の移動時に使用されたと考える。

(4)三木城側の八上に対する陣城

天正5年（1577）11月3日に三木城の別所長治が、波多野氏を織田氏から守るために、多紀郡に援軍を派遣し、小野原、不来坂、高仙寺（すべて丹波篠山市）で合戦が行われ、明智方の石田長保が出陣してこれを防ぎ、織田信長から感状を与えられ、多紀郡で領地を宛行われたという。別所氏は波多野氏と親戚関係にあり、波多野元秀の娘が別所氏に嫁いでいる注15。これらから考えて三木城で包囲されている別所氏を救援するために、波多野氏の援軍を警戒して構築した可能性がある。（図－14を参照）



・平木土塁遺構と木津城（こつ）（図－15・16）

【概要】東には木津城のある標高332 mの山があり、木津城の東山麓は東条川が流れる。木津城の西側は播磨国と丹波国の国境となり、南北に街道が通過する。平木土塁遺構のある小山は標高290 mの高さで、西側にも鞍部があり、東西の両側を街道が通過する。城主は小野原氏で、波多野氏の家臣として旧今田町地域を支配していた。

土塁は「く」の字形で、長さ200 mほどあり、中央部に南北30 m、東西10 mほどの自然地形Ⅰがあり、現在は鉄塔が建設され地形の一部が変化している。北の街道と木津城への展望が良好である。土塁Aの左右には犬走り状の平坦地Bが一部に見られる。東側の傾斜地にある土塁の左右には、土塁の土取りのため空堀C（堅堀）となっている。土塁の高さは平均で1.5 mほどあり、遺構状態は良好である。東の街道上部には削平地の痕跡Ⅱがある。

木津城の規模は南北170 m、東西140 mほどで、曲輪Ⅰが主郭と考えられ、南側には土取りの跡Aがあ

る。南には土橋付の堀切Bがあり、南東山麓の居館から上がってくる道がある。土橋を渡ると曲輪Ⅱに至り、曲輪Ⅰと同格の面積を有する。北側の尾根上には曲輪Ⅲがあり、西の平木土塁遺構方面の尾根は堀切Cで遮断し、削平状態の悪い曲輪Ⅳが60 mほど続く。

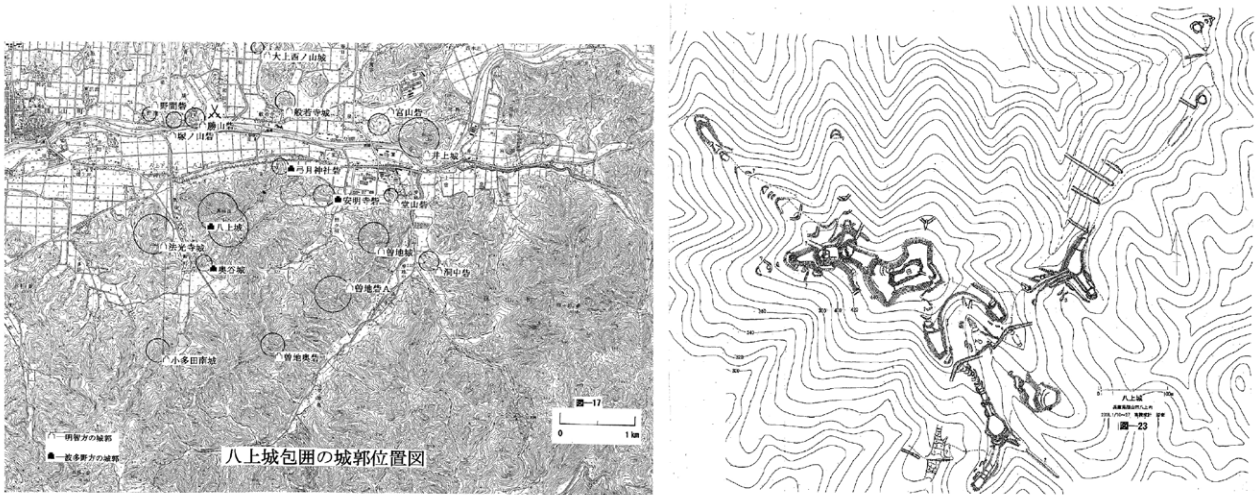
このような尾根上の土塁遺構は、天正11年（1583）3月～4月の賤ヶ岳合戦の林谷山砦（滋賀県長浜市）や菖蒲谷砦（同長浜市）または、同12年（1584）3月～7月の美作国岩尾城合戦の楽万ノ上城（岡山県津山市）や荒神ノ上城（同津山市）があり、天正18年（1590）3月の伊豆菰山城合戦の蜂須賀家政の陣であった本立寺付城（静岡県伊豆の国市）等がある。これらはすべて織豊系陣城である。

3 攻城戦と籠城戦

天正6年（1578）2月、播磨の別所長治が毛利方になると、これに同調して波多野氏と赤井氏が挙兵した。波多野氏は赤井氏や別所氏と婚姻関係にあるといわれ、八上は地理的にも山陰道や山陽道の入口にあるため、毛利氏としては力強い味方である。また、荒木村重の織田氏からの離反があり、織田氏は三方に敵を抱える状態となり、一か所に集中できない状態で、三方向同時対応へとシフトした。

(1)八上城への付城

『信長公記』によると、天正6年12月に「直に丹波へ相働き、堀をほり塀・柵幾重も付けさせ、透間もなく塀際に諸卒町屋作に小屋を懸けさせ、其上、廻番を丈夫に、警固を申付けられ、誠に獣の通ひもなく在陣候なり」とある。八上城（図－23を参照）に対する付城として、篠山川を隔てた北に光秀の本陣と称される般若寺城があり、そこから北へ800 mほどには大上西ノ山城、そして般若寺城から西へ1.3 kmに勝山城（籠山）、塚ノ山砦、野間砦と続く。篠山川を南に渡って法光寺城があり、南1.4 kmには小多田南城があって、南の三田方面からの街道が、殿町（波多野氏の居館奥谷城）につながっている。これを監視するために構築されたと考える。八上城の南1.9 km地点には、八上城につながる尾根の分岐点に曾地奥砦があり、そして北東の尾根の間には曾地砦が続き、そして尾根先には曾地城がある。八上城の東にある堂山砦、そして北の標高361 mの井上城が八上城と相対関係にある。その他八上城包囲網の圏外となる付城もある。では一部の付城を見てみよう。（図－17を参照）

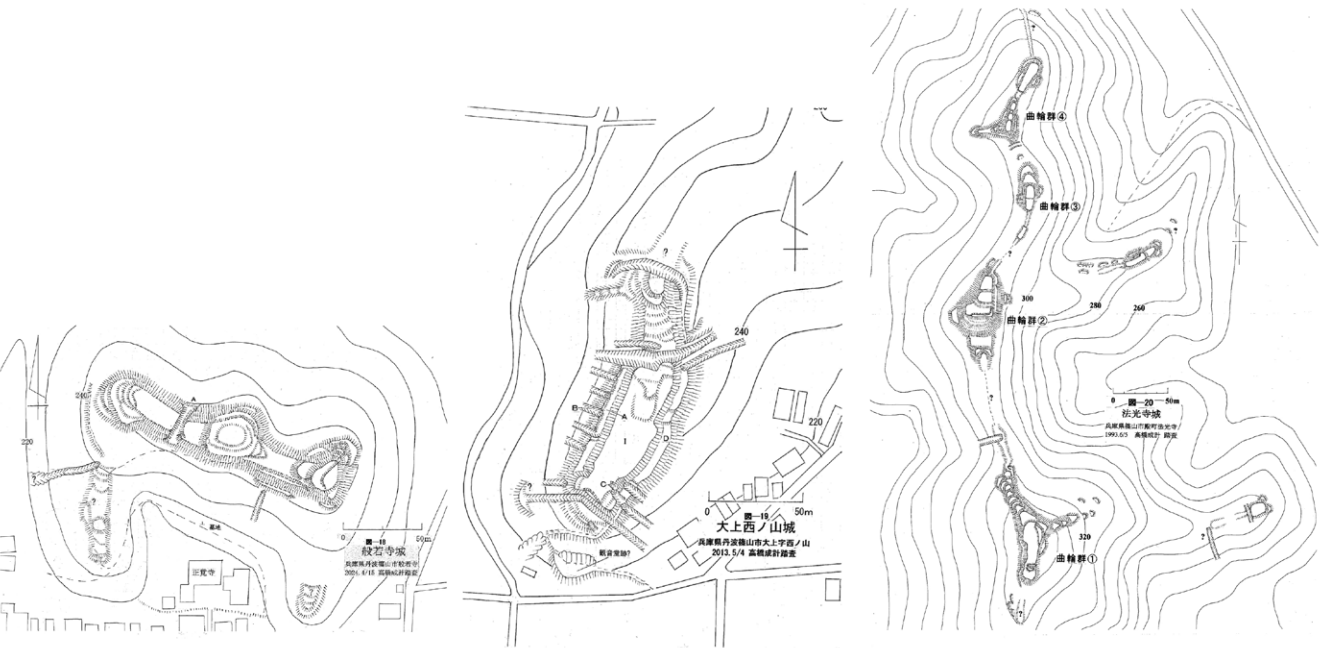


・般若寺城（丹波篠山市般若寺）（図－18）

八上城の北方、篠山川を隔てた1.8 kmの票高260 mに位置する。南山麓には正覚寺があり、東と西は丘が張出し、寺を包み込む地形になっている。『丹波志』によると、「明智光秀高城を攻むとき設と云々」とある。城内は西側の堀切Aで二分されており、曲輪の削平状態は良くない。明智軍の本陣といわれ、八上城とは1.8 mの距離にあり、八上城からは城内が見える環境にある。

・大上西ノ山城（丹波篠山市大上）（図－18）

八上城から北へ 2.5 km にあり、少し八上城を見上げる角度となり、明智方の本陣である般若寺城から北へ 800 m の距離にある。歴史は不明であるが、主郭となる曲輪Ⅰの西には横堀 A と畝状空堀群 B を敷設し、東側には虎口 C と腰曲輪 D が設けられている。北の堀切 E で分離した曲輪Ⅱには墳丘上の土壇があり、曲輪内部は自然地形である。縄張は防御性が高いため、本陣の危険度が高くなった場合の、後陣の避難城の可能性が考えられる。



・法光寺城（丹波篠山市寺殿町）（図－20）

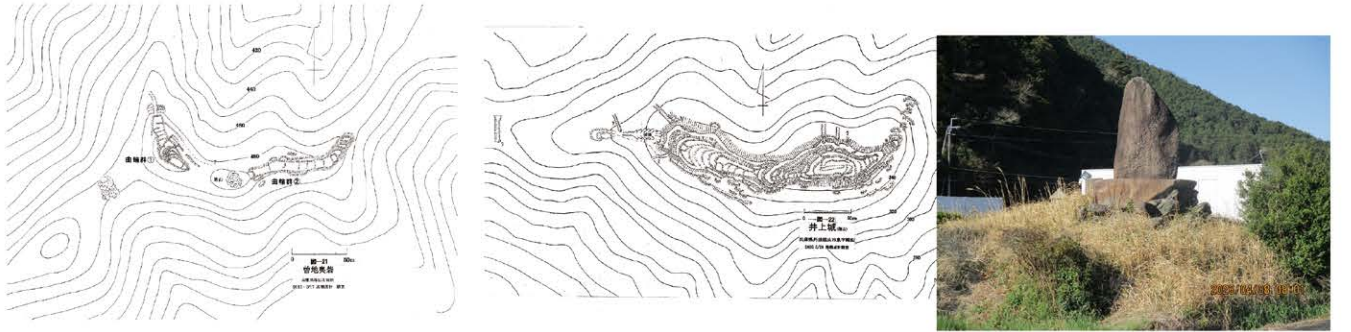
波多野氏の城下町である奥谷を防御するために構築した支城である。しかし、八上城攻撃の付城として使用された。「波多野家文書」によると、三好氏の八上城攻めで、波多野次郎が夜討ちの陣して利用した注16。城の規模は東西 1000 m、南北 500 m ほどあり、遺構は大きく四ヵ所に分類でき、南から曲輪群①～曲輪群④となる。八上城の居館奥谷城とは近距離にあり、八上城攻めでは最前線となった可能性がある。

・曾地奥城（丹波篠山市曾地奥）（図－21）

北の八上城からの尾根と曾地奥砦の尾根が接続する場所にあり、岩盤が露出する傾斜地である。八上城主郭までの距離は 2 km 足らずで、重要な地点である。天正 6 年と思われる 9 月 13 日付の光秀書状によると、「十八日ニ八上之城、後之山へをしあかり可陣取候」とあり、「後之山」とは曾地奥砦であろう。曲輪群は西と東に分かれ、西の曲輪群①が八上城につながる尾根の方にあり、東の曲輪群②の削平状態は良好である。

・井上城（丹波篠山市泉）（図－22）

篠山川が北から西に曲流する北西の、標高 361 m にあり、八上城とは篠山川を隔てて相対する環境にある。『篠山封疆志』によると、「天正年中明智ハ八上ヲ囲ミ里民皆乱ヲ避ク、山頂に遺蹟存在セリ」とある注17。規模は東西 440 m、南北 100 m と大規模である。遺構は東西に分かれ、曲輪内部の削平は悪い。西の尾根には「鉄炮山」があり、明智軍が包囲した時に、空鉄炮を放して驚かせたという。



八上城の首塚

(2) 本格的な攻城戦

天正 6 年（1578）9 月 13 日付光秀文書によると、八上城の「後之山」へ陣取り、10 日ばかり逗留するとあり、「人数之儀有次第可被相連候」とある。八上城攻撃の作戦を討議したのであろう。11 月朔日（ついで）付光秀書状によると、八上在陣の小島永明に対し、百人分の兵糧を送ることを約束し、また三田城の荒木平太夫重堅が「山越」で攻めて来る可能性があるため、付城を堅固にし、もし攻めて来る事態が発生したら、すぐに連絡して来る用に指示し、甥の秀満を亀山（亀岡）に向かわせると伝えている。この頃亀山城（亀岡城）の普請を実施しており、八上城攻撃の拠点として構築していた。同 6 年 12 月 19 日の光秀書状によると、小島永明が金山城と国領城（三尾山城）の見廻りを実施し、堅固に守備されていると様子を報告している。だが、同 7 年（1579）正月には、包囲していた小島永明が、波多野方の反撃に遭い、勝山砦で討死した。光秀は永明の死亡に対し、「難成筆者候」と悲しみを表している。また、3 月 3 日には「岩伏」の戦いで活躍した大芋甚兵衛尉を賞し、知行百石の加増を行っている。

籠城側の兵糧問題について、同 7 年 2 月晦日付波多野秀治判物によると、兵庫や惣兵衛に対し徳政文書の発給がみられ注18、『丹波志』によると、「土人曰秀治守城の時、摂州より母子（もうし）の山路を経て兵糧を送る」とあり、母子（兵庫県三田市）経由で八上城に兵糧を運搬したという。八上城の攻城戦は順調に進行したようで、同 7 年 4 月 4 日付の光秀書状によると、籠城衆から助命・退城要求が届いており、餓死者は四、五百人にのぼり退城した者は顔が蒼く餓死寸前であり、五日か十日の内には必ず討ち果たすと述べ、逆要害として、塀、柵、乱杭、逆茂木を嚴重にして落去を待っているという注19。さらに 5 月 6 日付光秀書状によると、「人々請取之所相支、手前へ落来候者ハかり首可捕之候、自余之前へ落候者、脇より取合討捕候事有間敷候」とあり、自分の持ち場を厳守し、他の持ち場へ来た敵を、横から討取ることのないように指示している。また「城落居候とて彼山へ上、さしてなき乱妨ニ下々相懸候者、敵可討洩候間、兼々乱妨可為曲事之由、堅可被申触れ候」とあり注20、落城に際して味方の兵が略奪に走り、混乱の隙を狙って波多野方が逃亡するのを警戒していた。攻城軍の構成は、丹波攻略による混成部隊であり、同 4 年（1576）1 月 15 日の黒井城攻めの失敗を恐れている。

(3) 籠城の様子

籠城の城中の様子を『信長公記』は、「籠城の者既に餓死に及び、初めは草木の葉を食とし、後には牛馬を食し、了簡尽果無体に罷出候を悉く切捨」とあり凄惨な状況が述べられている。籠城途中に八上城から退城した波々伯部氏の家伝に、「時ニ光吉（波々伯部）籠城ノ士ナリ同六（セカ）年ニ城中食糧尽キ困窮ニ及ビ、城主ヲ捕ラエテ降参スベキ内談アリ、光吉既ニ同ゼズ、同志討チニ及ブベキニ及シダタメ、妻ノ兄、荒木山城守、同甚之丞コレヲ聞キ極悪ノ逆臣ニ取り合ワズ、退城スベシト陳言数度昼間ニ及ビ終ニコレヲ諸シ、時刻ヲ約シテ甚之丞西屋曾羅谷口エ迎エ来リ光吉ハ夜更ニ城中ヲ忍ビ出テ、老母ヲ誘ヒ、荒木甚之丞ノ居所ニ退ク、退ク時塀ノ上デ槍ニテ足ノツケ根ヲ突キ貫レタ」とある注21。このように八上城

内は混乱の中にあった。

4 終わりに

『丹波志』によると、八上開城時に明智方が、「籠城の士（侍）は東へ出べし、雑人は西へ出べしと下知す。波多野与三と云者有、籠城の者を東西へわくる事心得あるらしく東へ出る士をば討殺すべき謀計なるべし、西へ出べしとて雑人にまぎれて西へ出るに与三察したるぞと東へ出る者共をば、光秀旗本にて鉄炮の音ニッするやいなや悉く取込みて走人も残らず討殺すなり」と記している。なお、『信長公記』によると、波多野秀治は6月に降伏し、安土城下の慈恩寺（滋賀県近江八幡市）で処刑された。そして黒井城は、天正7年（1579）8月9日に包囲し落城させた。このように光秀は八上城攻めの背後に、赤井氏が控えていた。

註

1 藤田達生・福島克彦、2015年（天正5年）11月17日付明智光秀書状（『明智光秀』、八木書店、）。

2 『渡辺助允覚書』（『松江市史』中世Ⅱ、史料編4、松江市史編集委員会、2014年）。

3 註1と同じ。

4 横河ふみ家文書（『丹波笑路城発掘調査報告書』亀岡市教育委員会、1978年）。

5 （天正6年）4月17日付丹羽長秀書状（『兵庫県史』史料編、中世Ⅱ、兵庫県、1987年）。

6 （天正6年）3月4日付織田信長朱印状（『増訂 織田信長文書の研究』下巻、吉川弘文館、1998年）。

7 藤田達生・福島克彦、2015年（天正6年）9月13日付明智光秀書状（『明智光秀』、八木書店、）。

8 藤田達生・福島克彦、2015年（天正6年）11月朔日付明智光秀書状（『明智光秀』、八木書店、）。

9 藤田達生・福島克彦、2015年（天正6年）11月19日付明智光秀書状（『明智光秀』、八木書店、）。

10 藤田達生・福島克彦、2015年（天正7年）9月23日付明智光秀書状（『明智光秀』、八木書店、）。

11 註10と同じ。

12 藤田達生・福島克彦、2015年（天正6年）極(12)月20日付明智光秀書状（『明智光秀』、八木書店、）。

13 註12と同じ。

14 『三田市史』第三巻、（兵庫県三田市、2000年）。

15 八上城研究会、2000年『戦国・織豊期城郭論』―丹波国八上城遺構に関する総合研究―）。

16 八上城研究会、2000年、永禄2年12月11日付内藤宗勝判物写（戦国・織豊期城郭論』―丹波国八上城遺構に関する総合研究―、）。

17 『篠山封疆志』とは篠山藩の松崎欄谷が享保元年（1716）に、藩内の古蹟・寺社・名産を記述した書物である。

18 註15と同じ。

19 藤田達生・福島克彦、2015年（天正7年）卯(4)月4日付明智光秀書状（『明智光秀』、八木書店、）。

20 藤田達生・福島克彦、2015年（天正7年）5月6日付明智光秀書状（『明智光秀』、八木書店、）。

21 中野卓郎、1990年、「中世の土豪、波々伯部氏とその菩提寺」（『歴史と神戸』162号、神戸史学会）。

播磨三木城攻めの付城群

金松 誠

1 はじめに

天正6（1578）年3月から天正8年1月17日までの1年10か月にわたり、羽柴秀吉を主将とする織田信長方と三木城主別所長治方との合戦が繰り広げられた。これを三木合戦という。その合戦の舞台となった三木城跡とそれを攻略するために築かれた織田方の付城跡群・多重土塁については、開発の波にさらされながらもその多くが現存している。

1980年代以降の宮田逸民氏の一連の研究により、その存在は注目を浴びることとなった（宮田 1982・1991・2010）。そして、三木市教育委員会においても、保存に向けた調査研究に取り組み、その多くは国指定史跡「三木城跡及び付城跡・土塁」となっている。

本報告では、以下の作業を行う。①付城跡群を類型化する。②文献史料からわかること、遺跡からわかることを明確にする。以上の作業を通して、主に遺跡から三木城包囲網戦の実態について迫る。

2 文献史料から見た三木合戦

表1参照

3 付城跡群から見た三木合戦

（1）概要

三木合戦の際、織田方は三木城攻略のために平井山に本陣を置き、周囲に数多くの付城を築いた。付城は三木城の周囲を東西約6km、南北約5kmの範囲に展開する。付城群については、近世に作成された『播磨鑑』（宝暦12〈1762〉年）、『別所軍記』（17世紀後半以降）、『播州三木城地図』（天保12〈1841〉年）などには織田方の付城が数多く記されている。『播磨鑑』は「三木城寄衆次第」として付城一覧を記載しており、『別所軍記』もほぼ同様の記事を載せる。これらの史料から、付城群の総数については、推定も含めて約40城が存在していたとみられる。三木市が遺跡として把握しているものは28城ある(図1)。そのうち、明確な付城跡が確認できたものは24城、現存しているものは21城を数える。

本報告では、明確な付城跡として把握している24城のみを対象として検討する。

（2）構造

付城の類型化（表2）

陣城プランの特徴は基本的に本郭部と駐屯地の二重構造で成り立っていることが従来指摘されている(多田1989)。よって、この基本プランのあり方から、以下のとおりに類型化する。

- A 土塁・溝で区画された空間と周囲の尾根上に軍勢の駐屯地を配するタイプ
羽場山上付城跡（図2）、二位谷奥付城跡C（図3）
- B 本郭部は土塁囲みの小規模な方形単郭の主郭のみで構成され、周囲の尾根上に軍勢の駐屯地を配するタイプ
平井村中村間ノ山付城跡（図4）、跡部村山ノ下付城跡（図5）、加佐山城跡、二位谷奥付城跡B
- C 本郭部は大規模な主郭のみで構成され、谷に雛壇状曲輪群を配するタイプ

- 久留美村大家内谷上付城跡、和田村四合谷村ノ口付城跡（図 6）
- D 土塁囲みの主郭以外に核となる曲輪があり、谷に雛壇状曲輪群を配するタイプ
平井山ノ上付城跡（図 7）、慈眼寺山城跡、平田村山ノ上付城跡
- E 土塁囲みの主郭以外に核となる曲輪があり、周囲の尾根上に軍勢の駐屯地を配するタイプ
八幡谷ノ上明石道付城跡 A・B・C（図 8）
- F 土塁囲みの主郭と副郭の序列が明確で、谷に雛壇状曲輪群を配するタイプ
這田村法界寺山ノ上付城跡（図 10）、君ヶ峰城跡（図 9）
- G 折を伴う曲輪の周囲に土塁や堀を設け、周囲の尾根上に軍勢の駐屯地を配するタイプ
高木大塚城跡（図 11）、高木大山付城跡、八幡谷南付城跡
- H 土塁囲みの主郭に馬出・外柵形などの複雑な虎口が設けられ、周囲の台地上に軍勢の駐屯地を配するなど、主郭に対して求心的な構造を基本とするタイプ
シクノ谷峯構付城跡、明石道峯構付城跡（図 12）、小林八幡神社付城跡、三谷ノ上付城跡、二位谷奥付城跡 A（図 13）
基本的には A は簡素な構造であり、H に至るにしたがってより高度な構造となっていく。

（3）付城の構成

付城群の構成を考えるにあたり、まずその立地について検討する。

- 三木城を中心とした方角的な立地的特徴について、以下の 4 つに分類することができる。
- I 三木城から美囊川・志染川を隔て北の山上に位置する付城群
平井山ノ上付城跡、平井村中村間ノ山付城跡、慈眼寺山城跡、久留美村大家内谷上付城跡、跡部村山ノ下付城跡、加佐山城跡、平田村山ノ上付城跡
- II 三木城南側に位置し、多重土塁と連動している付城群
這田村法界寺山ノ上付城跡、高木大塚城跡、高木大山付城跡、シクノ谷峯構付城跡、明石道峯構付城跡、小林八幡神社付城跡、八幡谷南付城跡、君ヶ峰城跡
- III 三木城南側の多重土塁の内側にあり、三木城に対して比較的近接している付城群
羽場山上付城跡、八幡谷ノ上明石道付城跡 A・B・C、三谷ノ上付城跡、二位谷奥付城跡 A、二位谷奥付城跡 B、二位谷奥付城跡 C
- IV 多重土塁より外側に位置する付城
和田村四合谷村ノ口付城跡
次に、立地と類型を絡めてみると、以下の通りとなる。
- I－B 平井村中村間ノ山付城跡、跡部村山ノ下付城跡、加佐山城跡
C 久留美村大家内谷上付城跡
D 平井山ノ上付城跡、慈眼寺山城跡、平田村山ノ上付城跡
- II－F 這田村法界寺山ノ上付城跡、君ヶ峰城跡
G 高木大塚城跡、高木大山付城跡、八幡谷南付城跡
H シクノ谷峯構付城跡、明石道峯構付城跡、小林八幡神社付城跡
- III－A 羽場山上付城跡、二位谷奥付城跡 C
B 二位谷奥付城跡 B
E 八幡谷ノ上明石道付城跡 A・B・C

- H 三谷ノ上付城跡、二位谷奥付城跡 A

IV－C 和田村四合谷村ノ口付城跡

立地 I の付城群は、地形に合わせて曲輪を上下に連ねる構造のものが多く、背後の尾根続きに対して、堀切などがほとんど見られず、遮断防御はあまり意識していない。全体的に切岸防御主体の縄張といえる。三木城が美囊川・志染川を隔てており、比較的安全な地域であったのであろう。

立地 II の付城群は、三木城南側の最も外側に位置し、主に比較的平坦な台地上に立地している。這田村法界寺山ノ上付城跡を除き大規模な付城はみられないが、土塁囲みの主郭に、馬出・外柵形などの複雑な虎口が設けられ、周囲に軍勢の駐屯地を付属させるなど、主郭に対して求心的な構造を呈する F・H タイプ及びそれに準ずる G タイプで占められる。付城間を多重土塁で連結している。これらは、毛利方が明石浦魚住から三木城へ兵糧を搬入するのを防ぐための最前線であるため、より高度な縄張技術が用いられたものと考えられる。ほとんどの付城において、虎口などの防御遺構が三木城方向ではなく、兵糧搬入方向に向いていることが、その重要性を物語っている。

立地 III の付城群は、三木城南側の最前線に立地する。多重土塁では結ばれていない。E タイプの八幡谷ノ上明石道付城跡 A・B・C は明石道を抑える一体の付城と考えられる。尾根全体を城郭化しており、大規模化している。三木城側に当たる A により発達した縄張を設け、南端の C は軍勢の駐屯地となっている。このように考えると、二位谷奥付城跡 A・B・C についても、同一尾根上に全長約 580m にわたって立地するという点において、一城別郭構造として評価した方が適切ともいえる。III の付城群は、八幡山・二位谷奥の広範囲を城郭化した大軍勢が駐屯可能な付城を中心とし、主要街道を押さえるという、力攻めを意識した最前線の付城群と評価できる。

立地 IV の付城は、C タイプの和田村四合谷村ノ口付城跡のみ該当する。志染川を抑える立地であることから、主に河川ルートによる東側からの兵糧搬入を阻止する目的で築かれたものといえる。大人数の軍勢が駐屯できたものと考えられる。

（4）築城時期

文献史料により大まかに 3 期に分けられる。まず、第 1 期は天正 6（1578）年 7 月下旬から 8 月中旬、織田信忠の主導により、羽柴秀吉等が平井山以下の付城を築いた。

第 2 期は翌 7 年 4 月、信忠以下が再度播磨に入り付城 6 か所を築き、さらに 6 月に秀吉が付城数か所を築くとともに三木・魚住の通路を塞ぐために、君ヶ峰城を始めとする周辺の付城の間に番屋・堀・柵などの防御施設を設置している。

第 3 期は同年 10 月 7 日、平田大村合戦に勝利した秀吉が、南は「八幡山」、西は「平田」、北は「長屋」、東は「大塚」に付城を築き、三木城包囲網を狭めた。

第 1 期については、平井山ノ上付城跡の築城は確実である。その一連で考えると、I の三木城から美囊川・志染川を隔て北の山上に位置する付城群が主に該当すると考えられる。IV の和田村四合谷村ノ口付城跡についても、多重土塁の外側に築かれており、それよりも以前の構築と考えられることから、第 1 期の築城とみてよからう。

第 2 期については、信忠以下が付城 6 か所を一時期に築いたことから、この 6 城は立地・構造において、規則的なものである可能性が高い。F・G・H タイプで占められる三木城南側の最も外側に築かれた立地 II の 8 城のうち 6 城はこれに該当する可能性が高い。それ以外は、6 月に秀吉が構築した付城もしくは番屋に相当するものと考えられる。

第3期は三木城包囲網をさらに狭めていることから、最前線に築かれたⅢの立地の付城群がそれに該当すると考えられる。南の「八幡山」は大宮八幡宮の裏山を指すとみられ、八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・Cのほか、二位谷奥付城跡Aや三谷ノ上付城跡もその範囲に含まれる可能性が高い。

4 おわりに

付城群全体を通して、発掘調査の結果、出土遺物については、格段に少ないことも特徴としてあげられる。臨時の軍事施設という特性がこの点からもうかがうことができる。

織田方による三木城攻めは、合戦の進捗に応じた戦略を持って、それに適した付城群・多重土塁を構築し包囲網をより強固なものにしていき、「三木の干し殺し」を完結させた。この合戦で得た兵糧攻めの戦術や縄張技術は、天正9年の鳥取城攻めやそれ以降の合戦においても継承されたのである。

以上のとおり、三木城攻めの付城群と多重土塁は、その多くが現存し、文献史料と遺跡によって、合戦の過程や全容を具体的に把握することができるという、全国的に見ても稀有な遺跡群といえる。そのことは、織豊系城郭の発達過程や当時の合戦のあり方を知る上でも、欠かすことができない重要な研究資料であることをも意味する。さらに、戦国・織豊期における、付城と付城を多重土塁で連結させて広範囲に堅固な包囲網を形成させた最初の事例であることから、極めて貴重な遺跡群であり、その歴史的価値は高いといえよう。

主要参考文献

金松誠　2021　『秀吉の播磨攻めと城郭』　戎光祥出版

　　　　　2025　『播磨三木城攻めの付城群』『畿内近国の城郭と縄張技術』　戎光祥出版

多田暢久　1989　「陣城プランの特徴について－賤ヶ岳陣城群を中心に－」『近江の城』32　近江の城友の会

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1995　『三木市加佐山城跡・慈眼寺山城跡』　兵庫県教育委員会

兵庫県立考古博物館　2011　『吉田住吉山遺跡群』　兵庫県教育委員会

三木市教育委員会　2000　『高木古墳群・高木多重土塁』1・2

　　　　　2010　『福井土塁E遺跡』

宮田逸民　1982　「播州平井山陣城－三木合戦における秀吉の陣所－」『賀毛』9　賀毛郷土研究会

　　　　　1991　「織田政権と三木城包囲網－秀吉による「三木の干殺し」の検証－」『歴史と神戸』30－6　神戸史学会

　　　　　2010　「三木城跡・付城跡群・多重土塁の縄張り現状」『三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』　三木市教育委員会

村井祐樹　2024　「秀吉の報・連・相－中国攻めをめぐる－」『中世史料との邂逅－室町・戦国・織豊期の文書と記録』思文閣出版

表 1　三木合戦年表

西暦	和暦	日付	三木合戦に関する主な出来事
1578	天正6年	2月23日	羽柴秀吉、播磨国へ出陣し、書写山に在陣。（『信長公記』）
		3月初め	別所長治、織田信長に叛旗を翻す。長治の叔父重棟、数十度にわたり長治の説得に努めるが、不調に終わる。その後、秀吉、三木城へ押し寄せ、近隣に火を放つ。（『播州御征伐之事』）
		7月20日	神吉城が落城、ついで志方城が陥落。（『信長公記』、「羽柴秀吉書状」『上村氏所蔵文書』）
		7月下旬	織田方、神吉・志方両城の陥落を機に、総勢で三木城を攻め、三木城包囲の付城を構築。（『信長公記』）※第1期築城
		8月17日	織田信忠、多くの向城を構築し、平井山を秀吉の本陣として引き渡して、播磨から帰陣する。（『信長公記』・『豊鑑』）
		9月15日	秀吉、浅野長政等に対し、別所重棟のもとに置かれている葺板について、此方（平井山ノ上付城か）で建築中の10間×5・6間の家の屋根を葺くために、早々に持参するよう命じる。合わせて、三木城への兵糧以下の搬入通路を塞ぐことを堅く申し付ける。（「羽柴秀吉書状」『浅野家文書』）
		10月15日	秀吉、津田宗及を招いて「播州三喜の付城」（平井山ノ上付城か）で茶会を催す。（『津田宗久茶湯日記』）
		10月22日	長治弟治定、秀吉の平井山ノ上付城を攻めるも討死（平井山合戦）。（『播州御征伐之事』）
1579	天正7年	4月12日	織田信忠・織田信雄・織田信包・織田信孝、播磨へ出陣。猪子兵助・飯尾隠岐守の兩人、三木表付城普請の検使として同勢に添えられ、播州へと下向。（『信長公記』）
		4月26日	信忠、新たに6か所の付城の構築を命じる。（『信長公記』）※第2期築城（前半）
		5月25日	秀吉方、丹生山の海蔵寺砦を夜中に忍び入って乗っ取る。（『播州御征伐之事』）
		5月26日	淡河城開城。『信長公記』）
		6月頃	毛利方による明石浦魚住から三木城への兵糧搬入に対し、秀吉方は、三木・魚住の通路を塞ぐために、君ヶ峰城を始めとする周辺の付城の間に番屋・堀・柵などの防御施設を設置する。（『播州御征伐之事』）※第2期築城（後半）
		6月18日	秀吉、長浜留守居の一牛斎能得に対し、三木城攻めの付城等を数か所構築した旨を伝える。（「羽柴秀吉書状」『思文閣古書資料目録』218）※第2期築城（後半）
		7月8日	信長側近衆山口秀景、秀吉の祐筆玄斎に対し、先日三木城に対する付城の絵図を送ってもらったことに礼を述べ、近々と砦を構築していることから、三木城を落とすのはさほど時間はかからないであろうと褒めたたえる。（『羽柴家文書写』）
		9月10日	安芸・雑賀・播磨の軍勢、三木城に兵糧搬入を試みる。三木城に籠る城兵もこれに加わり、谷大膳の陣所へ攻め入り、これを討ち果たす。双方ともに多くの戦死者を出す（平田大村合戦）。（『信長公記』・「羽柴秀吉書状」『福岡市博物館所蔵文書』）
		10月7日	秀吉、さらに三木城に対する包囲を狭め、南は八幡山から、西の平田、北の長屋、東の大塚にいたるまで三木城から5・6町付近に付城を築く。ついで、高さ1丈余りの築地を築いて、石を入れ込んだ二重の塀を設け、重ねがさねに柵を設置する。川面には蛇籠を伏せて梁杭を打ち込み、橋上に見張りを置いて監視する。辻々には門を設けて秀吉の近習を交代に番におき、付城守将の通行手形のない者を一切通さないようにし、夜でも篝火を焚いて白昼のようであったという。（『播州御征伐之事』）※第3期築城
		12月8日	信長側近衆の下石頼重等、秀吉に対し、柴田源左衛門・魚住隼人から説明を受け、三木城の付城の絵図を各々が見て驚いたこと、落城には時間がかからないことを伝え、別所は羽が生えて飛び立つよりほかに抜け出すことが不可能であろうことを連名で伝える。（『羽柴家文書写』）
1580	天正8年	1月6日	秀吉、三木城南側を守備する宮ノ上要害を調略により乗っ取る。ついで、城下の三木町全体を押し破り、多くの敵を討ち取る。（「羽柴秀吉書状」『反町文書』・『播州御征伐之事』）
		1月11日	秀吉、午の刻に「三木本城」と「堀一重」を隔てた「鷲山と申構」（南構）を乗り崩し、別所友之・賀相の居城（鷹尾山城・新城）を乗り破る。新城には、羽柴秀長を置き、秀吉は鷹尾山城に入る。（「羽柴秀吉書状」『反町文書』）
		1月15日	秀吉、長治に降伏勧告。長治、これを受諾。（『信長公記』）
		1月17日	長治、一族等とともに自害し、三木開城。（『信長公記』）

表2　付城類型一覧

類型	付城名	遺跡番号	立地	標高(m)	比高(m)	面積(m ²)	三木城本丸～主郭間の距離(km)
A	羽場山上付城跡	26	Ⅲ	93	48	947	1.3
	二位谷奥付城跡C	33	Ⅲ	123	21	858	2.1
B	平井村中村間ノ山付城跡	9	I	130	51	2039	2.9
	跡部村山ノ下付城跡	13	I	74	14	996	1.4
	加佐山城跡	14	I	138	80	2078	1.9
	二位谷奥付城跡B	32	Ⅲ	122	22	328	2
C	久留美村大家内谷上付城跡	12	I	78	26	19491	1.7
	和田村四合谷村ノ口付城跡	34	Ⅳ	96	34	11394	3.1
D	平井山ノ上付城跡	8	I	145	76	50654	2.7
	慈眼寺山城跡	11	I	148	72	5789	2.3
	平田村山ノ上付城跡	15	I	121	68	13405	1.8
E	八幡谷ノ上明石道付城跡A	27	Ⅲ	94	35	13983	1.3
	八幡谷ノ上明石道付城跡B	28		103	43		1.35
	八幡谷ノ上明石道付城跡C	29		108	48		1.5
F	這田村法界寺山ノ上付城跡	18	Ⅱ	78	43	16727	2.2
	君ヶ峰城跡	25	Ⅱ	137	49	8639	1.4
G	高木大塚城跡	19	Ⅱ	88	33	2543	2.1
	高木大山付城跡	20	Ⅱ	91	31	535	2.2
	八幡谷南付城跡	24	Ⅱ	116	25	562	2.1
H	シクノ谷峯構付城跡	21	Ⅱ	98	28	2936	2.3
	明石道峯構付城跡	22	Ⅱ	106	32	4733	2.05
	小林八幡神社付城跡	23	Ⅱ	120	22	5078	2.4
	三谷ノ上付城跡	30	Ⅲ	113	31	2007	1.5
	二位谷奥付城跡A	31	Ⅲ	119	31	2571	1.55

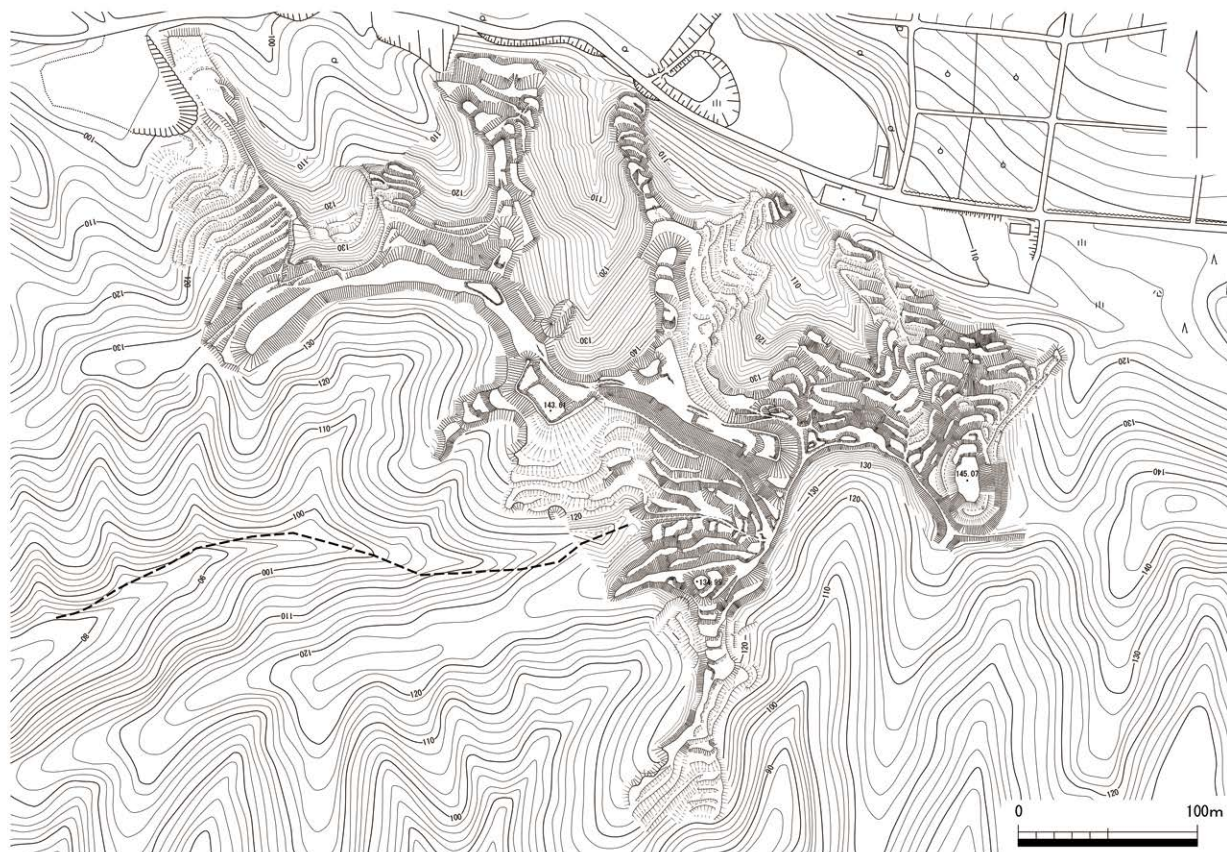


図7 D 平井山ノ上付城跡 縄張図 (金松誠作図)
(赤色立体地図をベースに三木市教育委員会作成の測量図を改変)

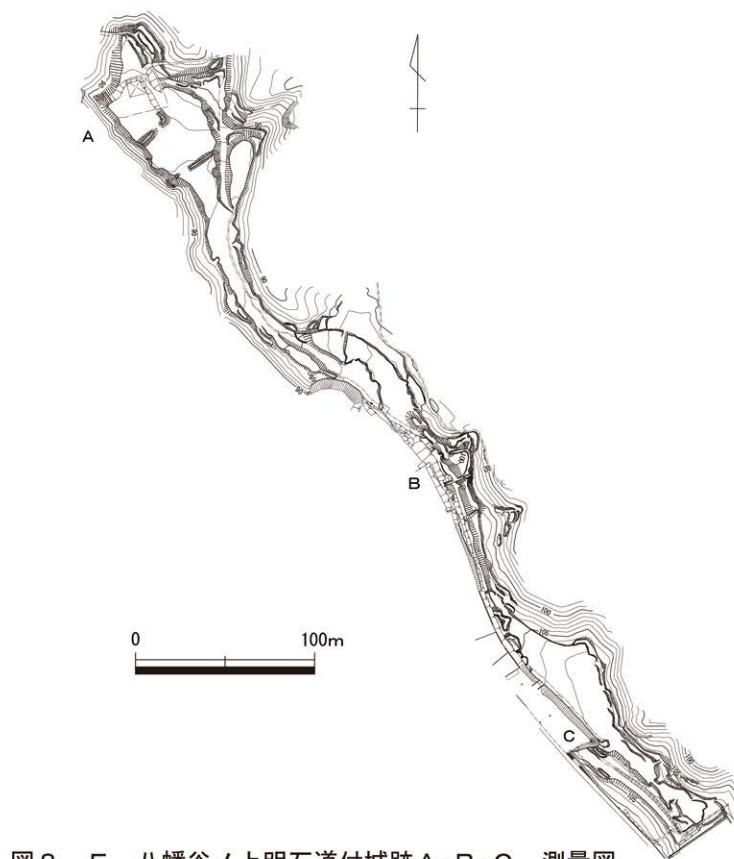


図8 E 八幡谷ノ上明石道付城跡A・B・C 測量図

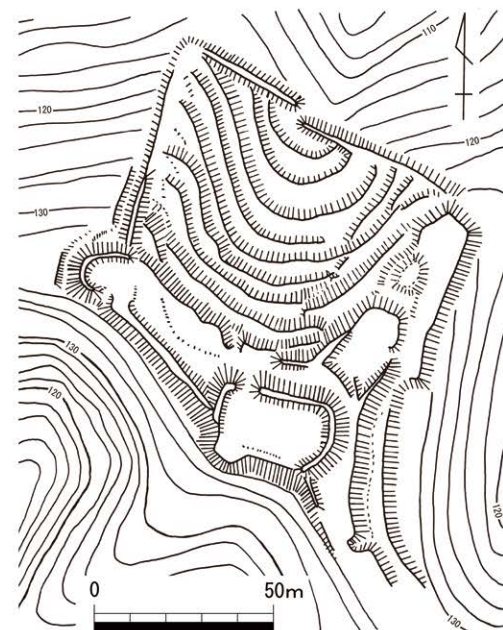


図9 F 君ヶ峰城跡 縄張図
(宮田逸民氏作図)

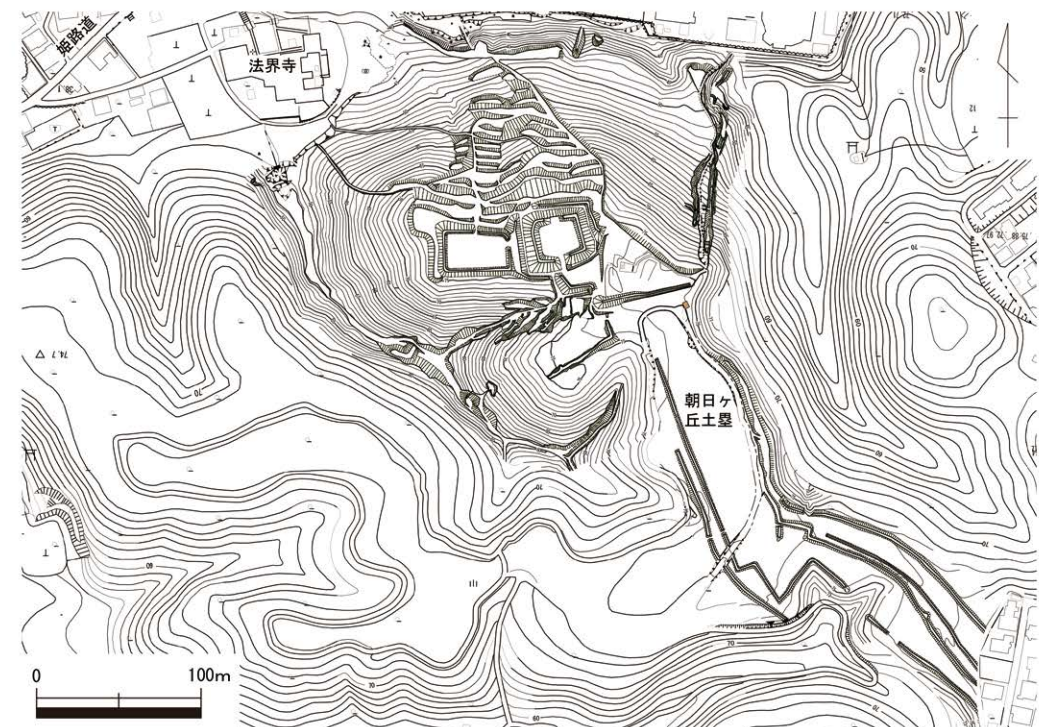


図10 F 這田村法界寺山ノ上付城跡 測量図

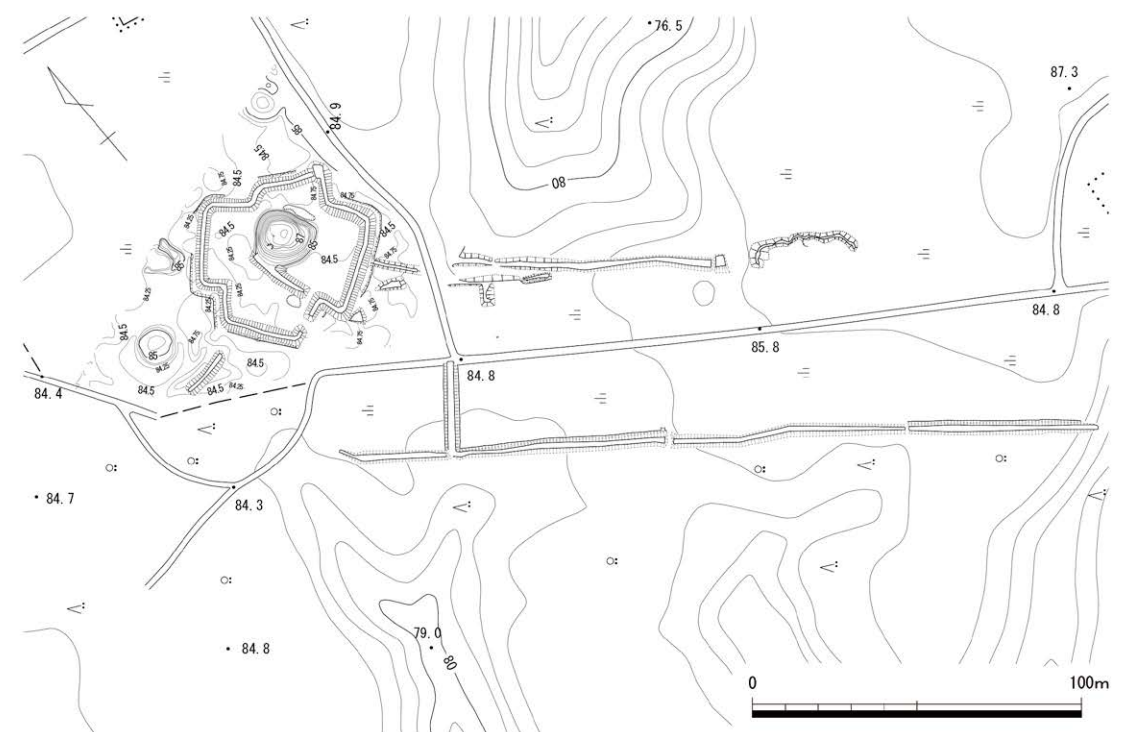


図11 G 高木大塚城跡・高木大塚土塁 測量図

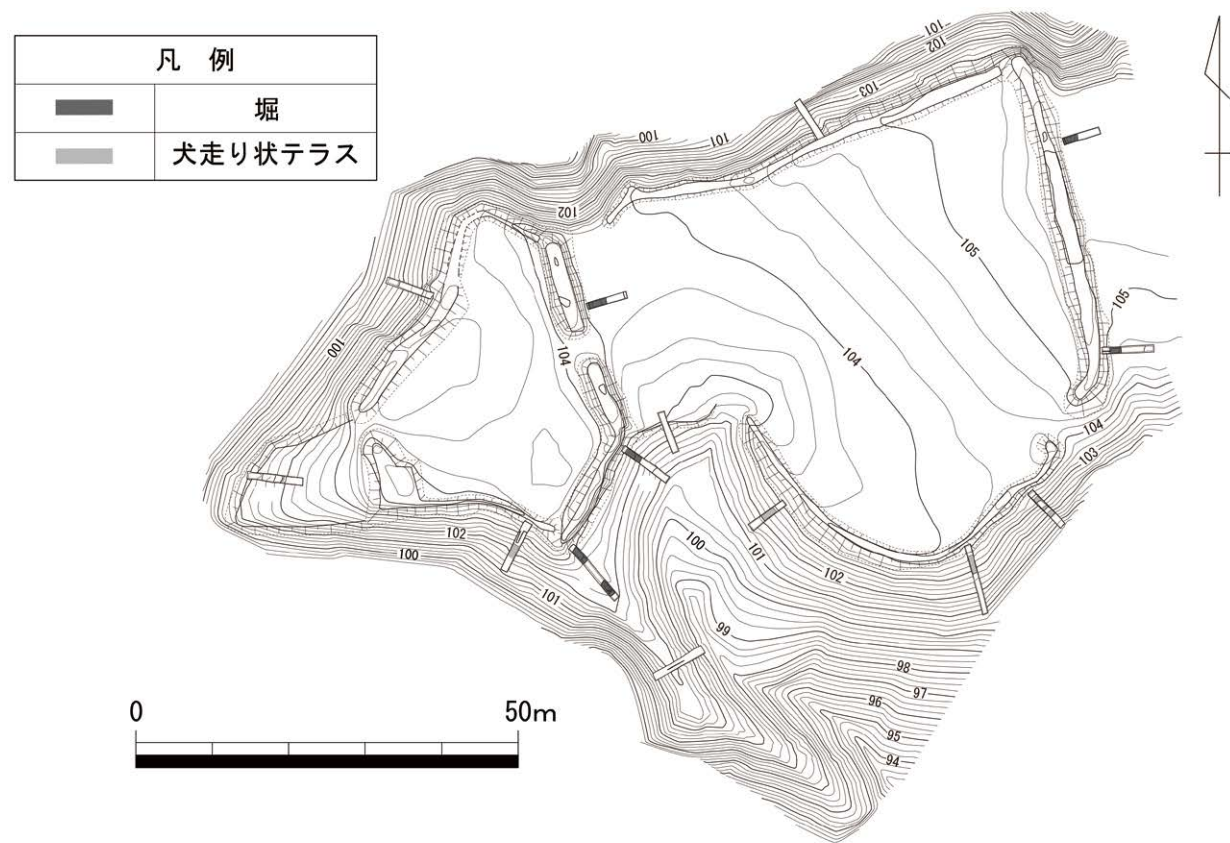


図12 H 明石道峯構付城跡 測量図

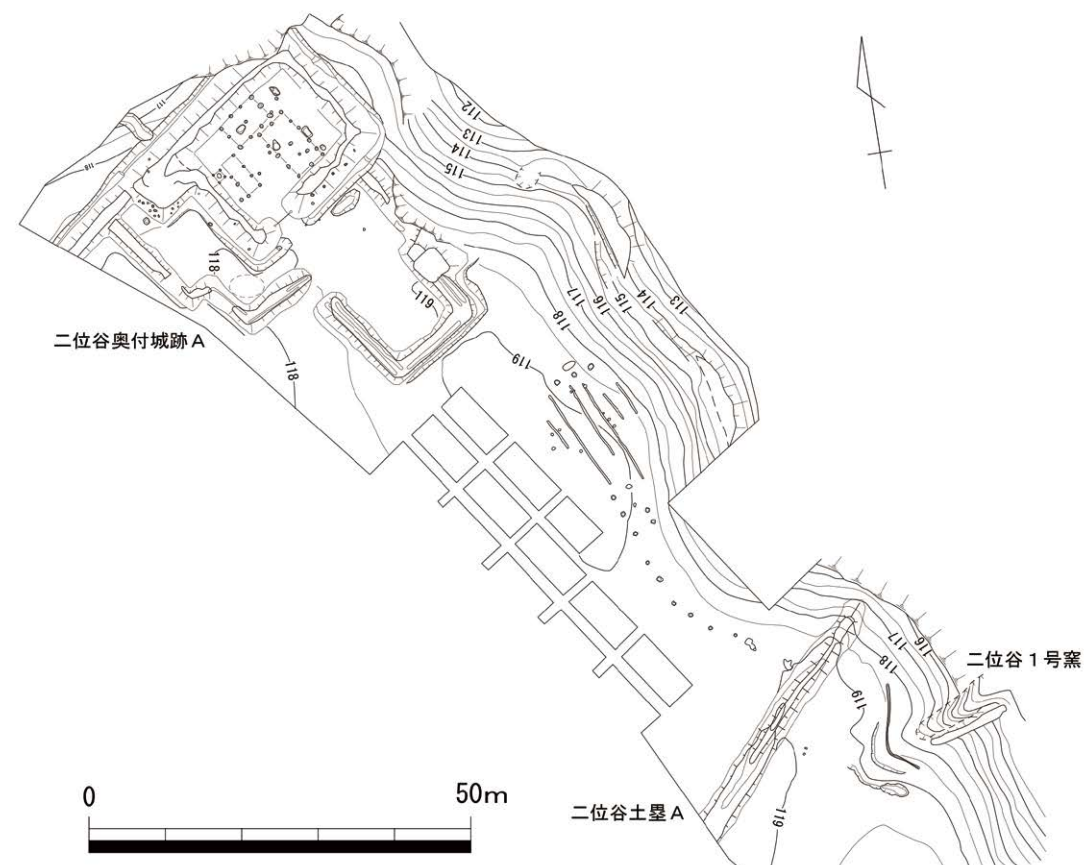


図13 H 二位谷奥付城跡A 測量図（兵庫考古学研究会作成）

秀吉の鳥取攻めと付城群

西尾孝昌

1. はじめに

2. 史料にみる秀吉の因幡攻め

① 第1次因幡攻め（天正8年4～6月）

- * 因幡の諸城を攻略（若桜鬼ヶ城・私部城・生山城・用瀬城・鹿野城・吉岡城・岩常城など）
- * 鳥取城包囲→山名豊国の降伏（6月初旬）
 < 豊国は小姓十～二十人と共に鳥取城を出て上洛 >
- * 鹿野城（「因伯仕切りの城」）攻撃
- * 因幡の知行割→若桜鬼ヶ城（八木豊信）・私部城（山名氏政）
 岩経城（垣屋光成）・鹿野城（亀井茲矩）
- * 毛利方、鳥取城奪回（9月）→吉川経家の鳥取城入城（天正9年3月18日）

【史料1】因幡・伯耆両国に至て、羽柴発向の事（『信長公記』巻十三）天正八年六月

播州しそ（宍粟）郡に楯籠る宇野民部、

六月五日、夜中に退散。木下平太輔・蜂須賀小六追い懸け、心ばせの侍ども帰し合
 わせ合わせ、爰かしこにて相戦ひ、歴々の者ども数十人討ち捕り、翌日

六月六日、此の競ひを以て、因幡・伯耆境目に至りて相働き、所々に煙を挙げらる
 ゝのところに、東国の御人数発向の由申し候て、馳せ向ふべき行は一切にこれなく、
 国端の城主縁々を以て降参の御断り申し、人質進上候て、御礼申し上げ候はんの由、
 言上候ところ、御悦び斜めならず。羽柴筑前守秀吉条々、名誉の旨、信長公御感（じ）
 なされ候へキ。

② 第2次因幡攻め（天正9年6月下旬～10月下旬）

- * 秀吉の鳥取城兵糧攻め→三重の包囲網の完成
 ▲鳥取城包囲網、鳥取城への交通路・海路の遮断、
 南條・宇喜多等有力国人の寝返り
- * 吉川経家の切腹（享年35才）と鳥取城の落城（天正9年10月25日）
- * 戦後処理（因幡の知行割）
 鳥取城（宮部継潤）・桐山城（垣屋光成）・吉岡城（多賀備中守）
 若桜鬼ヶ城（荒木重堅）～用瀬景石城（磯部康氏）・智頭（八木豊信）
 鹿野城（亀井茲矩）

【史料3】因幡国鳥取城取り詰め之事（『信長公記』巻十四）天正九年六月

六月廿五日、羽柴筑前守秀吉、中国へ出勢、打ち立つ人数二万余騎。備前・美作打ちこ
 し、但馬口より因幡国中へ乱入、橘川（吉川）式部少輔楯籠るとつとりの城、四方離れて
 嶮（さが）しき山城なり。因幡の国は、北より西は滄海（そうかい）漫々たり。とつとり
 と、西の方、海手（うなて）との真中、廿五町隔て、西より東南町際へ付きて流る大河
 あり。此の川舟渡しなり。とつとりへ廿町程隔て、川際につなぎの出城あり。又、海の口
 にも取り継ぐ要害あり。芸州より味方引き入るべき行（てだて）として、二ヶ所拵へ置き
 たり。とつとりの東に、七、八町程隔て、並み程の高山あり。羽柴筑前、彼の山へ取り上
 り、是れより見、下墨（さげす）み、即ちこの山を大將軍（信長）の居城に拵へ、即時に

とつとりを取りまかせ、頓（やがて）又、二ヶ所のつなぎの出城の間をも取り切り、是れ又、鹿垣結ひまわし、とり籠（こ）め、五・六町、七・八町宛に、諸陣近々と取り詰めさせ、堀を掘っては尺を付け、又堀を掘っては塀を付け、築地高々とつかせ、透間（すきま）なく、二重・三重の矢蔵を上させ、人数持面々等の居陣に矢蔵を丈夫に構へさせ、後巻（あとまき）の用心に、後陣の方にも堀をほり、塀・尺をつけ、馬を乗りまはし候へども、射越しの矢にあたらぬ如くに、まはれば二里が間、前後に築地高々とつかせ、其の内に陣屋を町屋作りに作らせ、夜は手前手前に篝火（かがりび）たかせ、白中（白昼）の如くにして、廻番丈夫に申し付け、海上には警固舟をおき、浦々焼き払ひ、丹後・但馬より海上を自由に舟にて兵糧届けさせ、此の表一着の間は、幾年も在陣すべき用意、生便敷（おびたしき）次第なり。芸州より後巻候はゞ、二万余騎の人数の内、数千挺の弓・鉄炮勝ち出し、一番に矢軍（やいくさ）させ、其の後、構へ懸り候はんに思ふ程、手を砕かせ、瞳（どう）と切りかかって、悉く討ち果たし、中国一篇に申しつくべき手当堅固なり。

【史料4】山縣長茂覚書（『石見吉川家文書』） 寛永二十一年十一月十一日（中略）

一、天正九年巳辛、羽柴筑前守殿因（因幡）出張の通り、堺目より告げ来り候、加勢之事、式部少輔（吉川経家）森下・中村より申し下され候、元春様未だ御出陣無く、元長様伯 州八橋の城に御座成され、鳥取へ今田孫十郎、丸山境に与三右衛門差上げらるるの事、

一、鳥取籠城衆、今田孫十郎・朝枝加賀・山縣筑後・森脇内蔵大夫・野田左衛門尉・武永四郎兵衛・井下新兵衛・井尻又右衛門・高助左衛門・長和三郎右衛門・大草玄蕃・長岡 信濃、此の外近習衆、舟手衆、中間衆、方角従国衆杉原播磨盛重内横山弥太郎・南方半 介、官道政吉より同名弾正、古志因幡より同名蔵人、有地右近より同名左京等、芸州より加番都合四百餘之有り候、

一、丸山に塩冶周防、佐々木三郎左衛門、奈佐日本助、加番山縣左京、堺与三右衛門、近習衆、小石見衆、舟手衆、中間衆、人数積りは睨（しかと）存ぜず事、

一、天正九年巳辛六月下旬、因但境に至り、羽柴筑前（秀吉）殿御出馬、同七月五日、羽柴小一郎（秀長）殿大將として、藤堂与右衛門（高虎）已下二、三万騎を引率し、丸山（丸山城）東方吹上浜へ打上げ、丸山を見合い、頓（とみ）に打入らるるの事、

一、同七月十二日未明に、筑前守（秀吉）殿猛勢を引率し、鳥取（城）東北の高山（帝釈山・「太閤ケ平」）へ打上げ、本陣に定められ、田間の流尾に堀尾茂介・一柳市介陣取り、田間（湿地か）は町より外に袋川水堀の如く之れ有り、此の川を前に置き向い、浅野矢兵衛・中村孫平次・小寺官兵衛・蜂須加彦右衛門、鳥取（城）と丸山（城）の間、鴈金山は宮部善乗坊（継潤）・掛屋駿河守（垣屋豊統）、丸山は小一郎殿の一手衆、海上は荒木平大夫を以て数百艘で警固、更に透き間無く陣取りの事、

一、十二日の荒寄せには四、五町程の近陣なり、翌日より筑前守殿日々陣廻り、寄退く諸陣取り、塀・堀・柵木取続き、十、廿間に矢倉（櫓）を構え、笄（篝火）を焼き、袋川には乱杭・縄網を張り、堅固の躰の事、

一、西口は仙大（千代）川有り、渡し口は一城構え、杉原七郎左衛門陣取り、此の大河かる（賀露）の湊へ落ち合い、因幡国中舟入りの事、
（中略）

【史料17】因幡国鳥取果て口の事（『信長公記』卷十四）天正九年十月

今度、因幡国とつ鳥一郡（群）の男女、悉く城中へ逃げ入り、楯籠り候。下々、百性以下、長陣の覚悟なく候の間、即時に餓死に及ぶ。初めの程は、五日に一度、三日に一度、鐘をつき、鐘次第、雑兵悉く柵際まで罷り出で、木草の葉を取り、中にも稻かぶを上々の

食物とし、後には是れも事尽き候て、牛馬をくらひ、霜露にうたれ、弱き者は餓死際限なし。餓鬼の如く瘠せ衰えたる男女、柵際へ寄り、悶え焦がれ、引き出し扶（たす）け候へとさけび、叫喚（きょうかん）の悲しみ、哀れなる有様、目も当てられず。鉄砲を以て打ち倒し候へば、片息したる其の者を、人集まり刀物（刃物）を手々に持って続節（つぎぶし）を離ち、実取り候へキ。身の内にても取り分け、頭（こうべ）能きあぢはひありと相見へて、頸をこなたかなたへ奪ひ取り、逃げ候へキ。兎に角に、命程強面（つれなき）の物なし。然れども、義に仍つて命を失う習ひ大切なり。城中より降参の申し様、吉川式部少輔、森下道祐、（奈佐）日本介、三大将の頸を取り進（まい）らすべく候間、残党扶け出だされ候様にと、詫言申し候間、此の旨、信長公へ伺ひ申さるゝところ、御別義なきの間、則ち、羽柴筑前守秀吉同心の旨、城中へ返事候のところ、時日移さず、腹を切らせ、三大将の頸持ち来たり候。

十月十五日、取鳥籠城の者扶け出ださる。余りに不便（不愍）に存知せられ、食物与へられ候へば、食にゑひ（酔ひ）、過半頓死候、誠に餓鬼の如く瘠せ衰えて、中々哀れなる有様なり。取鳥相果て、城中普請掃除申しつけ、城代に宮部善祥坊（継潤）入れおき訖（おわ）んぬ。

3. 鳥取城（山上の丸・山下の丸）の遺構（第4図・第5図）

4. 秀吉の付城市群の遺構

①「太閤ケ平」（本陣）周辺（第6・7・8・9・10・11図）

＊太閤ケ平（大手・搦手虎口、方形の土塁囲み、全周する横堀、2つの櫓台）、
＊4つの砦（「伝・秀長の陣」など）を連結した二重の横堀・堅堀ライン

②「寺家敷」の陣城＝中世寺院を陣城に改修（第12図）

③瓢箪池北西の陣城遺構（第13図）

④樗谿神社北側尾根の遺構（第14図）

⑤五反田の遺構（第15図）

⑥八幡山の遺構（第16図）

⑦円護寺の遺構（第17図）

⑧妙見向平の遺構（第18図）

⑨鳥取城北西尾根の遺構

道祖神の上城・道祖神城・天徳寺山城・雁金山城（第19図）・
行者堂上城（第20図）など

⑩鳥取城北西端の遺構

伝・羽柴秀次の陣（第21図）、丸山城の遺構（第22図）

⑪丸山城北側の遺構

昼食山城の遺構（第23図）・中ノ郷中学北側の遺構（第24図）

12西桂見の土塁（湖山池南端）（第25図）

5. おわりに

①陣城の縄張りは一様ではなく、いくつかの類型に区分できそうである。

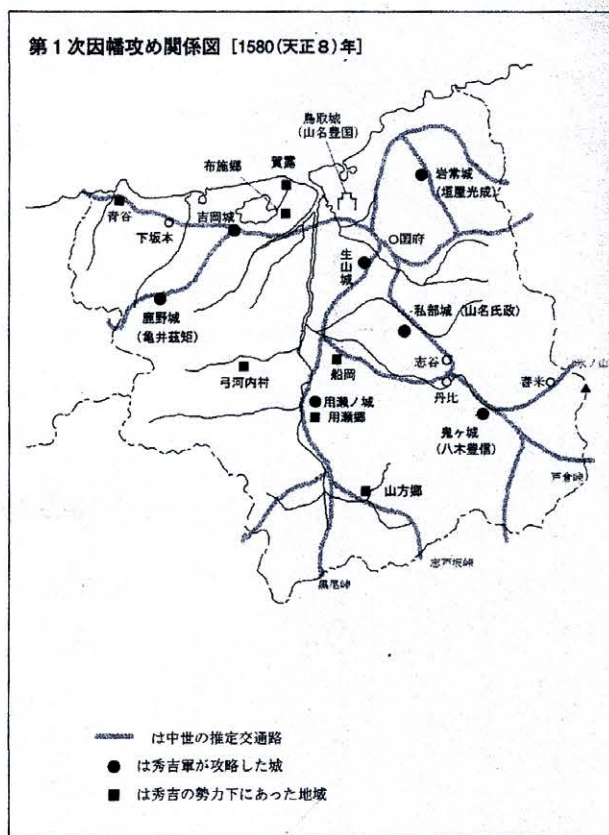
A：大規模な土塁囲みで、虎口・櫓台などを構築し、規模の大きな横堀が全周する。
縄張りの的には抜群に優れているが堅堀はない。

（例）太閤ケ平本陣（「信長の御座所」か）

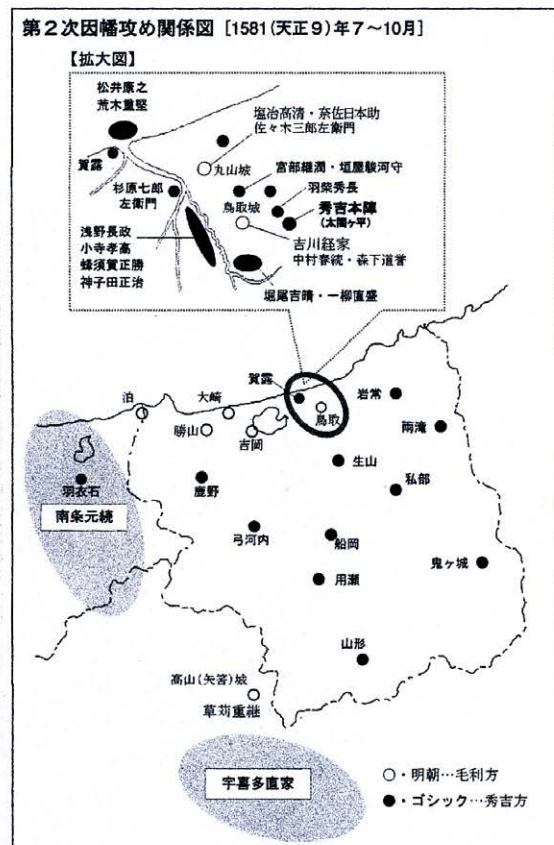
B：土塁・横堀・虎口などが卓越し、大規模な堅堀や畝状堅堀によって各砦が連結され防御ラインを形成しているもの。

(例) 伝・羽柴秀長の陣を初めとする「秀吉本陣を防御する最終ライン」
 C: 顕著な土塁はないものの、大規模な横堀・縦堀を構築したもの。
 (例) 「寺屋敷」の陣城
 D: 横堀はないが、長大な土塁ラインを構築しているもの。
 (例) 円護寺の陣城(「伝・垣屋光成の陣」、西桂見の長大な土塁、
 E: 土塁囲みで虎口もしっかりしているもの。横堀・縦堀は見られない。
 (例) 伝・羽柴秀次の陣、五反田の陣城、瓢箪池北西の陣城、妙見向平の陣
 F: 曲輪に土塁が全周せず、部分的に土塁をもち、虎口が明確なもの。横堀・縦堀は伴わない。(例) 樗谿神社北側尾根の陣城
 G: 曲輪のみで構成され、土塁・縦堀・横堀・堀切などを伴わない。※今回未報告
 ②陣城の配置によって、防御ラインがある程度把握できそうである。秀吉本陣を守備する「伝・秀長の陣」をはじめとする最終ライン、伝・秀長の陣～円護寺の陣城・妙見向平の陣、円護寺の陣～五反田の陣～瓢箪池北側尾根の陣～城下町の陣城市群、昼食山の陣～中ノ郷中学北側の陣～丸山城、などである。
 ③陣城市群の保全と整備の必要性
 特に、太閤ヶ平と伝・秀長の陣をはじめとする二重の横堀・縦堀ライン。

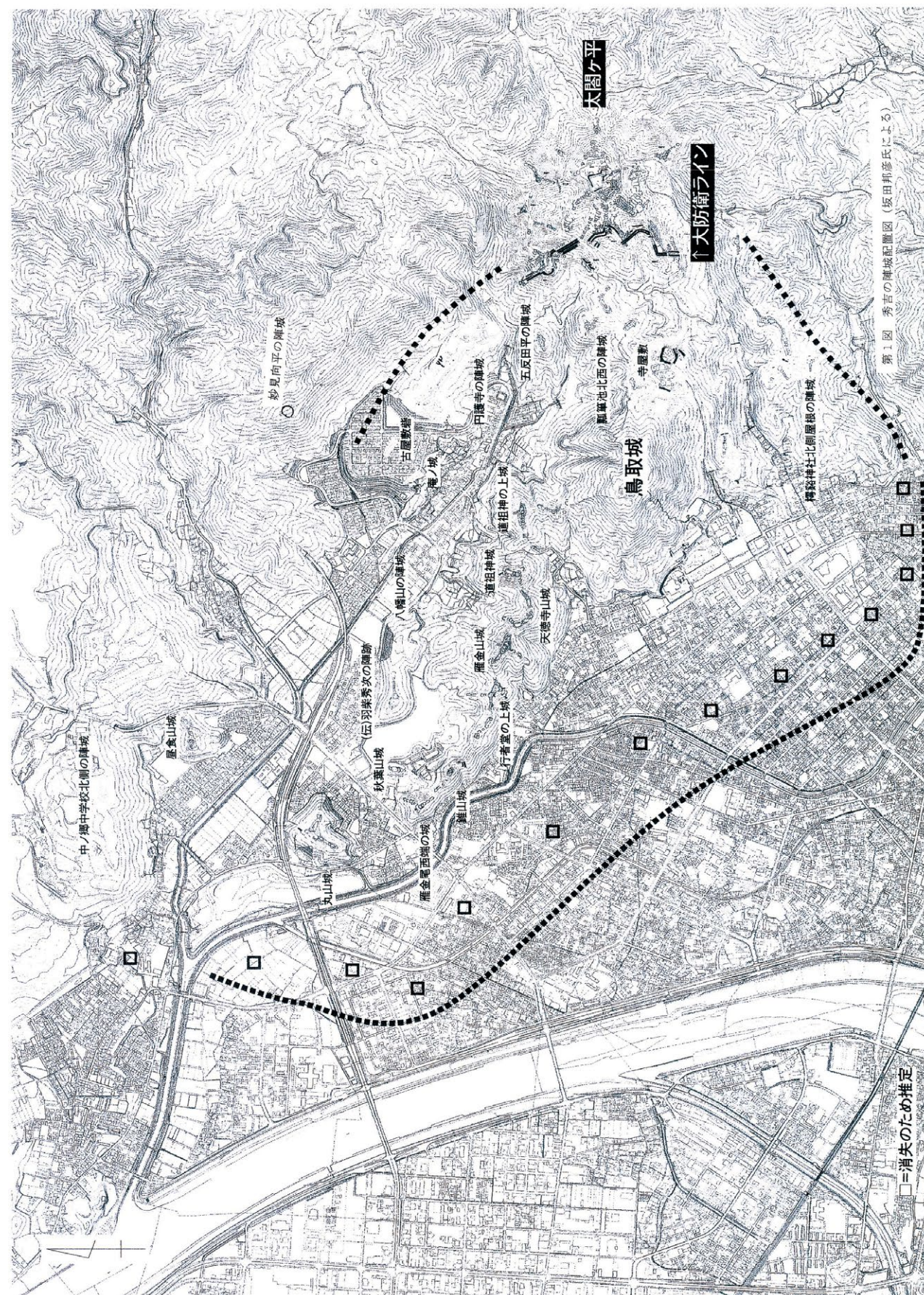
【図版】

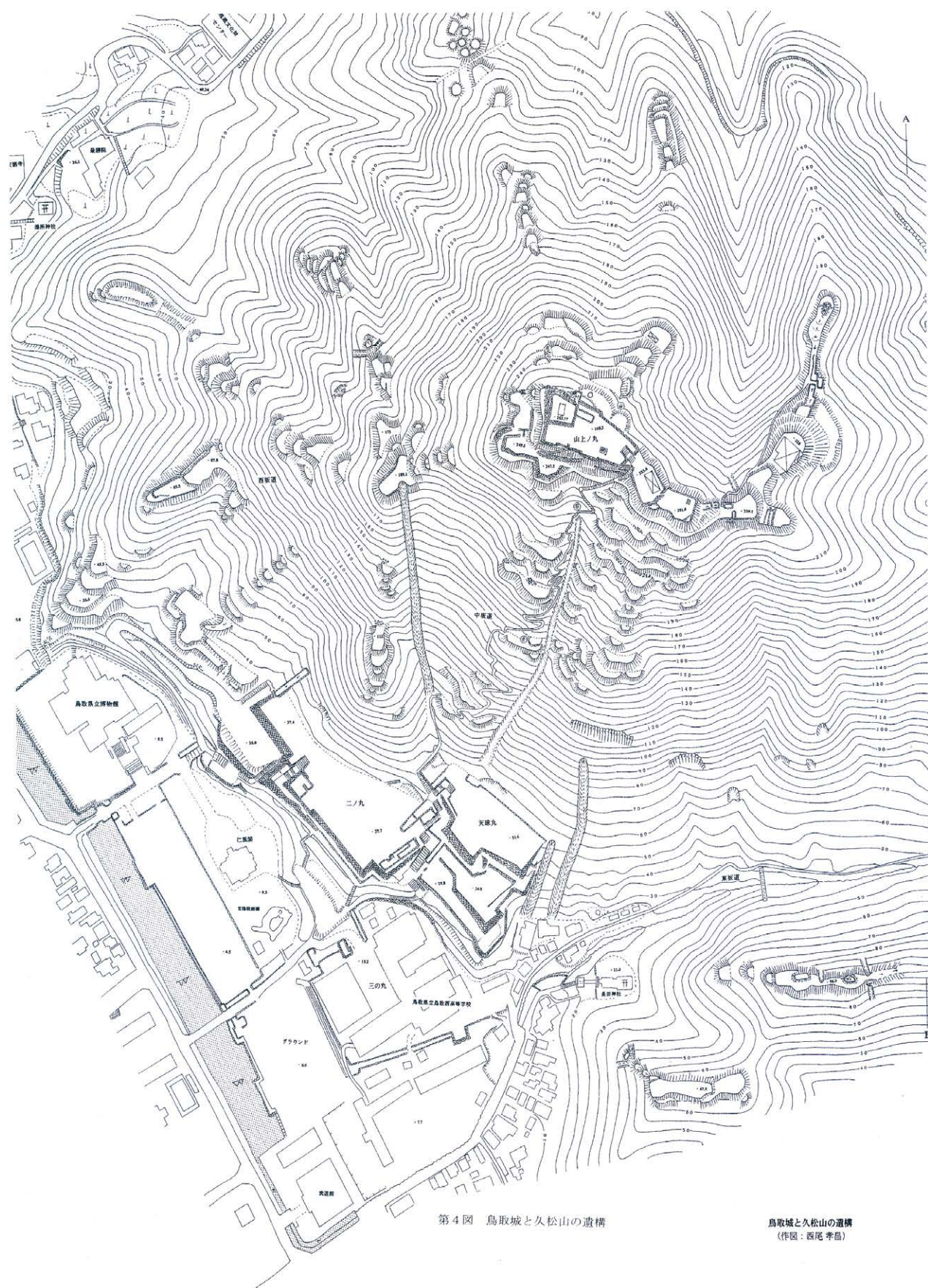


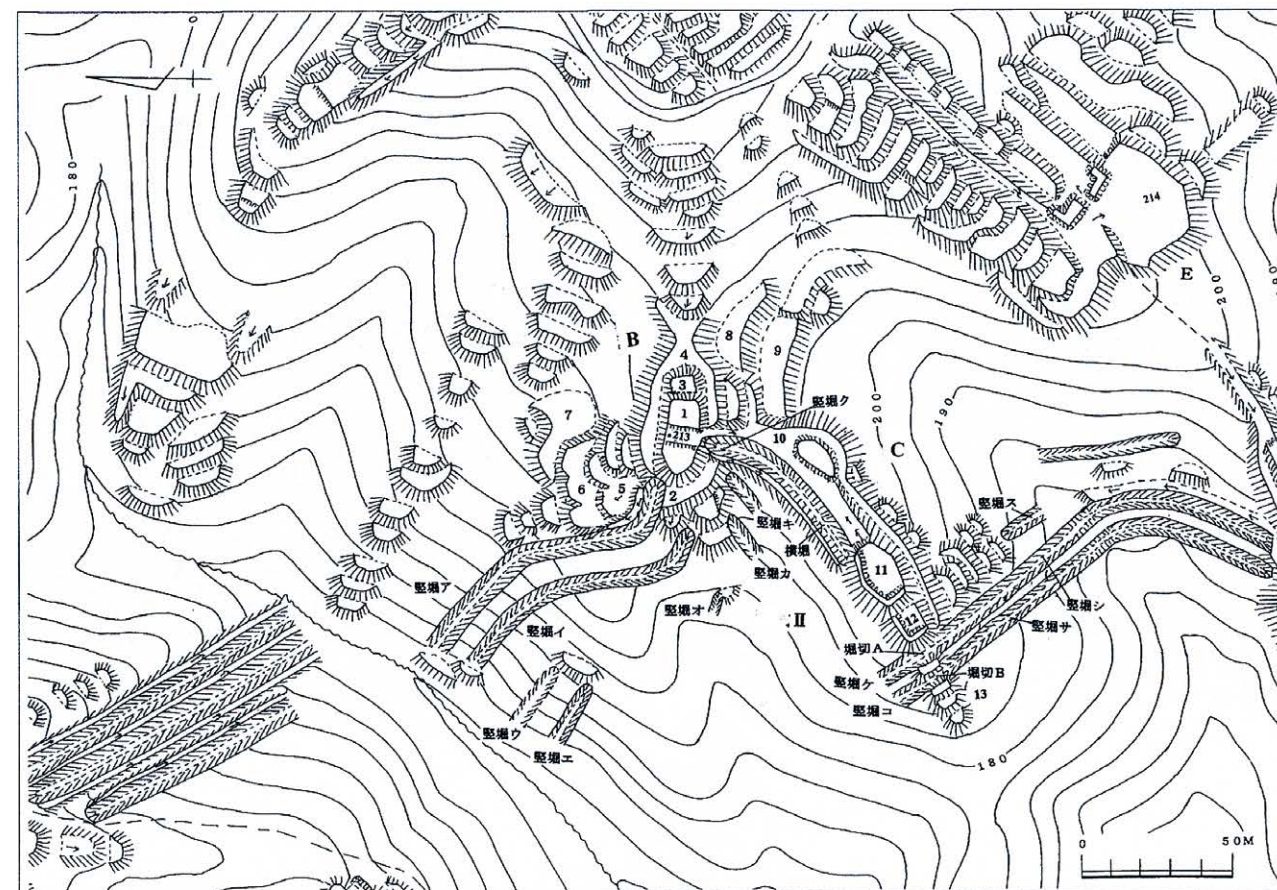
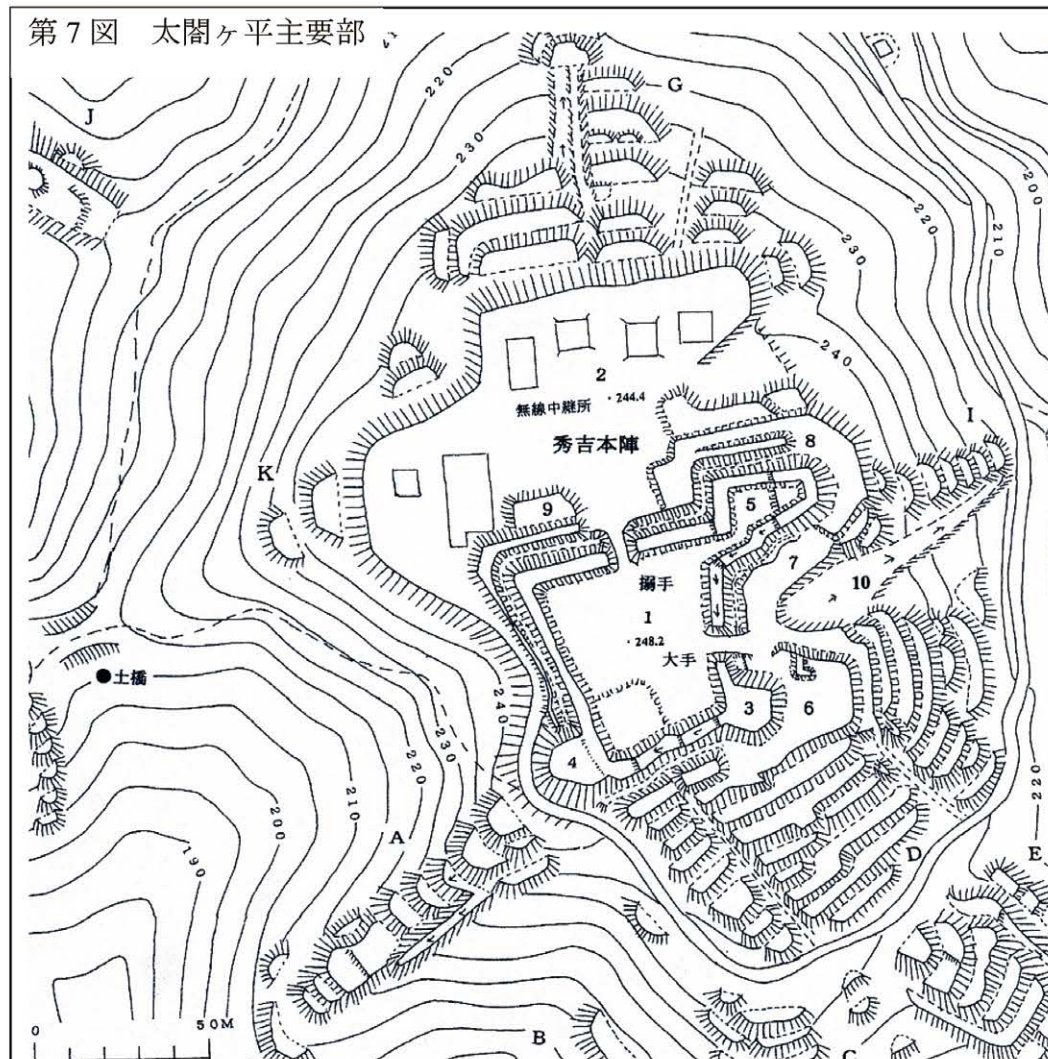
第2図 第一次因幡攻め関係図(岡村吉彦氏による)



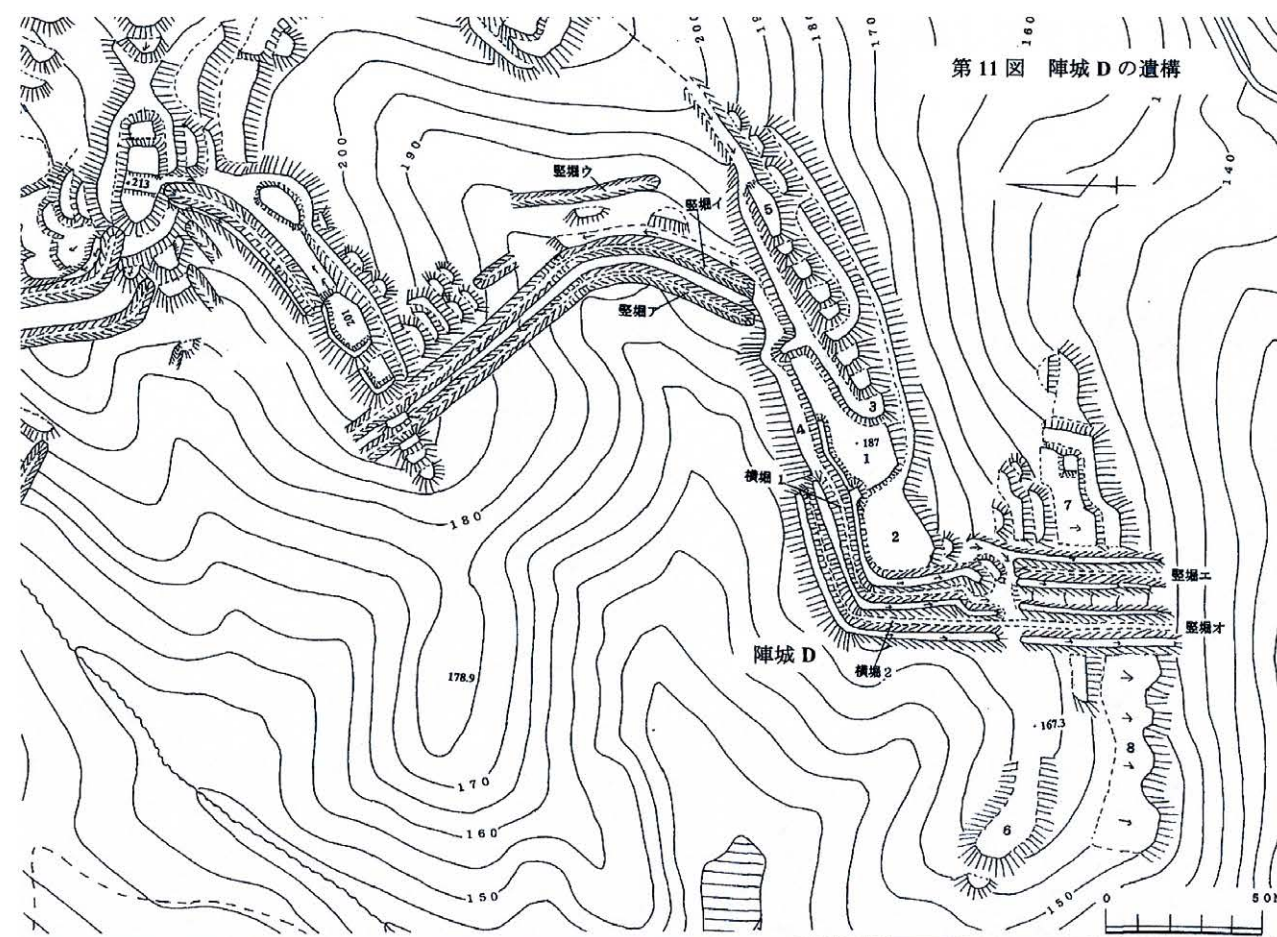
第3図 第二次因幡攻め関係図(岡村吉彦氏による)



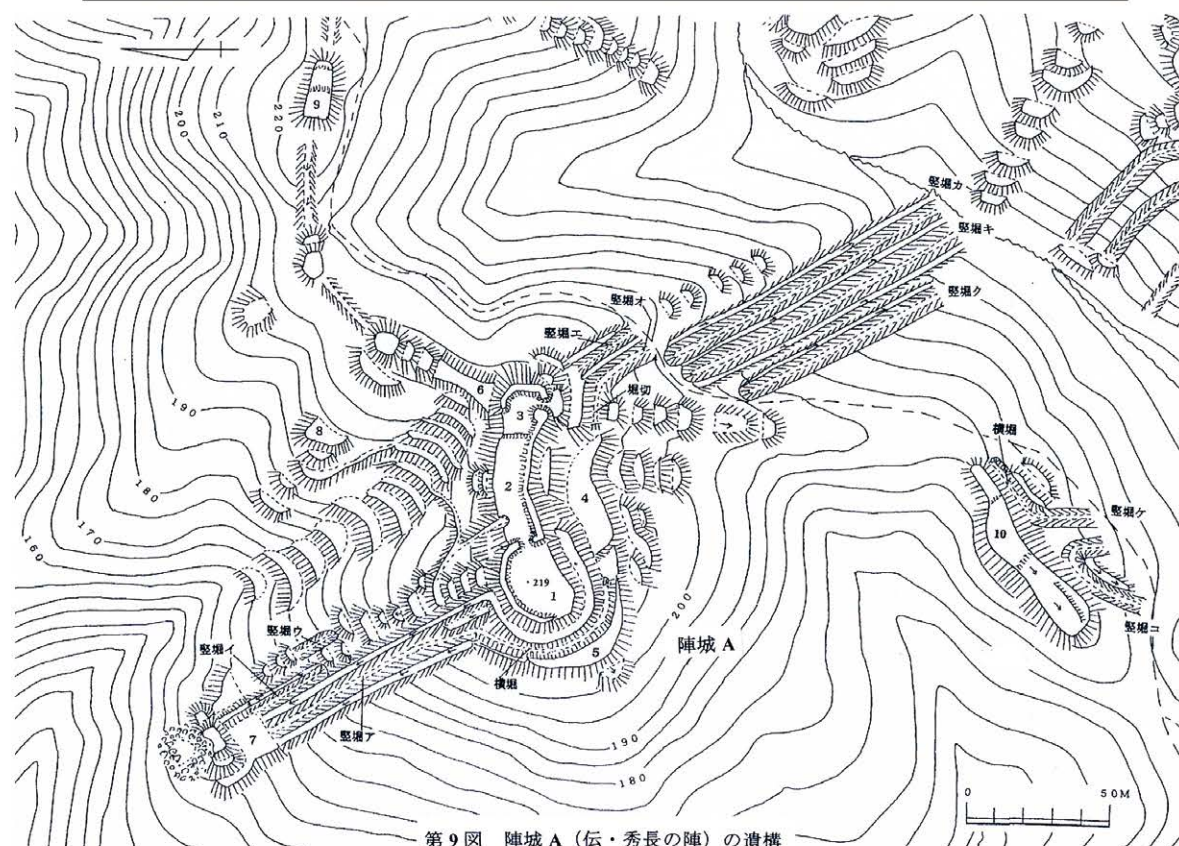




第10図 陣城B・Cの遺構



第11図 陣城Dの遺構



第9図 陣城A (伝・秀長の陣) の遺構

備中高松城攻めと陣城群

—毛利・織田両陣営による城郭システムの検証—

和田 剛

1 はじめに

備中高松城（註1）攻めは、天正10（1582）年4月13日から6月5日にかけて、羽柴・宇喜多連合軍（以下、織田方とする）と毛利方との間で展開した戦いである。舞台となった備中高松城は岡山県南部、旧賀陽郡に位置し、東西の山陽道と南北の大山道が交差する交通の要衝に立地する（図1）。

この戦いが戦国史上重視されるのは、織田・毛利両陣営による本隊決戦であったことに加え、戦闘の最中に本能寺の変が発生し、羽柴（後の豊臣）秀吉による天下統一事業の転機となったためである。しかし、従来の研究では戦闘経緯に関心が集中し、戦闘を支えた陣城群の実態については十分に検討されてこなかった。

ところが近年、良質な一次史料の掘り起こしに加え、発掘調査や縄張調査が進展したことにより、織田・毛利両陣営が構築した陣城群の具体像が次第に明らかになりつつある。

そこで本稿では、まず近年の研究成果を整理したうえで、筆者が携わった岡山県中世城館跡総合調査事業の成果を援用しながら、備中高松城攻めにおいて運用された陣城の分類と分布を検討する。さらに発掘調査成果と縄張調査成果を踏まえ、織田・毛利両陣営の陣城群の縄張と運用の特徴について明らかにする。

2 これまでの研究

備中高松城攻めの研究は、文献史学・考古学・縄張研究の三分野を中心に進展してきた。文献史学では、戦いの前半が足守・東阿曾、後半が高松を舞台として展開したことや、毛利方の防衛体制（註2）が備前・備中国境地域の地下人一揆の動向と密接に関わっていたことが明らかにされた（山本1994）。発掘調査では、甫崎天神山城が毛利方陣城であったこと、千引砦や名越3号砦（註3）が織田方の陣城である可能性が示されるなど、陣城の実態解明が進んだ（岡山県教育委員会1994、総社市教育委員会1999）。また、縄張研究では、織田・毛利両陣営の陣城群の特徴や、毛利氏の陣城から宇喜多氏のそれへの影響などが論じられてきた（池田1987、畑2008、乗岡2013、高橋2014）。

このように、備中高松城攻めをめぐる戦いの経過や個々の陣城の縄張について研究が蓄積されてきた。しかし、その多くは個別事例の検討にとどまるものであった。そこで本稿では陣城群を個別城郭の集合としてではなく、戦争遂行のために複数の城郭が相互に機能を分担し、監視・指揮・兵員配置・防御などを総体として担う「城郭システム」として把握する。この観点から、織田・毛利両陣営における陣城群の縄張・配置・運用の特徴について考察する。

3 各城館の分類

本章では、『岡山県中世城館跡総合調査』の成果をもとに、備中高松城攻めに関わる城館の分類を試みる。対象とした各城館とその属性は表1に示した。なお、本稿では備中高松城をはじめとする在地城館や、天正7年に毛利方が整備した宮路山城・冠山城なども含め、高田徹氏のいう「臨戦化の城郭」（高田2006）

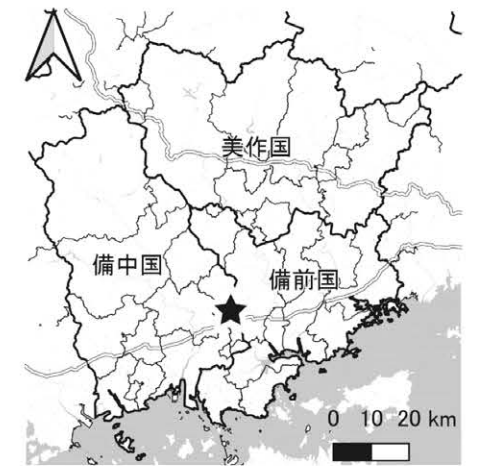
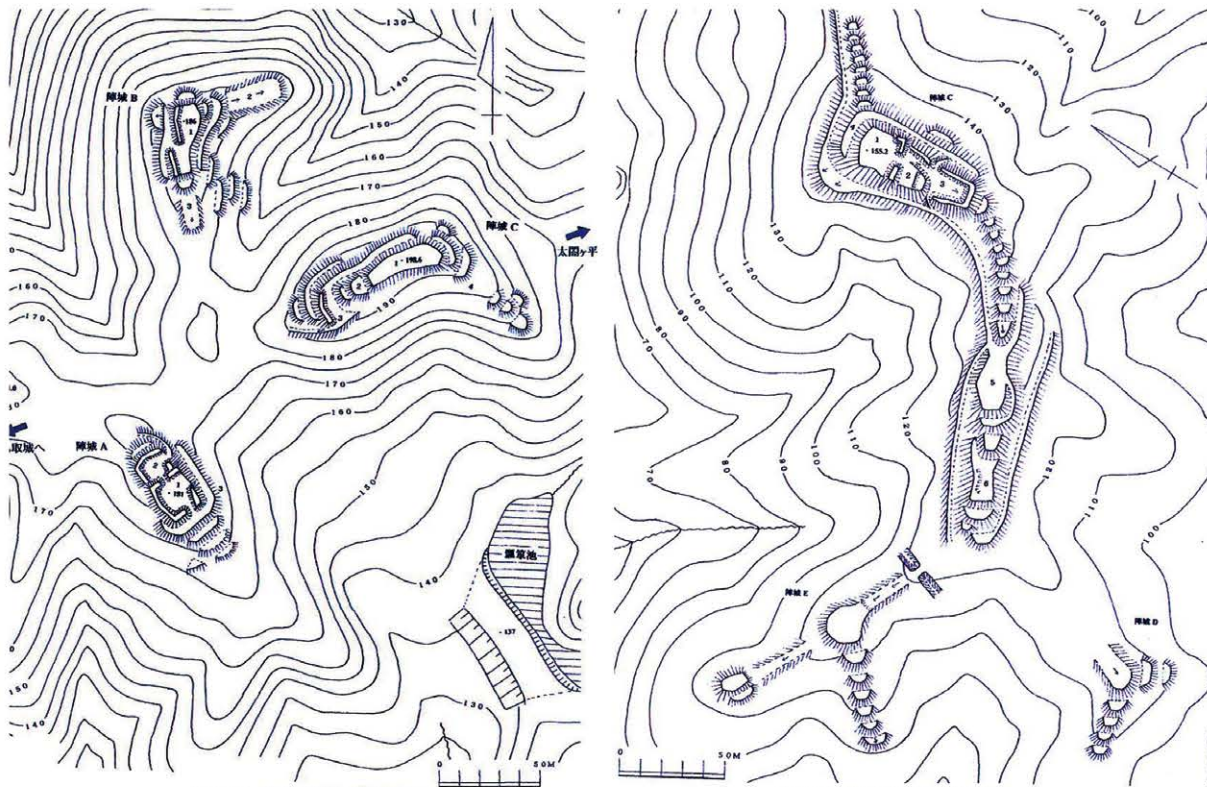
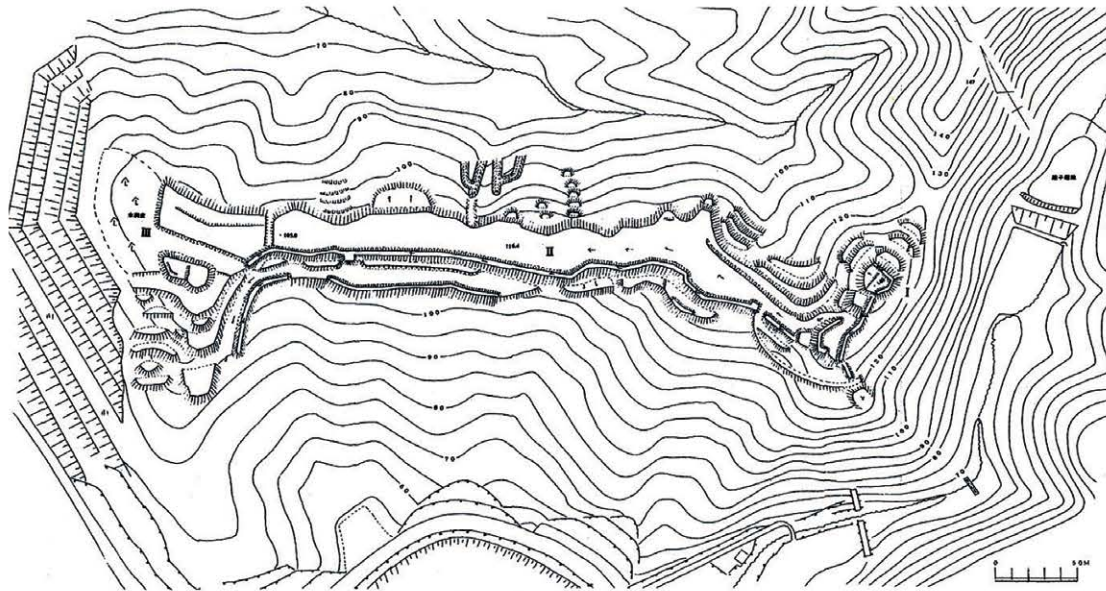


図1 備中高松城の位置
(1/2,000,000)
※「地理院白地図」をもとに作図

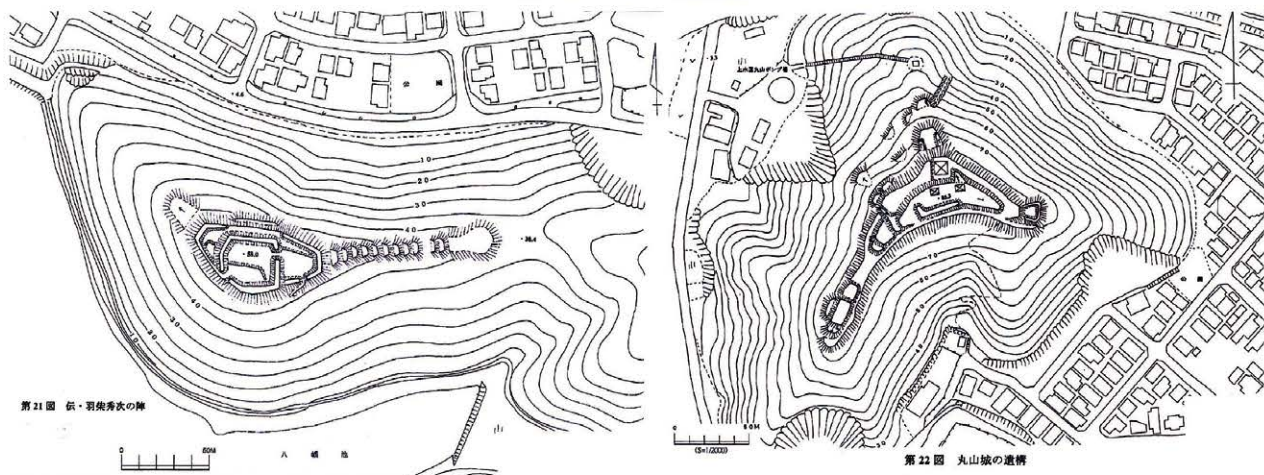


第13図 瓢箪池北西の陣城遺構

第14図 樽銘神社北側尾根の遺構



第17図 円護寺の陣城遺構



第21図 供・羽柴秀吉の陣

第22図 丸山城の遺構

表 1 備中高松城の戦い関連城館一覧 ※白抜きが織田方、灰色が毛利方の城館（推定含む）																	
戦域	城館番号	城館名	比高 (m)	面積 (㎡)	丘・山城 単郭 複郭	平城	堀切	連続堀切	土塁	土塁囲み	竪堀	畝状空堀群	石垣	横堀	虎口	勢力	
足守	345	経山城	340	8430		1 B			○				○	○	○	毛利	
	350	守福寺裏山の陣	260	1810	1 B					○					○	織田	
	353	宮路山城	140	8670		1 D		○	○			○		○	○	毛利	
	354	鍛冶山城	140	44050		1 D		○		○	○	○	○	○	○	織田	
	355	植之町西陣	60	2990	1 A		○									織田？	
	356	植之町東陣	50	2770	2 ？											織田？	
	357	大陣屋跡	140	20380	1 B					○			？		○	織田	
	358	千引砦	90	400	1 B					○						織田	
	360	名越2号砦	70	1200	1 B					○						織田	
	361	名越3号砦	90	400	1 B					○						織田	
	363	小陣屋跡	70	2430	1 B					○			○			織田	
	364	牛神砦	70	1380	1 B					○						織田	
	365	尾崎1号砦	60	1200	1 B					○						織田	
	366	尾崎2号砦	40	60	1 B				○							織田	
	367	尾崎3号砦	40	60	1 B				○							織田	
	368	鳥越山城	30	12600		2										毛利？	
	369	長良山城	70	27040	1 B		○			○						毛利？	
	372	一国山城	30	2190	1 B								○			織田	
	373	冠山城	20	11110	1 D				○			○			○	毛利	
	375	南坂南陣	110	2160		2										織田	
	376	南坂北陣	95	1050		2										織田	
	377	下足守A陣	110	2980	1 B					○					○	織田	
	378	下足守B陣	110	1480	1 B					○					○	織田	
	379	上土田大崎境の陣	100	1260	1 B					○					？	織田	
	381	すくも山城	20	1750		1 A		○					○			毛利	
	382	三上山東の陣	180	1030	1 B					？						織田	
	383	三上山の陣	150	9060	1 B					○					○	○	織田
	385	竜王山陣	90	5060		1 A		○								織田？	
	386	生石城	20	2060	1 B				○		？				？	織田？	
	387	小山城	25	6180	1 A		○									織田？	
	388	大崎城	10	2620		2										織田？	
	389	坂古田陣	33	3110	1 B				○							織田？	
	390	八幡山陣	20	7870		2										織田	
	391	岡之鼻陣	10	4040		2										織田？	
	393	備中高松城	0	145570			○						○			毛利	
	394	御崎山陣	10	2115		2										織田	
	395	石井山陣	70	19210	1 B					？						織田	
高松	396	蛙ヶ鼻陣	50	15060	1 C											織田	
	399	鼓山城	110	6780	1 B				○					○	○	織田	
	402	庭瀬城	0	42630			○									毛利	
	414	幸山城	150	3780	1 B					○					○	毛利	
	415	福山城	280	14500		2			○					？		毛利	
	423	庚申山陣城	60	20710		2										毛利	
	424	造山城	25	5300	1 B				○		○					毛利	
	426	甫崎天神山城	30	16060	1 C		○							○		毛利	
	427	加茂城	0	19060			○									毛利	
	428	鷹巣城	190	1270	1 B		○		○				○		○	毛利？	
431	日畑城	10	2400		2										毛利		
433	日差山城	170	4700	1 B					○						毛利		
436	松島城	－	－		2？										毛利		

※城館番号は『岡山中世城館跡総合調査報告書』に準ずる。

※運用勢力の比定は先行研究に準ずるが、根拠薄弱なもの（？を付記）は分析の対象としない。

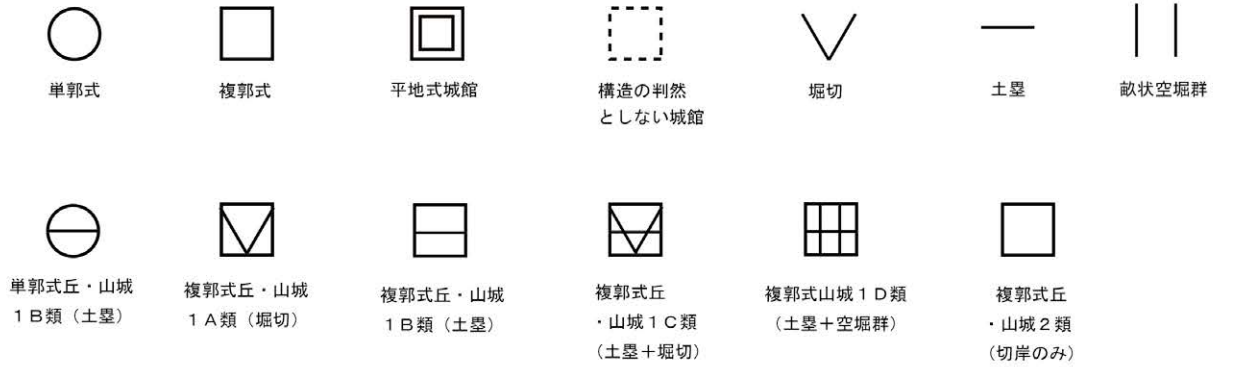


図 2 城館位置図の記号凡例

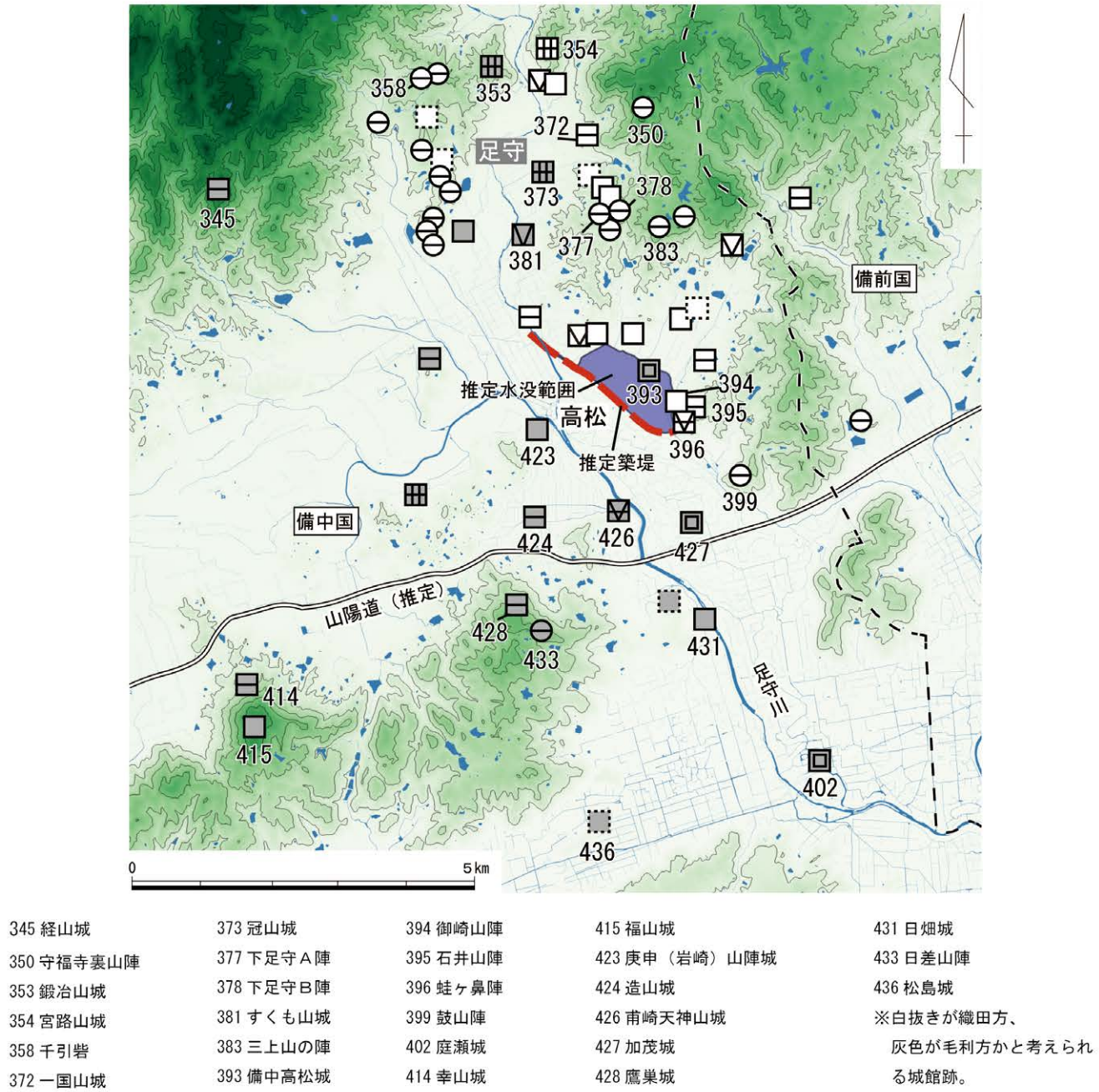


図 3 備中高松城の攻め関連城館位置全体図（1/100,000）

※「基盤地図情報（数値標高モデル）」をもとに作図

の観点から広義の陣城として扱う。

城館の分類は、①比高による立地、②縄張、③「遮断系」パーツの有無の三点を基準とした。比高によって平地城館・丘城・山城に区分し、丘城・山城については単郭式と複郭式に区分した。また、「遮断系」パーツについては松岡進氏の概念（松岡 2002）に従い、堀切・土塁・堅堀などの組み合わせによって類型化した。

その結果、足守周辺の織田方の陣城は単郭式 1 B 類が多数を占めることが判明した。これらは曲輪を土塁で圍繞する一方、堀切や堅堀など他の防御施設の採用は限定的であり、規模も比較的小さいという一貫した特徴を有する。そのため、畑氏や乗岡氏が指摘する（畑 2008、乗岡 2013）ように、これらは足守の戦いに際して織田方が短期間のうちに築いた陣城とみるのが妥当であろう。

一方、高松周辺の織田方の陣城は鼓山城を除いて複郭式を主体とし、石井山陣や蛙ヶ鼻陣など足守段階より大規模な陣城が出現する。しかし、土塁以外の「遮断系」パーツの採用は限定的であり、全体として遮断性は高くない。

これに対し、毛利方の陣城は備中高松城を中心とする平地城館と周辺の複郭式丘城から構成される。これらの城郭には横堀・堅堀・石垣など多様「遮断系」パーツが採用され、特に甫崎天神山城や造山城では大規模な曲輪の造成も確認できる。規模において織田方の陣城を上回るものが多く、総じて高い要害性を備えている。

以上のように、足守・高松の両戦域を通じて、織田方の陣城は小型で遮断性が低く、毛利方の陣城は大型で遮断性が高いという対照的な傾向を示す。また、前者が土塁を主体とする比較的簡易な縄張を採用するのに対し、後者は多様な防御施設を組み合わせることで要害性を高めている点にも違いが認められる。

4 織田・毛利方の陣城の分布

ここでは織田・毛利方の陣城の分布について検討する。図 2 に第 3 章で分類した城館の凡例を、図 3 に各城館の分布を示した。

足守では、鍛冶山城に対峙する宮路山城・冠山城・すくも山城を取り囲むように、下足守から奥坂、東阿曾にかけて織田方の陣城が群集している。これらの陣城は攻略対象となる毛利方諸城から概ね 1 km 以内に築かれ、陣城相互の距離も 0.3 ～ 0.7 km と近接している。一方、毛利方の陣城は 1 ～ 1.5 km 程度の間隔をおいて配置されており、織田方と比較すると分散的な配置を示す。

高松でも同様の傾向を認めることができる。織田方の陣城は備中高松城を取り囲むように 1 km 以内の丘陵上へ築かれ、陣城間距離も 0.1 ～ 0.7 km と短い。これに対し、毛利方の陣城は備中高松城から 1.5 ～ 4 km 離れて分布し、陣城相互の距離も比較的大きい。

以上のように、足守・高松の両戦域を通じて、織田方の陣城は攻略対象を包囲するように近接して配置されるのに対し、毛利方の陣城はより広域に分散配置されるという特徴を示す。

5 足守の戦いに関する陣城群

(1) 戦いの経過

天正 10 (1582) 年 4 月 13 日、羽柴秀吉は備中国へ侵攻した。これは同年 2 月に八浜の戦いで毛利方に敗北した宇喜多氏の救援要請を受けたものであった。これに対し毛利方は備前・備中国境地域に整備していた宮路山城・冠山城・すくも山城などを拠点として防衛にあたった。足守の戦いは、これら毛利方諸城をめぐる展開した戦いであり、前半戦における主要な戦場となった。

秀吉は 5 月 2 日までに宮路山城・冠山城を落城、開城させており、織田方は約 2 週間の間に複数の陣城

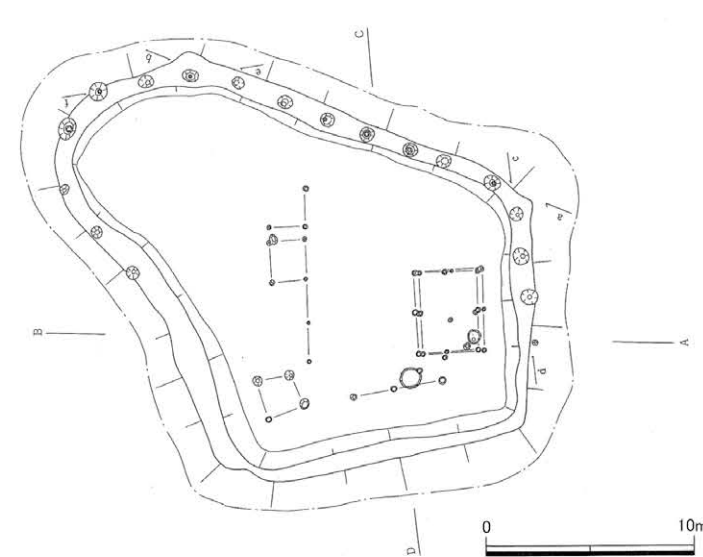


図 4 千引砦平面図 (1/400)

総社市教育委員会 1999

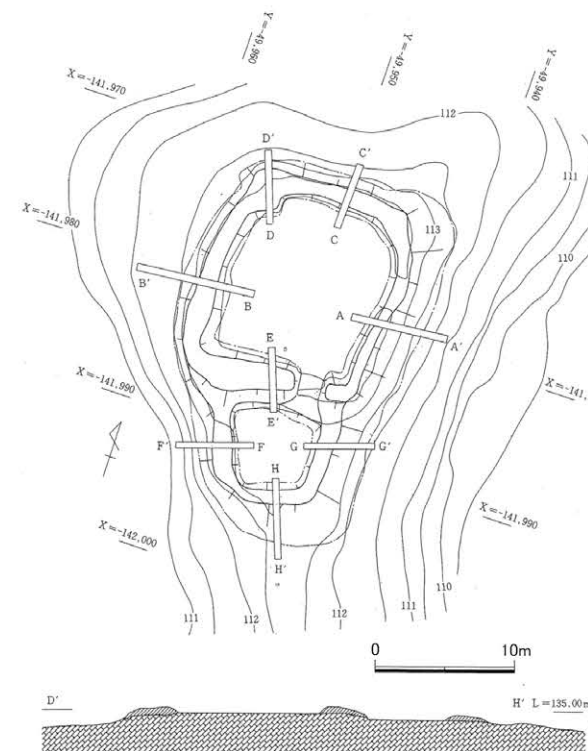


図 5 名越3号砦平面図 (1/600)

総社市教育委員会 1999

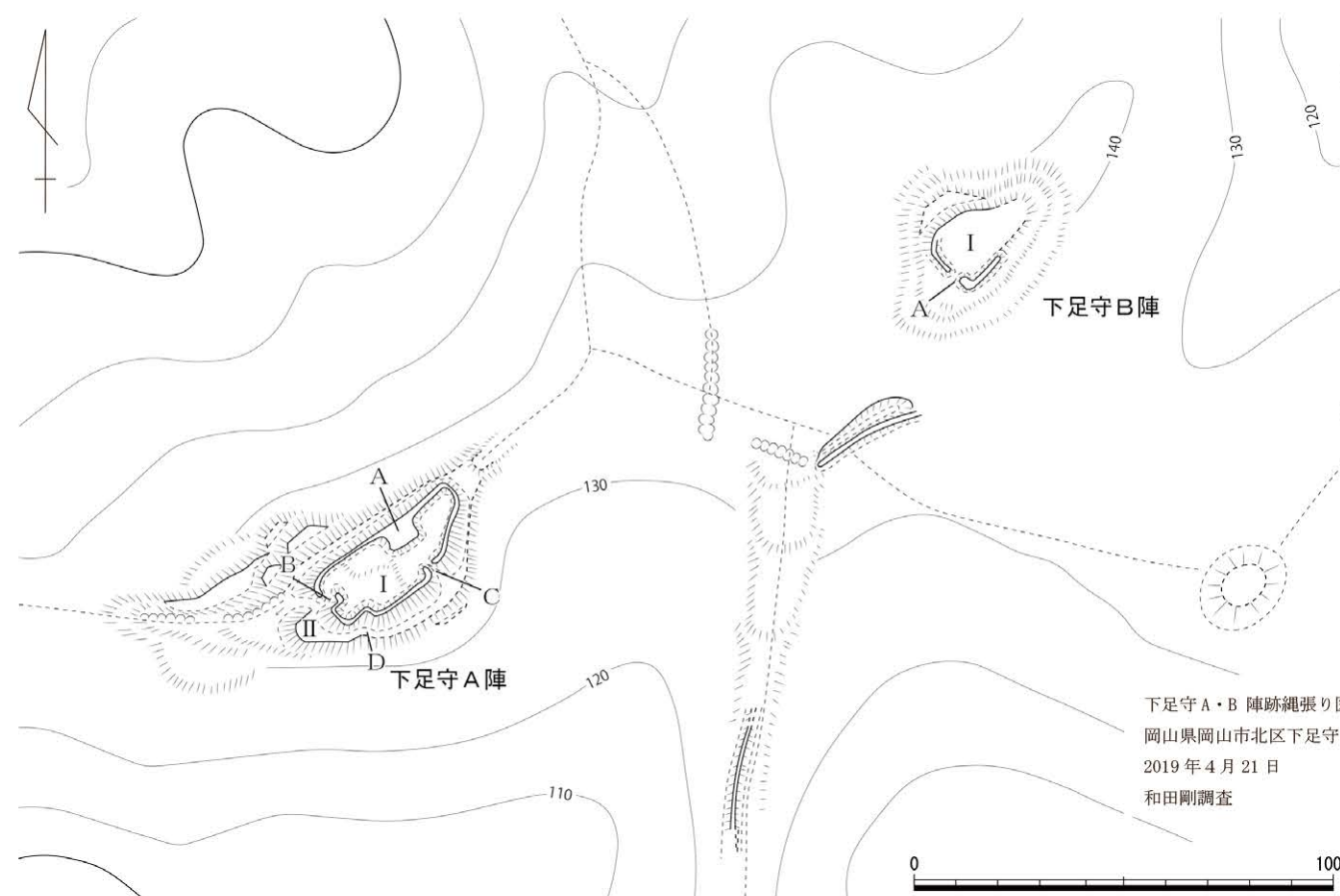


図 6 下足守 A・B 陣縄張図 (1/2,000) ※背景地図は「基盤地図情報 (数値標高モデル)」をもとに作図

を築き、これを運用していたことになる。

(2) 織田方の陣城市群

足守における織田方の陣城は、下足守から奥坂、東阿曾にかけて集中的に分布している。これらは攻略対象となる毛利方諸城から概ね1km以内に築かれ、相互の距離も0.3～0.7kmと近接している。

千引砦(図4)と名越3号砦(図5)は単郭式1B類の小規模な丘城である。両城は規模や縄張から見て単独での戦闘は不可能であり、毛利方諸城の動向を注視する監視施設であったと考えられる。

これに対し、一国山城は土塁囲みの曲輪と方形基壇状遺構を備えている。また、下足守A陣(図6)では複数の虎口と横矢を意識した土塁構成が確認されている。いずれも施設構成が充実しており、前線の指揮を担う拠点であったと考えられる。

さらに三上山の陣では、本郭部と広い未成形地からなる二重構造(多田1989)が認められる。未成形地は兵員の駐屯空間と考えられ、同陣は駐屯拠点として機能していた可能性が高い。

このように、足守の織田方の陣城市群には、監視・指揮・駐屯という機能分化が認められる。

(3) 毛利方の陣城市群

毛利方陣城である宮路山城・冠山城・すくも山城は、いずれも複郭式を主体とし、土塁・堀切・畝状空堀群などを備えた高い要害性を有している。また、各城郭は比較的離れて配置され、それぞれが独立した防御拠点として機能していたと考えられる。

とりわけ宮路山城と冠山城は、織田方の鍛冶山城に対する付城として築かれた事例であり、毛利方が備前・備中国境地域の防衛を強く意識していたことを示している。

6 備中高松城攻めに関する陣城市群

(1) 戦いの経過

戦いの後半は、備中高松城攻めである。『溝江家文書』の5月19日付羽柴秀吉書状によれば、秀吉は5月8日に高松へ着陣し、備中高松城を水攻めにすべく築堤を開始した。また、『桂笈円覚書』には秀吉が同日に「かいるがはな＝蛙ヶ鼻」に入ったと記されている。その後、5月19日までには築堤が完成し、備中高松城も水没していたとみられる。すなわち、織田方は11日間という短期間のうちに大規模な築堤工事と備中高松城の包囲を完成させていたのである。しかし、6月2日に本能寺の変が発生すると、秀吉は毛利方と和睦し、6月5日に備中国を発って上方へ向かった。

一方、この時、毛利方の小早川隆景は幸山城に陣を敷いており、後詰勢をもって織田方との決戦を企図していた。しかし、開戦から三週間が経過した5月5日に至っても、兵糧・弾薬の不足に悩まされており、毛利輝元は備中松山城からの陸送を試みていた。結局、毛利方の後詰勢が備中高松城近くの「山陣」に入城するのは5月21日のことであり、この時すでに織田方は水攻めを完成させていたのである。

(2) 織田方の陣城

備中高松城攻めに際して織田方が築いた陣城については発掘調査が行われていないため、以下では縄張調査の成果を中心に検討する。

石井山陣・蛙ヶ鼻陣・御崎山陣(図7)は、いずれも備中高松城築堤跡の東側丘陵上に築かれている。これらは備中高松城に近接するだけでなく、毛利方後詰勢の布陣する「山陣」に対しても最前線に位置しており、水攻めを支えた陣城市群であったと考えられる。

これら三陣は備中高松城を正面に見下ろす尾根上に段階的に配置されている。最前面には御崎山陣と蛙ヶ鼻陣が位置し、その後方に最大規模を誇る石井山陣が控える構成となっている。すなわち、前衛・指

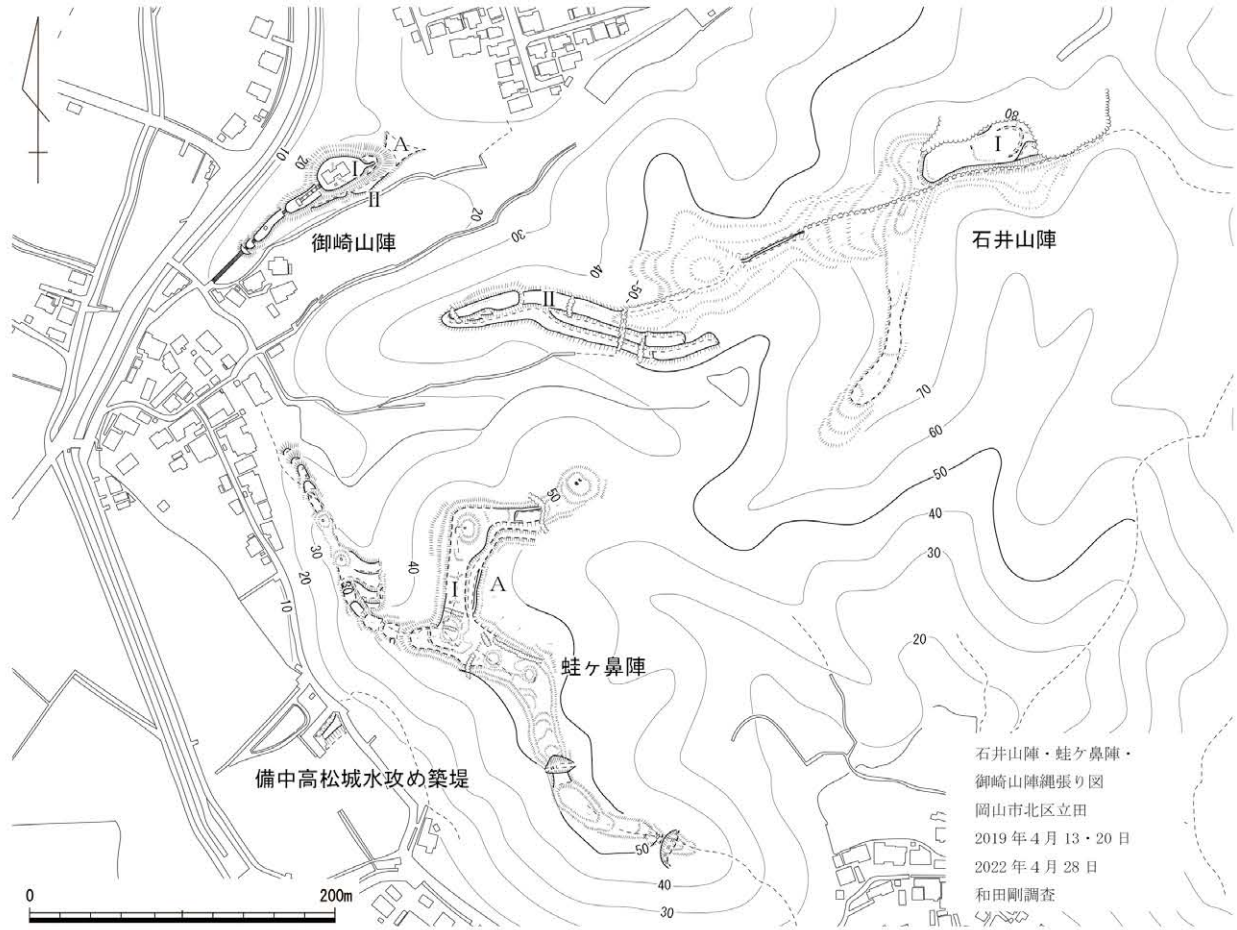


図7 石井山陣・蛙ヶ鼻陣・御崎山陣縄張り図(1/5,000)

※背景地図は「地理院地図」・「基盤地図情報(数値標高モデル)」をもとに作図

この時、毛利方の陣城として用いられた可能性の高い城として甫崎天神山城がある(図8)。甫崎天神山城は複郭式1A類の丘城であり、織田方の本営とされる蛙ヶ鼻陣から約1.5kmという近距離に位置する。また、高松平野と織田方の陣城市群を一望できる。こうした立地は、後詰勢の駐屯拠点であるとともに、織田方の動向を監視する前線拠点としての性格を示している。

発掘調査では複数の建物跡、大規模な盛土造成、排水施設、深い堀切などが確認されている。また、備前焼・亀山焼・青花の出土は一定期間の継続的利用を示している。

したがって、同城は備中高松城攻めに際して新たに築かれた陣城ではなく、地域防衛の拠点であった既存山城を後詰勢の拠点として再編したものと考えるのが妥当であろう。これは要害性を備えた既存山城を軍事的に再利用するという、毛利方陣城の特徴を示す事例と評価できる。

7 考察

(1) 足守の戦いに関して

足守の戦いにおいて、織田方は毛利方諸城を攻略するため、多数の陣城を近接して配置した。これらの陣城は単郭式山城1B類を主体とし、土塁を主要な防御施設とする比較的簡易な縄張を採用していた。しかし、その機能には明確な分化が認められる。千引砦や名越3号砦は監視施設、一国山城や下足守A陣は前線指揮所、三上山の陣は兵員を収容する駐屯拠点として機能していたと考えられる。

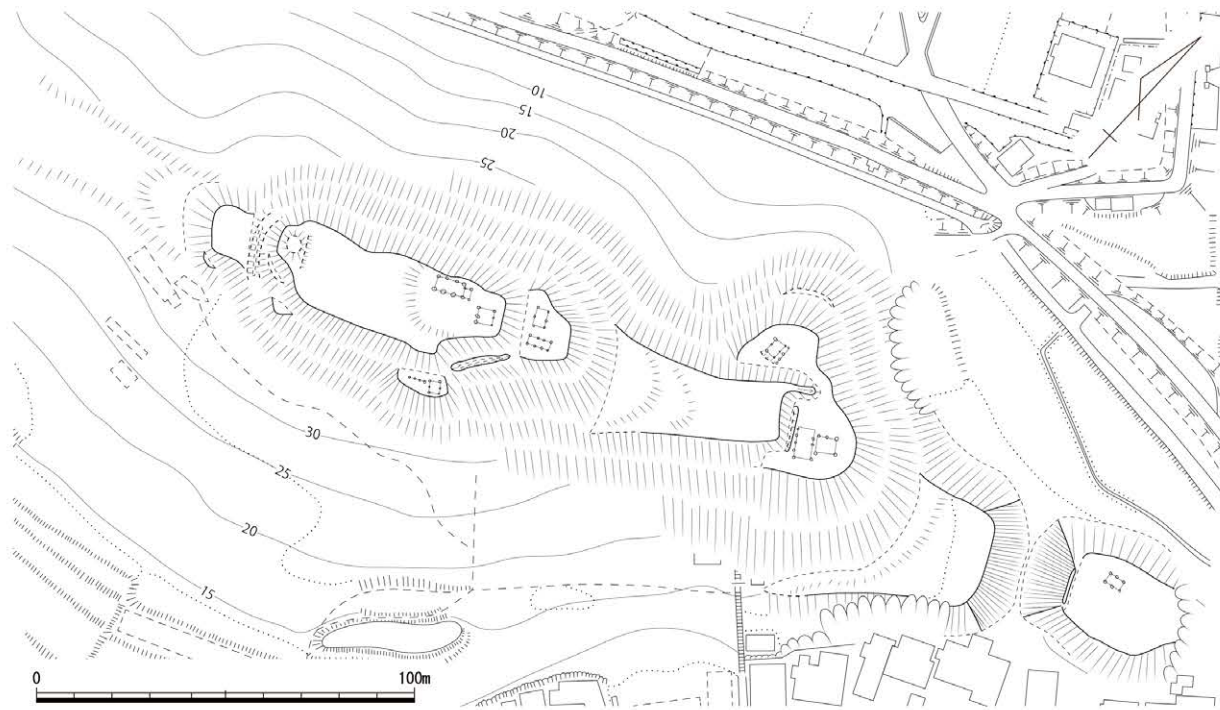


図8 甬崎天神山城縄張図（1/2,000）岡山県教育委員会 1994 を元に和田作図

揮・後方支援という異なる役割を担う陣城が、地形に即して重層的に配置されていたのである。

石井山陣は複郭式1 B類の丘城であり、その城域は他の陣城を大きく上回り、未成形地も広く残されていることから、多数の兵員を収容する後方拠点として機能していた可能性が高い。

蛙ヶ鼻陣は複郭式1 C類の丘城である。備中高松城築堤を直接見下ろす位置にあり、主郭周辺には土塁や堀切が認められる。また、『溝江家文書』にみえる秀吉着陣地とも一致することから、築堤工事の統括と前線指揮を担う中核拠点であったと考えられる。

御崎山陣は複郭式2類の丘城である。備中高松城に最も近接しており、前衛的な監視・警戒施設として機能していたのであろう。

以上のように、織田方の陣城群は御崎山陣と蛙ヶ鼻陣を前衛とし、その後方に石井山陣を配置する重層的構成をとっていた。これは足守で確認した監視所・指揮所・駐屯拠点という機能分化が、高松段階ではより大規模な形で再編成されていたことを示している。

（3）備中高松城攻め築堤跡の発掘調査成果

備中高松城攻め築堤跡は備中高松城の南800mに位置し、30mにわたって高さ3mの築堤が残る他、約300mの範囲で築堤の地割りが見られる。築堤跡の発掘調査では、築堤基底部から杭列や筵状の編み物が検出されたほか、土俵を用いた盛土の状況も確認されている。

とくに注目されるのは、こうした大規模土木工事がわずか10日前後の短期間に実施された点である。大量の人員と資材を動員しながら築堤と陣城群を同時に運用していたことは、織田方が高い組織的動員能力と指揮統制能力を有していたことを示している。

これらの成果から、織田方は軟弱地盤上へ大規模な築堤を構築するため、地盤補強と大量の盛土を短期間に実施していたことが分かる。備中高松城攻めは、単なる包囲戦ではなく、大規模な野戦築城事業であったと評価できよう。

（4）毛利方の陣城群

本稿でいう「城郭システム」とは、複数の城郭や築堤が役割を分担しながら相互に連携し、攻撃・防御・監視・指揮などの軍事行動を総体として可能にする関係構造をいう。この観点からみるならば、足守の織田方の陣城群は、機能の分担と相互連携によって攻城戦を遂行していた。

これに対し、毛利方の陣城は宮路山城・冠山城・すくも山城を主体とし、土塁・堀切・畝状空堀群などを備えた高い要害性を有していた。また、各城郭は比較的離れて配置され、それぞれが独立した防御拠点として機能していた。すなわち、足守の戦いにおいて対峙していたのは、機能分担と連携を重視する陣城群と、個々の城郭の防御力を重視する陣城群という、異なる城郭システムであったと評価できる。

このような差異は、両者の戦術的課題の違いに起因すると考えられる。織田方にとって足守の戦いは、短期間のうちに毛利方諸城を包囲し、継続的な監視と攻撃を加える攻城戦であった。そのため、個々の陣城の要害性を高めるよりも、機能の異なる陣城を近接配置し、相互に連携させることが合理的であった。他方、毛利方にとっては、備前・備中国境地域の防衛線を維持しながら織田方の侵攻を阻止することが課題であり、個々の城郭の防御力を高める必要があった。この差異は、こうした戦術的課題の違いを反映したものと考えられる。

（2）備中高松城攻めに関して

高松において、織田方の陣城群は足守段階よりも大規模化する。石井山陣・蛙ヶ鼻陣・御崎山陣は、それぞれ後方拠点、前線指揮拠点、前衛施設として機能し、相互に補完しながら備中高松城を包囲していた。また、水攻め築堤は単独の土木事業ではなく、陣城群と一体となって包囲戦を支える装置として機能していた。

このことは、高松において織田方の城郭システムがさらに高度化していたことを示している。個々の陣城の縄張は必ずしも高い要害性を有していないが、それぞれが異なる役割を担い、築堤を含めて全体として一つの攻城体制を形成していたのである。

一方、毛利方では甬崎天神山城をはじめとする既存山城が後詰勢の拠点として再利用された。しかし、それらは織田方のように密集配置されることはなく、既存の地域防衛網のなかで独立した拠点として運用されていた。

また、この段階において織田方の陣城が大型化している点も重要である。これは備中高松城という大規模城郭を包囲するとともに、毛利方後詰勢との決戦に備える必要があったためであろう。すなわち、高松の戦いは足守段階よりも多くの兵力と物資の集中を必要とした局面であり、それに対応して陣城群もより大規模かつ複雑な構成へ変化したものと考ええる。

以上のように、高松の戦いにおいても、織田方が複数の陣城と築堤を組み合わせた統合的な攻城システムを構築していたのに対し、毛利方は既存城郭を基盤とした分散的な防衛システムを維持していたと理解できる。

おわりに

以上の検討の結果、織田・毛利方は足守・高松の両戦域を通じて、縄張・配置・運用の各側面において対照的な陣城群を形成していたことが明らかとなった。

織田方の陣城群は機能の異なる陣城が相互に結び付き、全体として一つの軍事的機能を発揮するものであった。筆者はこのような陣城群を「接続型陣城」と呼びたい。これに対し、毛利方の陣城群は、個々の陣城が高い独立性と要害性を保持しながら、その集合によって防衛線を形成していた。こうした陣城群は「連立型陣城」と位置付けることができよう。

陣城と付城

ー籠城戦・攻城戦を考えるにあたってー

高田 徹

1 はじめに

籠城戦と攻城戦は、城を守る立場、城を攻める立場それぞれによる呼称であり、実質は同義に近い。ただし、籠城するという行為以前に攻城戦が行われ、落城に至ることもあった。

攻める側が攻城戦を展開する際には、一気に軍勢を投入して攻略するという手もあるが、それでは多くの場合に大きな人的・物的な損害が発生する。これに対して攻略対象とする城郭の周囲に、一定距離を開けて城郭を築いて包囲し、その動きを封じれば、敵方の飲料水・食料の枯渇、意気消沈を招き、出血を伴うことなく開城させることも可能となる。敵方の城郭を包囲するため、その周囲を囲むように複数の城郭を構えた攻城戦は、戦国期の列島各地で行われた。中でも織田信長・豊臣秀吉は、こうした戦術を多用して多方面での戦闘を展開し、敵対勢力を屈服させていったのである。敵対する城郭を包囲するために築かれた、臨時的な城郭を付城と呼ぶ。本稿では付城とそれに関わって関連する陣城等の用語の整理を行っておく。また付城が敵対する城郭(籠城する側)に対してどれくらいの距離間をもって対峙・包囲したか、織田期の例を中心にみていくこととしたい。

2 陣城・付城とは

最初に 17 世紀初頭、キリスト教宣教師によって編まれた『日葡辞書』（土井他 1980)をみてみる。同書は戦国～織豊期に使用された語彙を挙げ、その発音、意味、用例を記したものである。まず「付城」は、「ツケシロ(付城) 敵の城を攻めるために、その近くに造る防御用障害物、あるいは砦(後略)」とある。砦は理解しやすいから措くとして、防御用障害物とは例えば通路を遮断する単体の堀切であるとか、逆茂木とかがあたるものであろうか。

同書には「相城」があって「アイシロ(相城) ある城を包囲している敵が、その城を攻めるために築いた櫓や砦(後略)」とある。こちらは砦に加え、単独？の櫓であっても「相城」と呼ぶとしている。

また同書では「陣」は「デン(陣)陣営」、類義語として「デンシヨ(陣所) (陣を取った所)軍隊が宿営している場所 (陣所を構ゆる)陣営のある所に柵をめぐらす、すなわち、そこを固める」等や関連する「陣屋」「陣山」「陣頭」「陣取り」「陣中」を挙げるが、「陣城」については挙げられていない。

もっとも「陣城」も、南北朝～戦国期の史料に表れる(竹井 2017)。例えば天正 3 年(1575)の長篠の合戦時、武田勝頼は敵対する織田信長が「陣城」にあったことを述べている。「信長至陣前押寄候処、構陣城籠居候間、入人数之砌当手之先衆聊失利候」(「真田家文書」米山編 1983)のとおりであり、武田勝頼が織田信長の陣の前まで攻め寄せたところ、信長方は陣城を構えて籠っていたというのである。実際に信長が陣城と呼べるような構築物を築いていたかどうかは疑問であるが(高田 1996)、勝頼はそのように認識したか、攻め込めなかった言い訳として“陣城”があったと記したか、のいずれかであろう。用例は意外に限られるが、他の史料でも「陣城」は使用される。その意味するところは、およそ今日いうところの陣城と等しいと思われる。

城郭研究の泰斗であった鳥羽正雄氏によれば(鳥羽 1971)、「陣城 じんじろ」は「戦国大名などが、戦時に行軍し、一時的に駐留する場合に、その宿所を臨時に城の構造につくるものをいう。陣営である(後略)」とある。また「付城 つけじろ」については「敵城を攻める際、攻囲軍の拠所として築いた小形の城。一郭な

したがって、備中高松城攻めとは、接続型陣城と連立型陣城という異なる城郭システムが対峙した戦いとして再評価することができる。また、従来は奇策として理解されることの多かった水攻め築堤についても、単独の土木事業としてではなく、接続型陣城を構成する重要な要素の 1 つとして理解する必要がある。

最後に本稿では、これまで個別に検討されてきた陣城と築堤を、陣城軍全体の運用という観点から捉え直した。今後は個別城郭の縄張や編年のみならず、陣城市群相互の関係性や情報伝達のあり方にも着目することによって、戦国期城郭の運用実態をより立体的に把握することができるであろう。

註

- 同時代資料に見える城名は「高松城」「高松」であるが、本報告では慣例に従い備中高松城に統一した。
- 備前・備中国境に展開した毛利方の防衛城館群を指す。
- 総社市報告書では名越 1 号砦とされるが、本報告では『岡山中世城館跡総合調査報告書』に従い名越 3 号砦とした。
- 面積は QGIS 上で補正した縄張図から、楕円体計算法で算出した。ただし、数値は相対的な目安として扱う。
- 鍛冶山城は足守戦域で最大規模の陣城であり、織田方本営の候補とされる。
- 備中高松城では天正 10 年当時の遺構面は確認されていないが、出土遺物からその後も利用されたことが知られる。
- 『中国兵乱記』では「天神山の峰」と記される。

<参考文献>

高田 徹 2006「織豊期を中心とした臨戦化の城郭」『中世城郭研究』第 20 号 中世城郭研究会

高橋成計 2014「備前宇喜多氏の陣城縄張の考察―陣城縄張の変遷―」『中世城郭研究』第 28 号 中世城郭研究会

鳥羽正雄 1995『新装版 日本城郭事典』東京堂出版

多田暢久 1989「陣城プランの特徴について」『近江の城』32

畑 和良 2008「織田・毛利備中戦役と城館群」『愛城研報告』12 愛知中世城郭研究会

畑 和良 2020「備中国の政治・軍事動向と城館」『岡山中世城館跡総合調査報告書』第 2 冊―備中編― 岡山県教育委員会

松岡 進 2002「第七章 戦国期・織豊期における築城技術―研究状況整理の試み―」『戦国期城館群の景観』校倉書房

乗岡 実 2013「備中高松城攻めの陣城市群」『織豊城郭』第 13 号 織豊期城郭研究会

山本浩樹 1994「備中高松城攻めと備前・備中境目地域」『岡山地方史研究』94

<発掘調査報告書他>

岡山市教育委員会 2006『南坂 8 号墳・一国山城・一国山古墳群』

岡山県教育委員会 1994『甬崎天神山城』

岡山県教育委員会 2020『岡山中世城館跡総合調査報告書』

総社市教育委員会 1999『総社市埋蔵文化財発掘調査報告 15 名越 1・3 号砦・千引砦』

いし二郭位で、土居、堀を設けた。これは敵の戦力が強い、敵の城が堅固であるか、すみやかに敵を屈服させることが出来にくいと思われた場合に、城を築き、味方の軍勢を置いて城を押え、その周辺の地域を鎮圧するためである(後略)」と説明する。類義語として「向城 むかいじろ」では、「敵の城を攻める場合、容易に落としにくい場合に、これを監視し、その周辺を制圧するため設けた寄せ手の大将の駐留する城である。ゆえに軍の進退連絡、物資の輸送などのことを考え、位置・地勢・交通等の関係を深く考慮して、一般の付城よりは幾分念を入れて築造すべきものとされていた」、また、同じく「対の城 たいのしろ」では「敵の城を攻めるにあたり、攻める方の拠り所として築いた城」と説明している。

今日、城郭調査・研究上のバイブル的な存在である『日本城郭大系』の中で、小和田哲男氏は「陣城じんじろ 戦場で造られた臨時の城。単に幔幕をめぐらした程度の陣・陣営とは異なり、柵を設け、堀を掘って城のように築き上げたもの。掻揚城となることが多い。広さは約十五間から約二十間四方となることが多い(後略)」と説明する(小和田 1981)。類義語として「対城 たいのしろ」は「向城・付城に同じ。敵の城を攻める時、攻める側が対陣のために築いた城で、短期間の臨時的なものが普通」、同じく「付城 つけじろ」は ①向城・対城と同じ意で、敵の城を攻める際に攻囲軍が攻城用の足がかりとして築いた城(中略)②本城とは別に、国の境目などに築かれた支城のこと」と説明している。

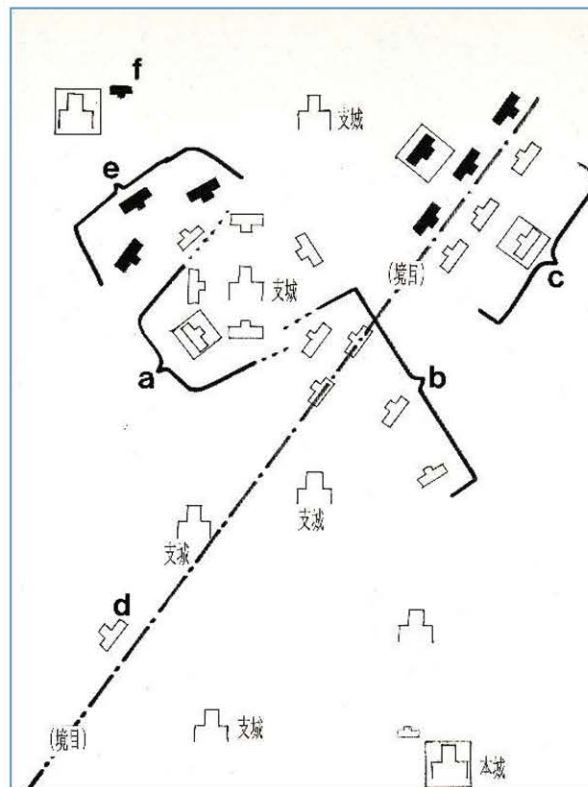
鳥羽氏の「陣城」の説明では近世軍学で唱えられた内容を中心にするため、行軍時においては一時的に駐留する宿所とするが、今日の城郭研究では小和田氏が述べるように「戦場で造られた臨時の城」の意味で用いられることが多い。つけ足せば、戦場の後方、兵站を担う役割で築かれた臨時の城郭も含めて良いだろう。

筆者は、陣城について六つのパターンに分けて整理したことがある(高田 2006 a)。次の a～f である。

- a : 敵方の本城・支城を包囲するように築かれた城郭。付城。
- b : 自領から敵領へ侵攻する際の兵站線をになう城郭。つなぎの城。
- c : 敵・味方双方が対峙するように築かれる城郭。
- d : 敵領に対する橋頭堡的城郭。
- e : 付城に対する付城。
- f : 敵方・味方を問わず、本城・支城等の防御を補助するために築かれる城郭。

パターン分けの是非はともあれ、複数の陣城パターンの一つが付城となることは大方の理解を得られるであろう。もっとも実際の遺構を通して、上記のどの陣城にあたるのか、そもそも陣城と言えるのか、はっきりしない場合は多い。そうした中、陣城である蓋然性が高いと言えるのは a の付城となろう。

付城の役割としては、鳥羽氏が述べるように①敵の戦力が強い、②敵の城郭が堅固である、③すみやかに敵を屈服させることが困難な場合が挙げられるが、これに④攻め手が多方面での戦闘を行う必要がある(兵力を分散させざるを得ない)、⑤敵城を即座に攻略することなく包囲する(敵方の援軍をおびき出す)(高田 2006 b)等を加えることができる。



陣城のパターン模式図

『日葡辞書』では「ツケンロ」と発音するが、今日では鳥羽氏や小和田氏が述べるとおり「ツケジロ」と発音することが多い(角川書店刊の『信長公記』(陽明文庫本)では「つけのしろ」とルビを振るが、原典では未確認)。意味としては『日葡辞書』では砦(城郭に等しいとみられる)のみならず、防御用障害物を挙げている。防御用障害物とは、柵や逆茂木等、単体あるいはラインとして築かれた堀・土塁等を示すものであろう。高松城(岡山県岡山市)や竹ヶ鼻城(岐阜県羽島市)で羽柴秀吉が築いた水攻め用の堤防も付城、あるいは付城のパーツとして位置づけることもできよう。

なお、向城も対城も、今日の城郭研究ではほぼ使用されることはない状況にある。鳥羽氏によれば付城のうち、寄せ手の大将が駐留したものが向城ということになるが、もっぱら付城として全体が括られるようになっている。本稿では付城の中での区分を図るため、便宜的に向城も用いることとする。

3 籠城する城郭と付城の距離

(1) 初期の織田信長による陣城

織田信長が最も早くに築いた陣城は、弘治 2 年(1556)実弟であった織田信勝(一般に信行)に対抗するために築いた名塚砦(名古屋市西区)であり、これは先の陣城パターンの d にあたる。a の陣城として築かれたのは、岩倉城(愛知県岩倉市)攻めが最初とみられる。『信長公記』によれば永禄 2 年(1559)に信長は岩倉城の「四方しゝ垣二重・三重丈夫に仰付けられ、廻番を堅め、二・三ヶ月近く陣にとりより、火矢・鉄炮を射入れ、様々攻めさせられ」た上で、落城させている。すなわち岩倉城を取り巻くように、四方に猪垣を 2・3 重に設けて包囲し、2・3 ヶ月にわたって廻番の兵を置き、陣を取り寄った(※近寄る。『日本国語大辞典』)上で、火付きの矢を射たり、鉄砲を撃ち込んだり、といった攻撃を加えている。遺構が残されていないので明確ではないが、比較的長期間にわたって包囲戦であったことからすれば、猪垣と共に廻番を駐屯させた「陣」、すなわち付城が接近した位置に設けられていたと考えられる。

(2) 桶狭間合戦時の付城

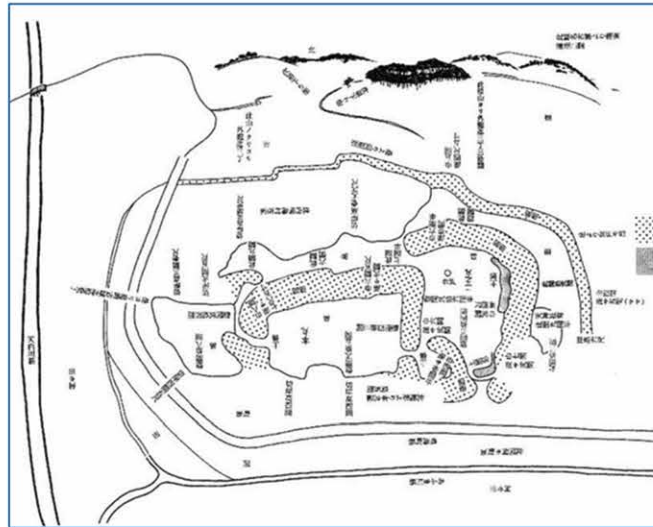
史料上からも存在が明らかとなる信長による付城は、永禄 3 年(1560)の桶狭間の合戦に先立ち、今川方の大高城・鳴海城(名古屋市緑区)を包囲するように築かれた鷺津砦、丸根砦、善照(勝)寺砦、中島砦、丹下砦(同前)となる。

このうち遺構を留めるのは大高城に対する丸根砦である。堀は埋没しているとみられるが、単郭としての構造はおよそ留めている。丸根砦の北西方向に大高城はある。その間は、現在宅地・鉄道等となっているが氾濫平野・海岸平野が広がる。往時は干満のある入り江になっていた部分が多いとみられるが、相互に見通しは効く。

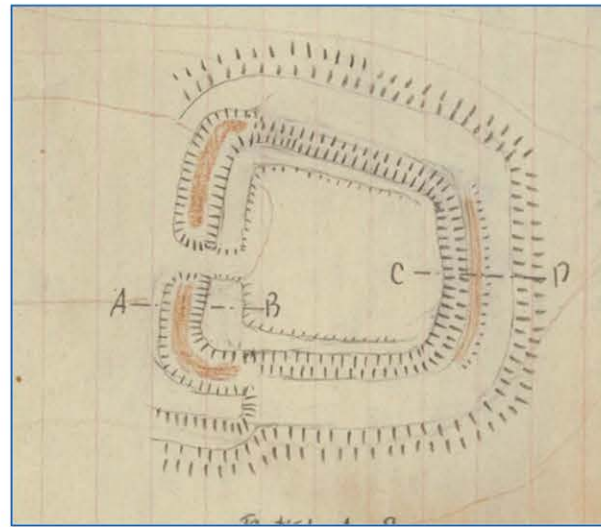
丸根砦の標高は約 34.2m、対する大高城主郭の標高は約 19.1m である(いずれも海岸近くにあるため標高と比高の値は近似する)。丸根砦のほうが高いわけだが、ここで注目したいのは両者の距離である。直線距離で約 835m に過ぎない。戦闘態勢になれば甲冑を装着し武器を携行することになるが、丸根砦からでは 15 分前後で大高城の間際まで行き着くことができよう。逆に大高城側から出撃して丸根城を強襲する状況にあっても、同程度の時間で行動できたはずである。それだけ近接した状況下で攻城戦・籠城戦が展開されていたということである。



大高城から見た丸根砦(矢印)



鳴海城絵図(名古屋市蓬左文庫「古城絵図」トレース)
(名古屋市 1999 より転載)



善照寺砦縄張り図
(陸軍築城部本部編『日本城郭史資料』第 18 冊尾張国)



鳴海城と善照寺砦位置図(国土地理院『地理院地図電子国土WEB』を転載・加筆)



鳴海城と善照寺砦断面図(国土地理院『地理院地図電子国土WEB』を転載・加筆。縦軸は 5 倍<以下同。断面図も>)

四方の規模であるが、西方に外郭部が存在した可能性がある(高田 2000)。善照寺砦と鳴海城は一続きの丘陵上にある。西端にあるのが鳴海城、東端にあるのが善照寺砦となる。前者主郭の標高が約 14m であるのに対し、善照寺砦のほうは約 22m と高い(数値については国土地理院『地理院地図電子国土WEB』による。以下同)。

もっとも両者の間には標高 22~27m 前後の高まりがあるから(一部は学校建設により削土されているとみられる)、高櫓でも構えなければ相互の視認は直接できなくなっている。両者の直線距離だが、外縁部間で計測すると約 465m となる。鳴海城は桶狭間合戦後にも使用され、拡張されている可能性もあって桶狭

桶狭間合戦にかかわってもう一例挙げておく。鳴海城に対する善照寺砦は戦後になって堀・土塁が破壊されているが、それ以前に作成された縄張り図が残されている。周囲を堀・土塁で囲み、虎口は鳴海城を向いた西方に開く。このうち虎口南側の土塁は幅広となり、櫓台であったとみられる。全体は約 40m

間合戦当時の規模ははっきりとしない。善照寺砦も外郭を有した可能性はあるが、これもはっきりとしない。推測に留まるが、両者の距離間は 240m 以下であった可能性もある。

攻めるべき城郭の規模、籠城する兵の多寡、攻める側の兵の多寡、そして付城を築くに適した地形があるかないかによって、当然こうした距離間は異なってくる。時に敵城よりも低い位置にあったり(周囲に平地が広がる場合など)、距離がやや離れすぎていたり、といったこともある。それでも基本は敵城を見下ろし、視認できる範囲で、しかも包囲する敵城からの妨害工作をできるかぎり回避し、築城を完遂できるといった遠からず近からずの位置に付城は築かれたとみられる。善照寺砦の位置よりも西方にある標高 22~27m 前後の高まり付近ならば鳴海城を見下ろせるのだが、その位置では近すぎたのではないだろうか。

敵城を完全に封じ込め、その動きも封じ込めた状態ならば、できるかぎり接近して攻撃を加えたほう効果があるだろう。しかし、敵方の勢いもあり、城外に繰り出すような状況であれば、逆襲を受ける状況も出てくるのである。逆襲を受けて大将首を取られてしまっは、形勢が逆転してしまう可能性大である。逆襲を受けたとしても、ある程度持ちこたえることができるよう相応の普請・作事を施し、安全性を確保できるよう中心部分をしっかりとした普請・作事を施すのである。

(3) 小谷城攻めの付城

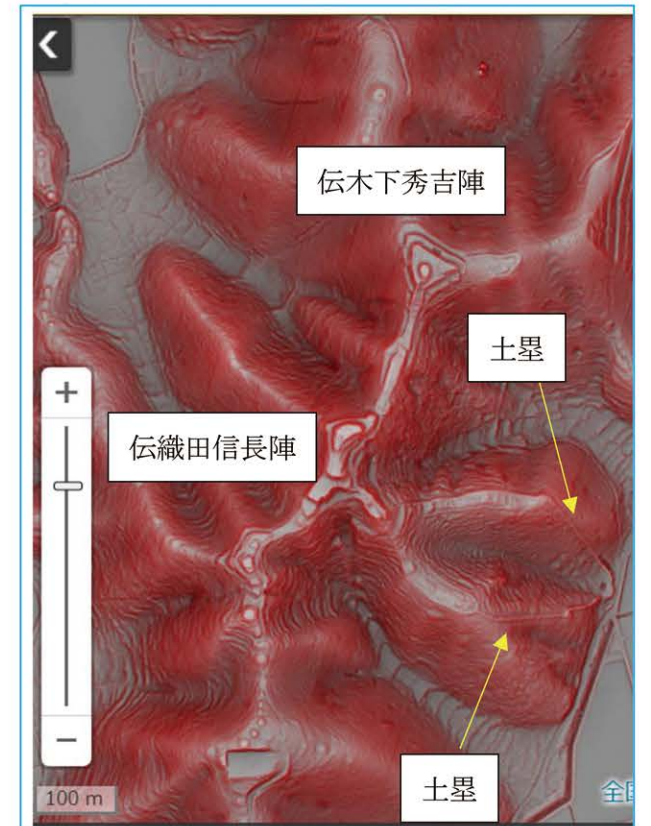
遠からず近からずの距離は、何より攻めるべき城郭の周囲に広がる地形に大きく影響される。元亀 3 年(1572)、浅井長政居城である小谷城(滋賀県長浜市)を攻める織田信長は、虎御前山砦を築く。小谷城の南西、虎御前山に砦は築かれた。付城であるが、攻め手大将の織田信長が在陣していることからすれば、向城にあたる。『信長公記』によれば御座敷も設けられ、そこからの眺めは絶景であったという。

小谷城の主郭は標高約 349m(最高所の小谷山にある大嶽砦は約 494m)であるが、先端部の出丸では標高約 152m である。

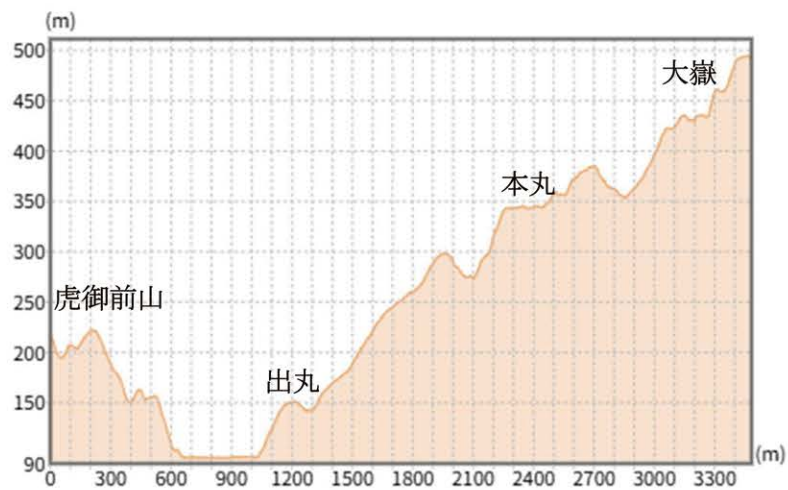
一方、虎御前山砦の主郭は標高約 222m、小谷城寄りの先端部となる伝木下秀吉陣の標高は約 224m である、つまり互いの山上先端部では虎御前山砦のほうが高い位置にある。直線距離で伝木下秀吉陣と出丸の



小谷城と虎御前山砦位置図(カシミール 3D を転載・加筆)



虎御前山砦赤色立体地図(全国 Q 地図より転載・加筆)



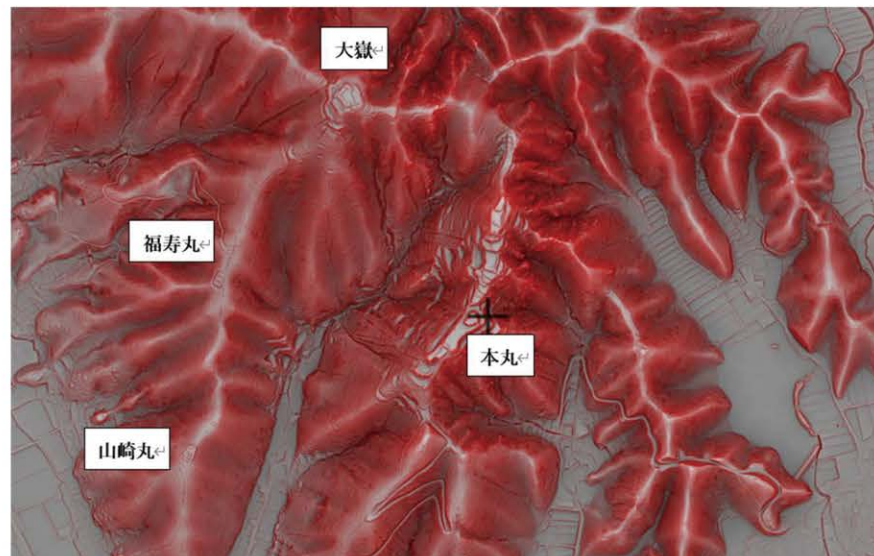
小谷城と虎御前山砦断面図

盛陣(山頂部にある伝織田信長陣東方)の東側、尾根上から谷間を塞ぐように延ばされた土塁が見出されている。一部破壊を受けているが、谷の入り口で土塁は開口し、虎口を造り出していたと考えられる。

この囲い込まれた谷間には、比較的まとまった兵を駐屯させることが可能となる。あらかじめ谷間に兵を駐屯させ、一気に小谷城側へ攻め出すこともできたことだろう。注意したいのは、谷間とそこに設けられた虎口は小谷城のほうに直接開いておらず、隠れたかのような位置にあることである。こうした位置であれば隠密的な軍事行動も可能になるだろう。仮に逆襲を受けた状況になっても、虎口・土塁によって敵を支えることができようし、山上の曲輪群からの支援を受けることもできる。

攻めるべき城に対し付城の虎口をどこに設けるかは、どのように戦闘を展開させようとしていたか、付城どうしがどのように連携したか、後方とどのように兵站線を結ぼうとしていたか等を考える上で着目すべき点となろう。

ところで小谷城本丸から直線距離で約 800 離れた大嶽砦は、主郭部を見下ろす位置にある。両者は尾根によってつながるが、その尾根は弓なりに蛇行しているから地図上での距離は約 1.17 km となる。歩行上は高低差も加わるから、さらに長くなる。それはともかく浅井長政が小谷城に籠城した際、支援する朝倉義景方の一軍は大嶽砦に駐屯することとなる。これは先の 6 パターンの f に相当する。ところが小谷城攻略を進める織田信長自身が出向いて大嶽を陥落させた上で、小谷城本丸以下の曲輪を攻略する足場とした。

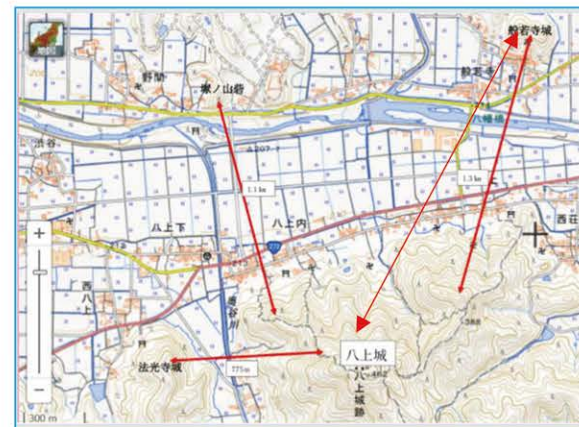


小谷城赤色立体地図(全国 Q 地図を転載・加筆)

間を計測すると、約 864m となる。間には北国街道が走る平地部があって高低差を有するものの、指呼の間であると言える。

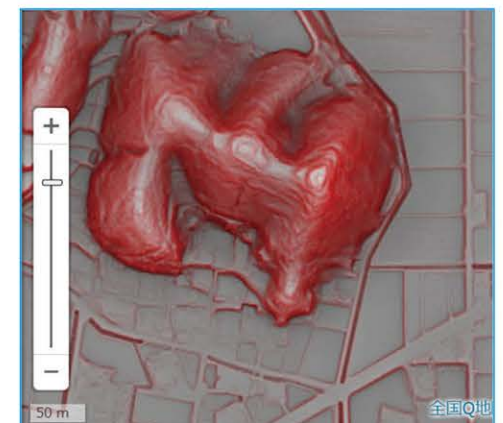
地図上の直線距離では至近距離だが、実際には伝木下秀吉陣付近からは北西および北東に尾根が延びている。小谷城側を監視するだけならば伝木下秀吉陣は絶好の位置ながら、ここから尾根を直ちに下ろうとしても、寡兵ならばともかく、まとまった兵を一気に出撃させることは難しいと思われる。近年、伝佐久間信

であるから、あらかじめ普請を施して城郭(陣城)とし、本城の防衛に充てていたのである。小谷城本丸から谷を挟んだ尾根上の福寿丸・山崎丸も同様の役割を担ったものであろう。山城である場合は尾根が四方に延びていくことが多い。尾根が長く延びていたり、尾根続きに高所が存在していたりすると、それは攻め手にとっては格好の足場となる。足場とされないよう、高所をあえて城内に取り込んでおいたり、尾根上の適当な場所に堀切等を設けておいたり、といった嚴重な遮断を施すのである。それが攻略されてしまっ



八上城と般若寺城位置図

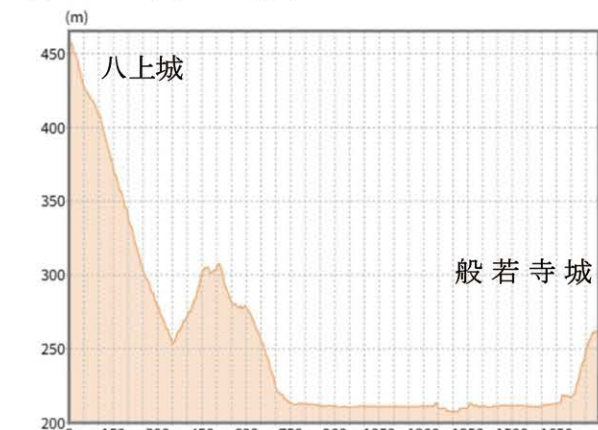
(『地理院地図電子国土WEB』を転載・加筆)



般若寺城赤色立体地図

(全国 Q 地図より転載)

(4) 八上城攻めの付城



八上城・般若寺砦断面図

間ないように囲い込んだという。現在では八上城を囲む堀や柵はおろか、堀の痕跡を認めることができない。

ただし高橋成計氏の踏査により、八上城の周囲には複数の明智軍によって築かれたと考えられる付城遺構が確認されている(高橋 2000)。これらのうち、般若寺城は明智光秀の向城といわれている。般若寺城は八上城主郭からは直線距離で約 1.8 km、直近の曲輪からでは約 1.3 km 離れている。互いに視認することができる範囲であるが、間には篠山川が流れている。明智方による堀・堀・柵が設けられていたのならば、篠山川を越えた八上城寄りの位置であったのではないだろうか。

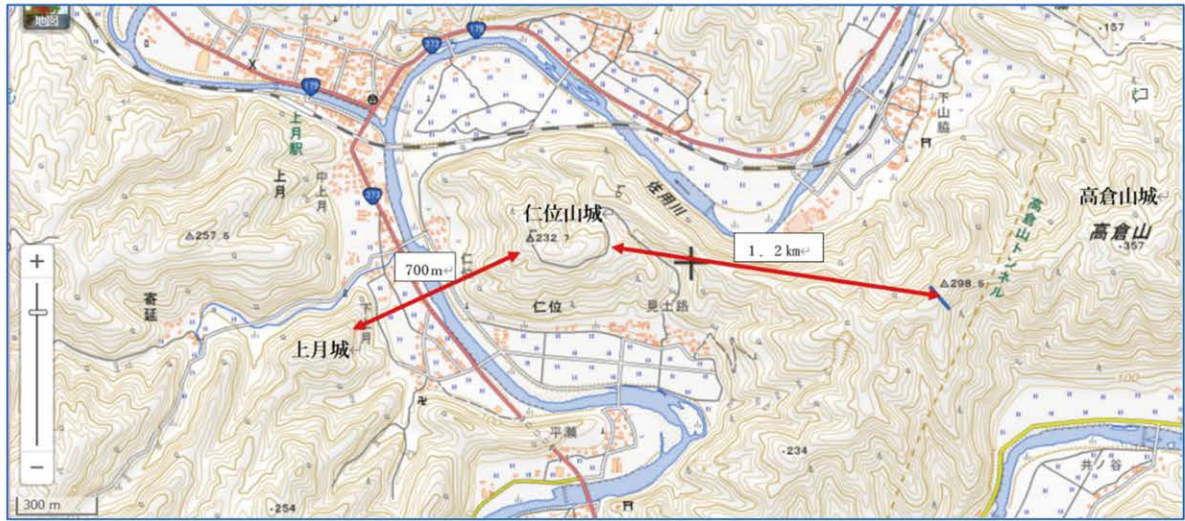
(5) 上月城攻めの毛利氏付城

次に織田方以外の付城を見てみる。付城の構築は織田信長だけではなく、徳川家康(高田 2022)やその他の戦国大名らも攻城戦においてしばしば構築している。

天正 6 年(1578)織田方であった上月城(兵庫県佐用町)を包囲するため、毛利輝元方は周囲に付城を築いている。その一つで向城にあたるのが仁位山城(同前)である。

ちなみに上月城を攻める仁位山城をはじめとする毛利方の付城に対し、織田方が対抗・支援上築いたのが、高倉山城(同前)であった。高倉山城は羽柴秀吉によって築かれた。

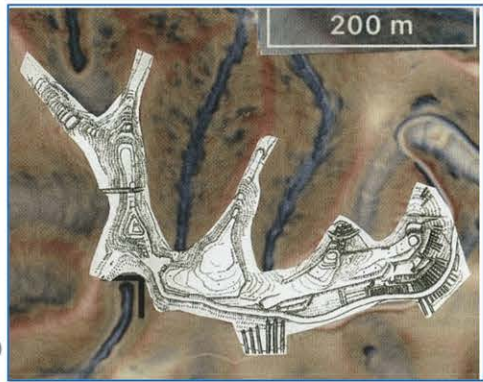
上月城の北東約 700m、佐用川を隔てた山上に仁位山城はある。仁位山城は上月城よりも高い位置にあり、東側を除く三方を佐用川に囲まれており、周囲への見渡しが効く上、要害性も強い。東側の尾根続きに高倉山城があるが、約 1.2 km離れている上、互いを結ぶ尾根は単純につながらない(仁位山城の北東から延びた尾根は、細長く延び、間に深い谷が入る。そのため高倉山城から尾根伝いに直接攻め出すのは相当のリスクをとまったであろう)。



上月城・仁位山城・高倉山砦位置図(『地理院地図電子国土WEB』を転載・加筆)



上月城・仁位山城・高倉山城断面図



仁位山城現況図(背景は兵庫県CS立体図)

(6) 長篠城攻めの武田氏付城

天正3年(1575)の長篠合戦に際し、徳川家康領の長篠城(愛知県新城市)を包囲した武田勝頼軍は、周囲に複数の付城を設けた。長篠城から宇連川を隔てた山上に設けられた中でも武田信実らが守った鳶ヶ巣山砦は、宇連川を隔てて長篠城を見下ろす位置にあり、その攻略が織田・徳川軍の勝利に大きく貢献したことは著名である。

一方、攻め手の大将である武田勝頼の本陣は、長篠城北方の医王寺に置かれた。医王寺背後の丘陵上には、堀・土塁・土橋等を残す医王寺砦が残されている。砦の頂から長篠城外郭までの直線距離は約 850mである。その間は丘陵に挟まれて峡谷状となるが、なんとか長篠城を視認することはできる。前方(南側)の丘陵上には天神山陣所、大通寺陣所が置かれ、長篠城に対峙した。医王寺砦は後方にあつて陣所によって擁護された、比較的安全な場所に築かれていたと言える。武田勝頼の本陣としてふさわしい位置にある。ただし堀・土塁を構築しているが、織田信長やその家臣が築いた付城・向城と比べると、区画が明瞭では

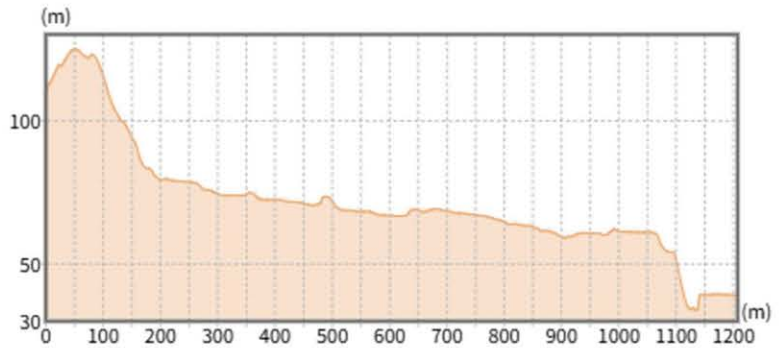
ない、土橋部分を除くと虎口や動線がはっきりしない点が挙げられる。また武田氏城郭に多く見られる丸馬出や内枳形等も認めることができない。武田氏城郭として使用された時期も明瞭ながら、位置づけが難しい遺構である。

ちなみに大通寺陣所、天神山陣所には、明瞭な遺構を認めることができない。これには合戦後の改変に

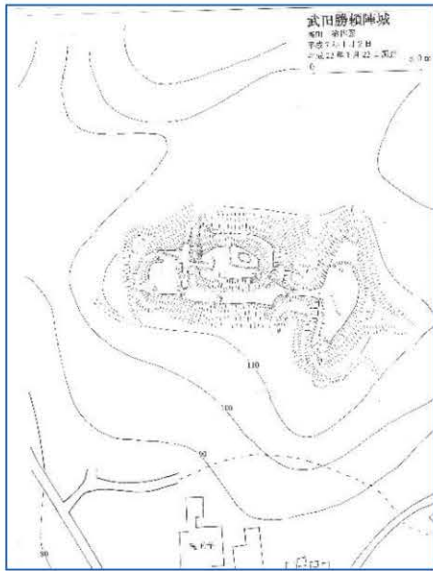


長篠城・医王寺砦位置図

(『地理院地図電子国土WEB』を転載・加筆)



長篠城・医王寺砦断面図



医王寺砦現況図

よる可能性がある一方、元々堀や土塁を巡らすような付城としての構築がなされていない可能性、の二通りの考えができる。敵城を包囲する陣所が設けられても、必ずしも付城構築がなされたとは限らないからである。

おわりに

籠城する城郭と付城の距離は周辺地形に大きく影響されるが、比較的近接した距離間にあった。本稿では地図上での直線距離を示したが、実際には今少し近接した位置に柵等が設けられ、せめぎ合いがなされたと考えられる。現況遺構が確認できなくとも、往時の景観、攻め手となる側の作事、これに対抗する守り手(籠城側)の作事の内容は念頭におかねばなるまい。

そうした中で籠城する城郭を視認できること、敵の逆襲を極力回避できることが重視されたとみられる。視認できるということは、対する城郭を監視し、その動向を見て取れるということである。同時に籠城する側からも視認できるわけであつて、直接攻め込まれるリスクがなくとも相当な圧迫感・緊張感をもたらしたのではないかと想像する。

多くの攻城戦の場合、籠城する側に対し攻撃をする側は兵力が優位な状況で展開される。攻撃三倍の法則が唱えられるように、防御壁としての城郭を構えて抵抗する籠城側を撃破するには兵力に加え、自らの優位性が勝っている状況で行われる。ただし攻めるべき城が広く、周囲に複雑な地形が広がるのであれば、包囲網も拡散せざるを得ない。完全包囲するには、周囲に土堤を築いて水中に城郭を孤立させる水攻めを行うしかあるまいが(しかし、これとて外部との連絡が可能となったふしがある)、これも地形・立地・

有岡城攻めにおける陣城群の構造

兵庫県立考古博物館名誉学芸員
山上 雅弘

1. はじめに

織田信長による有岡城攻めは天正6年（1578）10月から翌年11月まで繰り広げられ、有岡城の落城によって終結した。この間、織田方是有岡城の周囲に付城・陣城を築いて包囲網を敷いたといわれている。しかし、通説で述べられてきた付城・陣城は主要なものが遠方に位置する上（図1）、有岡城の西側に陣城がないなど包囲網というには不完全であるが、これまでこのことにはあまり関心がもたれることはなかった。そこで、本稿では城攻めについて通説を通して概要を紹介した上で、『信長公記』に基づいた経緯の検討や、資料を使って有岡城攻めの陣城・付城について再考を行うこととした。

2. 合戦の経緯

先ず、有岡城攻めの経緯を『信長公記』の記述を中心に紹介しておきたい。

荒木村重は天正6年6月までの上月城攻め、同月の神吉城攻めに織田方として参戦するが、10月に謀叛を決行する。信長は天正6年11月、自信が摂津に出馬し、滝川一益・丹羽（惟住）長秀らに茨木城を攻撃させ、キリシタン大名の高槻城主高山右近には宣教師オルガンチーノを使って帰順させて切り崩しを計った。さらに、信長は11月27日に古池田、翌日、有岡城の西側、西国街道沿いの古屋野（昆陽寺・伊丹市昆陽）に陣を進めた。一方で滝川一益に鼻熊城（花熊）・兵庫津など西摂地域への示威行動を命じている。そして12月に（滝川）一益・（丹羽）長秀らが塚口に陣を敷いて、有岡城の総攻撃を実施する。しかし、この時の攻撃では落城には至らなかった。このため信長は古屋野から古池田に戻り、同時に有岡城を取り囲んで付城を配置させた（この時の陣配置が図1である）。その後、徐々に追い詰められた有岡城では天正7年（1579）9月 戦線の立て直しを企図して村重が家臣5・6人と有岡城から嫡子村次の尼崎城に移る。10月に士気の低下した有岡城は滝川一益の調略により、上臈塚砦から内通者が出て、織田勢が侵入して火がかけられ、「はだか城」とされたため11月に落城する。12月 尼崎の七松で村重家臣が処刑され、その後、京の六条河原で村重の一族が処刑された。村重は尼崎城から花熊城に移って戦いを継続するが、翌年には同城も落城し、村重は毛利を頼り西国に逃れた。

3. 通説からみた有岡城攻めの陣城・付城

（1）陣城・付城の分布

以上のように籠城を続けた結果、孤立した有岡城が調略が原因で落城するというのが既往研究の大方の理解である。そして、この経過を踏まえて図1の配陣図が有岡城包囲網として紹介されてきた。図1は『信長公記』の天正6年12月11日条の付城配置の記述に基づくものであるが、この配置を見て有岡城が周囲を囲まれて孤立した、という理解はなかなか難しいものがあるのではないだろうか。

因みに有岡城との距離は古池田5.5km・刀根山3.9km・原田3.6km・塚口3.0km・賀茂4.5km・毛馬1.5km、信長が在陣した小屋野（昆陽）3kmとなる。毛馬を除くと付城というには少し距離があることに気づくだろう。因みに三木城の陣城では平井山2.7km、仁位谷奥付城0.9km、南側の内側付城群が1km以内・外側付城群が1.5km前後、北側の加佐山城2.0km 慈眼寺砦2.5kmである。

動員人夫、相応の時間を要することになる。

本稿で触れた毛利氏、武田氏に限らず、戦国大名・国衆らは敵方の城郭を攻める際に付城を築くことがあった。そうした中であって織田信長、その後を継いだ豊臣秀吉は付城を用いた攻城戦を多用し、その多くで敵方の城郭を開城・落城させることができた。

詳しく述べるだけの紙数はないが、織田信長・豊臣秀吉とその家臣団によって築かれた織豊系城郭の付城は複郭構造を有し、技巧的な縄張りを有するものが多い（一方でそうではないものもある）。三木城攻め（金松2025）、鳥取城攻め（吉田1985）の付城しかりである。これは攻城戦の長期化、籠城軍側からの逆襲に対処したものであったと考えられる。そして抛るべき付城を築いておくことで、逆襲を受けた状況下でも必要最小限の兵で対応できるとし、いわば城郭VS城郭（付城）の戦いを優勢に導こうとしていたと考えられるのである。

参考文献

- 奥野高廣・岩沢愿彦校注1969『信長公記』 角川書店
- 小和田哲男1981「城」『日本城郭大系別巻Ⅱ城郭研究便覧』 新人物往来社
- 金松誠2025『戎光祥城郭叢書4 畿内近国の城郭と縄張技術』 戎光祥出版
- 高田徹1996「三河長篠城及び長篠合戦陣所群に関する検討」『中世城郭研究』10 中世城郭研究会
- 高田徹2006a「織豊期を中心とした臨戦下の城郭」『中世城郭研究』20 中世城郭研究会
- 高田徹2006b「小牧・長久手の戦いにおける城郭の攻防―尾張竹ヶ鼻城を中心に―」藤田達生編『近世成立期の大規模戦争―戦場論下―』 岩田書院
- 高田徹2000「桶狭間合戦時の織田氏陣城」中世城郭研究会『中世城郭研究』14
- 高田徹2012「畿内進出以前の織田信長陣城」『織豊期城郭研究会2012年度鳥取研究集会資料集 織豊系城郭の陣城』 織豊期城郭研究会・鳥取市教育委員会
- 高田徹2013「織田期の「向城」―虎御前山砦の評価を中心に―」織豊期城郭研究会『織豊城郭』13
- 高田徹2022「徳川家康の陣城考―三河支配期を中心に―」『中世城郭研究』36、中世城郭研究会
- 高橋成計2000「第4部 城郭資料」八上城研究会 編『戦国織豊期城郭論―丹波国八上城遺跡群に関する総合研究―』 和泉書院
- 高橋成計2017『織豊系陣城事典（図説日本の城郭シリーズ6）』 戎光祥出版
- 竹井英文2017「南北朝～戦国前期の「陣」について」東北学院大学学術研究会『東北学院大学論集歴史と文化』55
- 鳥羽正雄1971『日本城郭辞典』 東京堂出版
- 土井忠生他1980『邦訳日葡辞書』 岩波書店
- 米山一政編1983『真田家文書』下 長野市
- 名古屋市教育委員会1999『鳴海城跡（第1～7次）』
- 吉田浅雄1985『羽柴秀吉の天正鳥取陣営跡之図 鳥取城包囲隊形と遺構の実測』 灯心亭文庫



図1 有岡城と周辺の付城（『信長公記』天正6年12月11日条に基づく配陣図）
（伊丹市立博物館2006より転載）

従来の説明で主に紹介されてきた陣城は有岡城の東側、千里丘陵上に位置する池田城・刀根山御坊・原田城の3つの陣城と、南の塚口御坊（環濠集落）である。これらはいずれも場所比定が可能で遺構が説明できることから、事例として紹介されてきたと思われる。もちろんこれらは武庫平野を眺望し有岡城を監視する上では適切な場所にある。その上、織田方の兵站路となる京都側からのルート（西国街道など）を確保するためにも重要な位置を占める。また、塚口も南側の有岡城支城である尼崎城との連絡を絶つ上では欠かせない位置にある。この他、倉橋・大和田は実態は不明ながら大坂本願寺との連絡を遮断する上では重要な配置といえるだろう。しかし、実際の城攻めとなると、これらはあまりに遠方であり、この配置だけで包囲網というには違和感を感じざるをえないことも事実である。

（2）主要な陣城

A 池田城（池田市城山町・建石）

城主池田氏は、織田政権下で摂津三守護の1人となるが、荒木村重によって当主池田勝正が追放され、原田城は村重の支配下に置かれるが、村重は天正2年に伊丹氏を倒して伊丹城を有岡城と改名し本城としたため、池田城は廃城となる。天正6年これを信長が陣とした。

同城は惣構を持つ大規模な拠点城郭として知られるが、最終段階で主郭内部が堀によって分割され、礮を用いて虎口構造を嚴重に防御して、居住機能を持たない軍事的な構造となったことが発掘調査で確認されている。報告書はこの変貌を村重によるものとする（池田市教育委員会1994・2000）。報告書に従えば信長はこの軍事的な構造を再利用して陣所としたことになる。



図2 天正期の池田城主郭（池田市教育委員会1994より転載・改変）

B 刀根山（豊中市刀根山元町）

刀根山御坊に比定されている。刀根山御坊は本願寺3世法主覚如の長男・存覚が、貞治二／正平十八年（1363）に創立したとされる。陣城の番将には稲葉新六貞通、氏家左京亮（直昌）、安藤平右衛門（定治か）、芥川某が置かれた。

現在、刀根山御坊に推定される場所には本願寺派の常楽寺が建つ。この寺の南側で、待兼山遺跡として平成5年度に戦国時代の埋甕遺構が検出され、周辺に御坊の関連施設が広がることが確認された（豊中市教育委員会1995）。

C 原田城（豊中市曾根町・原田）

国人原田氏の城郭である。有岡城攻めでは、原田城を古田重然や中川清秀らが伊丹城の攻城戦の砦として活用した。

平成6年（1994年）の発掘調査によって一旦廃城になっていた北城を復興させ、改修が行われたとされる。原田城は北城と南城からなるが、北城の主郭を巡る堀1（幅10m×深さ10m）が大規模であることから、有岡城攻めの陣城による改修とされている（豊中市教育委員会1994・2005・2021など）。

D 塚口（御坊・尼崎市塚口町）

塚口は真宗寺院正玄寺を中心に土塁・堀によって惣構を築いた環濠集落であった。織田軍はこれを利用して陣城とした。天正6年12月の滝川一益・丹羽長秀らによる有岡城攻めでは塚口を拠点に攻撃が行われている。

惣構には4つの虎口があるが、このうち南町門とされる虎口が平成17年度の発掘調査で検出され、横矢構造を持つことと、二重堀になることが確認されている（兵庫県教育委員会2013）。

4. 有岡城攻めの再検討

（1）「信長公記」からみた付城・陣城の記載

A. もう1つの付城配置

以上、通説に基づいた有岡城攻めを紹介したが、これまでの付城・陣城の配置には疑問が残されることを確認した。そこで『信長公記』の記述や資料を検討して戦いの経緯を改めて検討したい。まずは『信長公記』の記述から検討を行う。同書では天正6年12月条の他に、天正7年4月条にも、信長が「伊丹表定番仰付けられ候キ」として付城への城番の配置が命じている。しかし、この記述はこれまであまり注目されてこなかった。天正6年12月条（図1）のものと比べながら検討したい。



写真1 刀根山御坊の埋甕遺構（豊中市教育委員会提供）

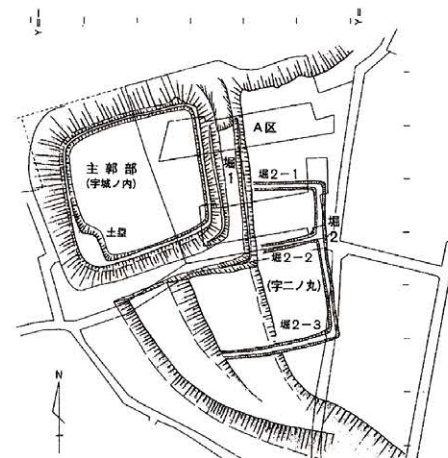


図3 原田城北城概念図（豊中市教育委員会提供）



写真2 原田城北城の堀（豊中市教育委員会提供）



写真3 塚口城南町門の堀（兵庫県立考古博物館提供）

塚口郷	惟住五郎左衛門・蜂屋兵庫頭・蒲生忠三郎	→尼崎市塚口（塚口御坊）
塚口ノ東田中	福富平左衛門・山岡対馬守・山城衆	→不明
毛馬	永岡兵部大輔・与一郎・頼五郎	→尼崎市食満
川端取出	池田勝三郎父子三人	→不明
田中	中川瀬兵衛・古田佐介。	→尼崎市口田中
四隅屋敷	氏家左京之亮	→不明
河原取出	稲葉彦六・芥川	→伊丹市北河原町・下河原町
賀茂岸	塩河伯者・伊賀平左衛門・伊賀七郎	→川西市加茂
池上	中将信忠卿御人数御番替	→伊丹市緑が丘町（北村陣？）
古屋野古城	滝川左近・武藤宗衛門	→伊丹市昆陽
深田	高山右近	→尼崎市東園田町4丁目
倉橋	池田勝九郎	→豊中市棕橋

かくのごとく四方に御取手仰付けられ、二重・三重堀をほり、塀柵を付け、手前々々申付けられ候。

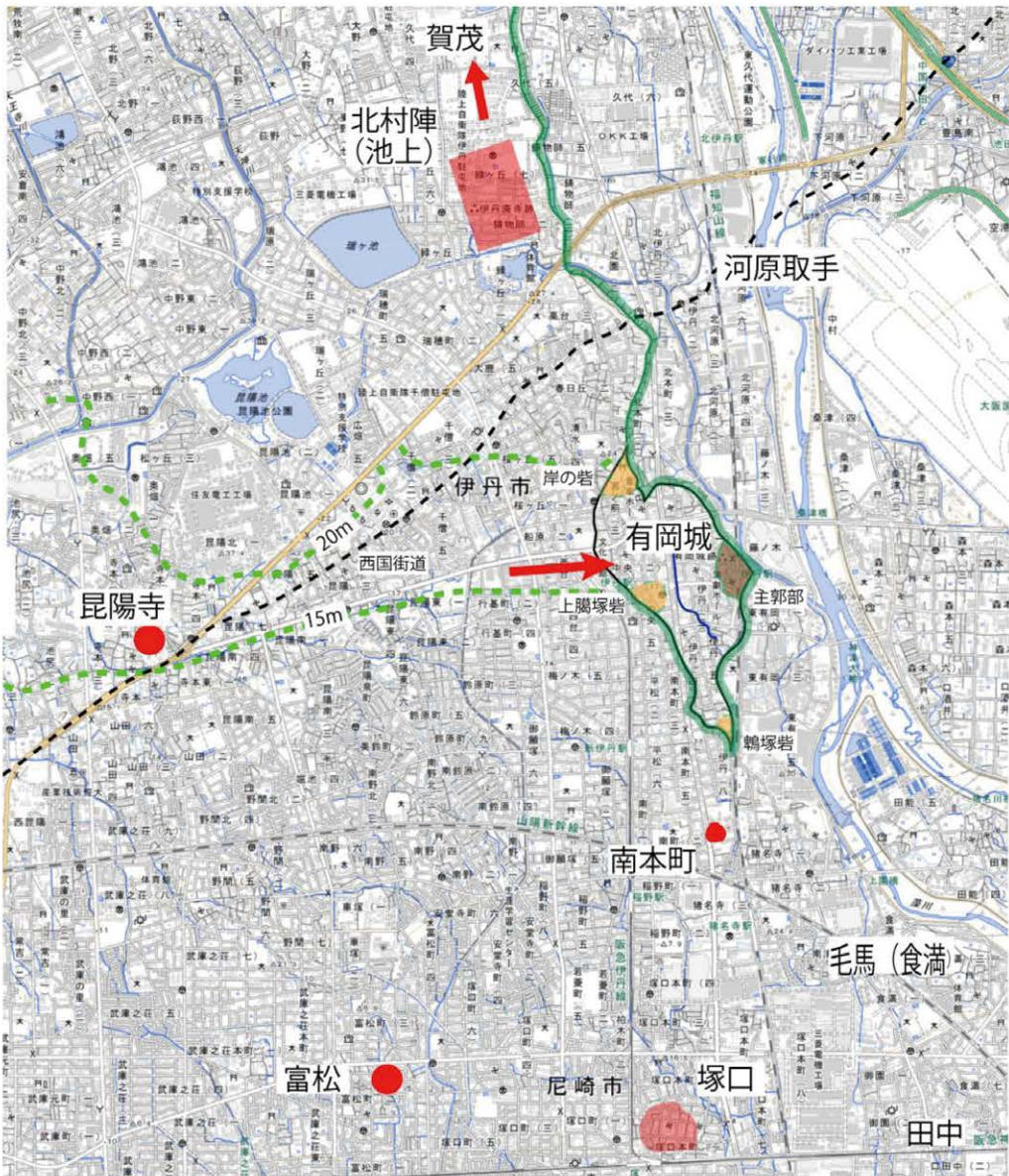


図4 有岡城に隣接する付城の分布

黄色塗は天正6年段階にも登場した陣城である。（この他、古池田は信長御座所として記載がある）。所在不明のものが多いが、この一覧を見ると毛馬（食満）や田中（口田中）・河原取手など有岡城から1～2km前後に位置するものが散見される。つまり、天正6年段階にすでに築かれた毛馬に加えて、近くにある付城が増える傾向にあることがわかる。さらに川端取出・四隅屋敷の所在は不明であるが記載順からみると有岡城の近傍に置かれた陣所の可能性が高いのではないだろうか。しかし、これらを加えても包囲網といえるものではないことは明らかである。

B. 付城・陣城の記述の特徴

次に、付城分布について考えるために『信長公記』記載の陣城・付城についてその特色を確認したい。天正6年12月の『信長公記』の記述によれば、この時に築かれた陣城は多くが既存施設の再築で3～4kmの遠方にあった。このためこれら陣城は、戦略上重要な場所を押さえるものではあるが、多くは後詰めのを目的とするものと考えたほうが妥当と見られる。翌天正7年4月段階になると1～2km前後とやや近くにも付城が立地するが直近といえるものは少ない。加えてその配置は東側に偏っており、西・北側は全くの空白である点も包囲網というには疑問が残された。

そこで『信長公記』の有岡城攻めの付城・陣城の記述の意図について少し考えてみたい。改めて有岡城攻めの項目を確認すると、同書ではほとんどで陣城と在番武将の名前が併記されことに気づく。そして、それらは一軍を率いる武将たちや山城衆などのまとまりをもった勢力である。このことは、在番者が下級であったり、変遷が激しいものは除外される可能性があることを推測させる。つまり、時代を下って編纂された同書は、残された記録や聞き書きなどに頼らざるをえない制約がある。その上、同書にとっては必ずしも戦闘経過・付城・陣城の詳細は記述の中心となる関心事ではない。これに対して現実の現場では武将傘下の下位部隊や在陣が短期間で変遷が著しい付城・攻城施設もあったと思われるが、同書の記述にはそういった記述に注意を払った形成は感じられない。

従って、そのことを前提に西側の付城・陣城を見る必要がある。滝川一益は戦いの初期段階から有岡城攻撃の中心的な役割を果たした武将であるが、天正6年12月の有岡城攻めでは南の塚口から出撃し指揮を執っている。その後、滝川は天正7年4月段階になると古屋野古城（昆陽付近）に在番する。古屋野は信長がたびたび在陣し、天正7年3月段階には信忠勢も在番する。8月段階でも信忠勢の在番が確認できるので、この場所は織田家将有岡城攻めを監督する拠点と見られる。この点については後項で検討する。

従って、古屋野への滝川の在番は陣を守備することが求められていたのではなく、あくまで城攻めにおける戦略上の必要からであろうと推測される。さらに、その後に滝川が西側の上臈塚砦を調略したことによって有岡城の落城が決定的になった事実を考えると、西側将有岡城攻めの主たる攻撃地点となったことが推測されるだろう⁽¹⁾。しかし、既述の通り西側には古屋野を除くと陣城・付城が知られていない。これは先の内容からするなら、付城の守備を目的に貼り付けられた武将クラスがこのエリアにいなかったことがその原因と考えられないだろうか。西側は滝川勢とこれに助力する部隊の攻城施設が置かれていたとしても、それらは『信長公記』にとっては関心の外にあったと見られるからである。

その視点でみるなら天正6年12月段階の陣城に遠距離のものが多いのも、近距離には下級部隊の付城が多いことが原因であったのかもしれない。このようなことが原因で主として遠距離の陣城のみがこれまで検討の中心となってきたのではないかと考えられ、これを踏まえた上での検討が望まれるのである。

(2) 注目されてこなかった付城・陣城

付城・陣城の存在を考える上で有岡城攻めでは2つの重要な材料が以前から知られていた。1つは江戸

期の村絵図であり、もう1つは発掘調査による発見である。次にこれ等を紹介したい。

A 北村陣

「寛文年間北村絵図」（大鹿土地改良地区所蔵・伊丹市博物館 1982『伊丹古絵図集成6』所収）には村中に多数の土手状遺構が描かれ、その中には内枳形のような虎口や折れ構造などが確認されるものも含まれる。そしてこれらの区画は宅地や寺院としては大規模で村の構造物には相応しくないとと思われる。これらのことから浅岡俊夫や小長谷正治らによって以前から信長方の陣城ではないかと指摘されてきた。このため、本稿ではこれを北村陣と呼称して紹介することとした。

まず、絵図を検討する前に『信長公記』の記述からこの場所を探してみたい。同書の天正7年の付城・陣城の記事には「賀茂岸」の次に織田信忠の陣所として「池上」が登場する。この池上という地名は今日まで場所不明とされるが、賀茂岸の次に並ぶので、この近くであることが推測される。ところで絵図に描かれた北村陣の南には、西国街道に面して有力な村である大鹿村が位置し、間に伊丹池がある。つまり大鹿村から見ると北村は池の上（かみは奥・背後を意味する）に位置するのである。

また、既述のとおり『信長公記』の記載は賀茂端の次に池上となるが、賀茂と北村は南北の位置関係にあり、伊丹台地の上加茂面と呼ばれる1つづきの地形上にある。これらの事から見てこの池上こそが北村陣と考えてよさそうである。

なお、池上は天正6年3月5日条にも記述がある。「岐阜中将信忠、御取手、賀茂岸・池の上二ヶ所」というのである。つまり、信忠は天正6年12月条では「賀茂」にのみ陣所があったが、この段階ではさらに有岡城に接近して「池の上」にも陣所を構えるのである。さらに4月12日条では三木城への陣城築城のため「古屋野・池上御留守」にしたとの記述もみえる。ここでは有岡城の北4.5kmと遠方にあった賀茂は記載されない。また、3月段階では古屋野の陣所にも信忠勢は在番するが、上記の天正7年4月になると古屋野古城には滝川一益、賀茂端には塩川氏など別の城番が置かれ、信忠は池上のみを受け持つことになる。これらの記述から推測するなら、信忠勢は、先ず賀茂の陣に入り北側を押さえる役割を担うが、4月頃からは北村陣を中心に在番するという経緯が見えてくる。おそらく3月ころまでに織田家嫡男の陣所としての規模や機能が整ったことがその要因と思われる。

この絵図に登場する北村陣があった場所は、現在の緑が丘町一帯にあたるが、ここにはかつて古代寺院である伊丹廃寺が立地した。この寺跡については昭和30年代から発掘調査が行なわれ、後に国指定史跡として整備が行われている。この調査報告書の著者である高井悌三郎氏は「寛文年間北村絵図」を取り上げ、絵図記載の土手状地形を同寺の築地跡だと述べている（伊丹市教委1966）。この指摘を受けて浅岡俊夫氏は寺の築地説を訂正して、有岡城の城攻め時における駐屯地の痕跡であることを紹介し、かつ絵図に登場する北村（緑ヶ丘遺跡）から城郭の堀が検出されたことから、これを猿ヶ山城跡と呼称して周辺における城郭遺構の存在を初めて紹介している（兵庫県教委1983）。これを受けて長谷正治氏も北村絵図に紹介される土塁痕跡が信長方の陣所であることを指摘している（市立伊丹ミュージアム2022）。しかし、この駐屯地の存在はこれまであまり注目されることはなかった。

ただ、残念なことに『寛文年間北村絵図』に登場する土手状の地形は、『昭和6年伊丹町案内図』（図6）



写真4 伊丹廃寺の基壇（手前）と陸上自衛隊伊丹駐屯地（背後の建物）



図5 『寛文年間北村絵図』（大鹿土地改良区所蔵）伊丹市立博物館 1982より転載・加筆

ではすでに消滅している。この地図の作成が行われる直前に土地開発（図6）が行われたようで、土手状地形などの駐屯地の痕跡は読み取れなくなっている。

さらに戦後はこの絵図の北側が陸上自衛隊伊丹駐屯地（昭和26年（1951）4月20日に警察予備隊伊丹駐屯地として発足。中部方面総監部などが所在）となる。そして、地名も伊丹市緑ヶ丘町となり、北村は東側の台地下にのみ残されることとなる。さらに南半分も宅地開発が進みかつての景観は全く残らない。



図6 『昭和6年伊丹町案内図』(部分・市立伊丹ミュージアム蔵) 伊丹市立博物館 1982 より転載、加筆

一方、この宅地開発の進行に並行して伊丹廃寺の調査および史跡整備が行われ、伽藍の中心部一帯は史跡公園として整備され、現在に至っている。

北村陣は有岡城北端の岸の砦から1.3kmの距離にあるが、その間を西国街道が東西に通る。有岡城から北側には伊丹台地が連続しており、南に向かって緩く下りの傾斜地形となるので、城攻めには有利な場所である。ただし、この陣が西国街道に直接面するのではなく伊丹池の上(かみ)に築かれているのは、防御を考慮してのことであろう。また、有岡城から1.3kmという距離や防御的な立地から見ると、この陣は直接の攻城を担う施設ではなく、最前線から控えた位置にあって戦線を俯瞰的に眺望することを目的に築かれたと見た方が良く、信忠の在番がそのことを表しているといえるだろう。

絵図にみる北村陣は概ねA～Dの4カ所で構成され、その規模は凡そ南北800m、東西300mほどの範囲となり、かなり広域に及んでいることがわかる。

ただ、それぞれの地区は方位軸を異にしており独立した陣所である可能性もある。地形による影響もあると思われるがその構造は地区ごとに大きく異なるのである。Aでは内柵形虎口や喰違虎口・横矢さらには副郭などが確認でき、陣所の典型的な構造が確認できる。Bも同様に土塁区画や虎口と思われる表現が見られる。一方、良蓮寺の貼紙があるCは伊丹廃寺に比定される場所にあり、高井氏が伊丹廃寺の築地の痕跡とした地点である。ここも同様の特徴を持つ土塁区画が描かれるが、北側に同寺の基壇痕跡に比定できる区画がある。このため高井氏の指摘は正しいものである可能性が高いとも思われる。そうであれば、この場所は古代寺院の築地を転用した土塁陣地ということも考えられ、貴重な遺構だった可能性がある。Dは伊丹池北側に面した区画である。この他、西側主殿池の袂には古城と記された小区画も見られるが、

その由来は不明である。

B. 織田直轄軍の配置

信長は天正6年には昆陽と古池田に在陣しているが、これに嫡子信忠の賀茂端を加えると、この3地点が図のように並ぶことになるので、当初の信長は古屋野―賀茂端―古池田のルートを使ったことがわかる。そして翌年の3月ころまでに信忠は南の池上に進出する。この時、東側に河原取手も築かれる。この付城は有岡城の北東、猪名川河床に隣接した氾濫原にあるが、この古屋野―池上―河原取手の3つは西国街道に隣接する。つまり、信忠の賀茂岸から池上への移動は、昆陽―古池田ルートから西国街道の掌握という目的があったと見ることができる。

また一方で織田直轄軍は古屋野・賀茂や池上(北村陣)・古池田など一貫して有岡城北方を拠点として有岡城攻めを指揮・監督したことが読み取れる。この場所は西国街道を使って迅速に京都との連絡が可能である点や、有岡城を背後から俯瞰する上で都合がよかったと見られる。有岡城側はこのことに危機を感じ天正7年4月18日に西国街道ルートの分断を狙って「伊丹敵城より足輕を出し」て河原取手(河原口)を攻撃するが失敗する。池上(北村陣)というパーツが加わったことで織田軍の動向が解明できる事例と言えよう。

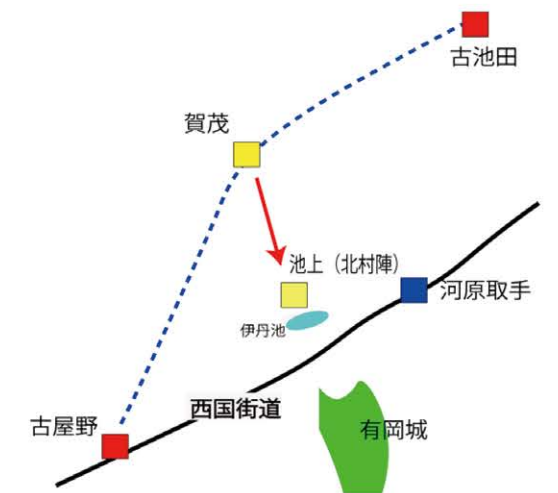


図7 織田信長・信忠の陣城

C 南本町の付城

鴨塚砦の南600mに位置する付城で災害復興住宅の建設に伴う発掘調査(平成7年度)で発見された(兵庫県教育委員会1998)。報告書によると古墳墳丘を利用して築かれたもので、周囲を幅2.5～3mの堀で囲み、南東部に張り出しを持つ方形の陣所である。

陣の規模は長軸21m、幅12m、張出部では幅16m(曲輪内側)である。大規模なものではないので敵陣へ接近するための陣地的な機能を持った施設ではないかと思われる。堀の埋戻し埋土から戦国時代の中国製青磁碗と丹波焼細片が出土している。



写真5 南本町遺跡の付城(兵庫県立考古博物館提供)

もちろんこのような施設には『信長公記』は関心を示さない。「二重・三重堀をほり、塀柵を付け、手前々々・・・」などの表現によって一括されるのである。

調査では小長谷氏の指摘によって拡張区を設け全容解明に努力が払われている。浅岡氏以来の知見の蓄積がなければ近世の溝、あるいは攪乱として処理されただろう(なお、古墳の周濠は別途検出)。これによって、有岡城に近接する攻城施設の存在が確認された意義は重要である。注意深く地域を観察する調査者の存在が重要であることを示す一例と言えよう。

5. まとめ

有岡城攻めについては見てきた通り、遺跡に残される材料は多くないが、『信長公記』や村絵図といった史料を再検討すると、従来の通説には多くの課題が残されていることがわかった。

つまり、通説は『信長公記』の記述意図を理解せずに語られてきたことがその根本的な原因であったと思われる。

一方で本稿では有岡城攻撃の中心が西側にあったことを推測してみたが、この点に関しては、今後遺跡から確認してゆく必要があるだろう。南本町遺跡では城攻めを目的とする小規模な攻城施設が検出されたが、こういった知見を足掛かりとして考古学的な知見の蓄積に向けた努力が望まれるところである。

註

(1) 西側を攻撃の中心とする説は小長谷正治氏からご教示を得たものである。段丘涯を利用した有岡城惣構は西側の上臈塚砦から北は高低差が低く、城攻め側にとって有利な地形である。このことを考えても西側への布陣が重視されたことが推測されるのである。

引用・参考文献

奥野高広・岩沢愿彦校注 1969『信長公記』ソフィア角川文庫／伊丹市教育委員会『有岡城と荒木村重』／伊丹市立博物館 2006『秋季企画展荒木村重と有岡城』／市立伊丹ミュージアム 2022『信長と戦った武将荒木村重』

【池田城】池田城市教委 1994『池田城跡―主郭の調査―』・池田市教委 2000「池田城跡発掘調査」

【原田城】豊中市教育委員会 1994「原田遺跡第1次HRD-1」『豊中市埋蔵文化財調査年報』／豊中市教育委員会 2005「原田遺跡第6次調査」『豊中市埋蔵文化財調査再概要 平成16年度』／豊中市教育委員会 2021『豊中市埋蔵文化財調査概要 令和2年度(2020年度)』

【刀根山砦】豊中市教育委員会 1995「待兼山遺跡第1次(MKY-1)」『豊中市埋蔵文化財調査年報』3

【塚口城跡】兵庫県教育委員会 2013『塚口城跡―都市計画道路尼崎伊丹線立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』

【南本町遺跡】兵庫県教育委員会 1998『兵庫県文化財報告 179 冊 南本町遺跡』

【北村陣】八木哲浩編 1982『伊丹古絵図集成 本編・絵図集 伊丹氏領叢書6』伊丹市立博物館／伊丹市教育委員会 1966『摂津伊丹廃寺跡発掘調査報告書』／伊丹市教育委員会 1971『伊丹廃寺跡環境整備事業報告書』兵庫県教育委員会 1983・85『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和58年度』猿ヶ山城跡・『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和60年度』緑ヶ丘遺跡

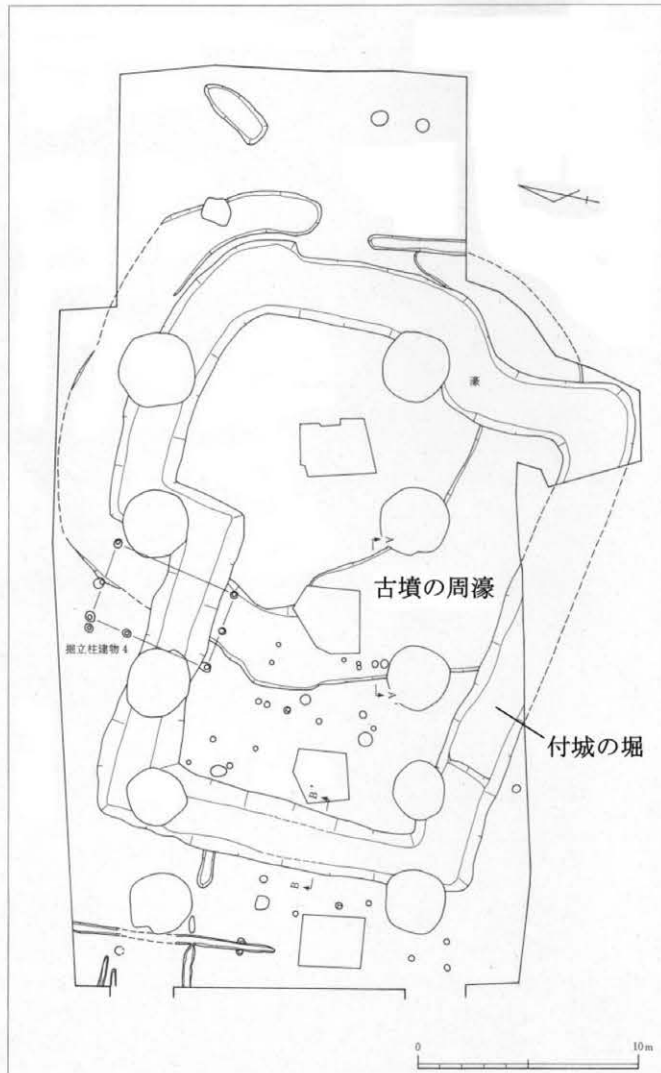


図8 南本町遺跡付城平面図
(兵庫県教育委員会 1998 より転載・加筆)

三木城包囲線の推移

宮田逸民

はじめに

三木別所氏は別所則治が明応元年(1492)年頃に三木城を築城して以来、浦上・尼子・有馬・三好の各氏に攻められたが耐えてきたという実績があった。

永禄11年(1568)織田信長が上洛して以来、播州三木別所氏は織田氏に従い、翌12年の播磨攻めに別所重棟が出陣した。当主長治の「長」は織田信長から偏倚を受けていたようである。その長治が天正6年(1578)2月、信長と手切れして毛利氏と結んだ理由が令和5年になって判った(註1)。その秀吉書状写しにより羽柴秀吉が与力である別所氏配下の城割を実施した事が原因と判明した。本紙面ではその後に起こった三木合戦に織田・羽柴勢が三木城を囲んで設けられた付城の築城時期を考察する。

開戦当初

天正6年3月29日、『黒田家譜』によれば羽柴秀吉は小寺孝高を先手に三木城を攻めた。俗説とされる『播州太平記』では秀吉は三木城の西北西、鳥町に陣を敷いたとする。その遺構は別所町和田の小和田神社山頂南面削平地とその東の字妙界寺の削平地かと推定する。別所氏の三木城はそれまで何度も攻められており、それらの遺構はそれまでに設けられた陣跡の再利用かもしれない。

その後4月に入ると秀吉は野口城(加古川市)を攻めて12日落城に至るので、それら三木城攻めの陣地は転戦により維持されず放棄されたのであろうか。

信忠着陣

同月中頃、尼子勝久と山中幸盛を入れていた上月城(佐用町)が毛利氏の大军に囲まれると秀吉は荒木村重と救援に向かった。信長は嫡男信忠以下の大军を播磨に送るも戦局は容易でなく、秀吉は上京して信長から指示を受けて救援を諦めた。6月27日、信忠以下の大军が神吉城(加古川市)を囲み、秀吉は但馬へ向かった。7月5日、上月城は落ちた。信忠は神吉城に手こずり20日に落とすと三木城を囲んだ。

この際に信忠が本陣を置いたのは平井山山ノ上付城であろう。それは川を挟んで三木城方面の眺望が効き、吉川経由で京からの補給ルートが確保されていた。城内は数区画に分かれ、数名の大将の陣所が同居していたと考えられる。美囊川の北側、三木城の対岸の諸城は平井山山ノ上付城と同時に築かれた付城であろう。『武家事紀』「三木攻撃図」に慈眼寺山城と推定できる位置に「始別所重棟在此」とある。三木の地形を熟知した別所重棟は秀吉に同行して但馬には向かわず、信忠に従って付城の適切な配置を助言したのであろうか。三木城東方、志染の付城群は別所氏の本拠地を押さえたのであろう。同時期に三木城の南側に築かれた付城を特定する事はできないが、明石道などの街道を塞がなかったとは思えない。

秀吉と交替

織田信忠は但馬から三木に戻った秀吉に付城を渡し帰京した。8月15日、長治は石野氏満に「加古口付城」(這田村法界寺山ノ上付城であろう)を夜襲させた。当城下を姫路道が通過し、すぐ西から土山街道が分岐する。当城は他の主要な付城と異なり主郭に櫓台を備えず、現状でも方形の主郭周囲の堀は他より明らかに深い。つまり、当城は織田氏が新築した付城ではなく元は別所氏の支城であったと推定する。これは『武家事紀』「三木攻撃図」の「宮部善祥坊」にあたる。同様に別所氏の元支城と推定する城は美囊川を

挟んで北側の大村山ノ上付城である。現在は失われているが昭和 38 年 1/2500 国土基本図では方形単郭の城であり、這田村法界寺山ノ上付城の主郭と同様であったようで、当城は三木の北岸西側で最も高い位置にあり展望に優れていた。これらは信忠が三木に着陣時に別所氏より奪い後に増築されたと考える。

金剛寺谷を挟んで東側の尾根上に平田村山ノ上付城が築かれ、加佐山城（現三木 S A 西行のドッグラン付近）との間の尾根上に付城が設けられ現存する（註 2）。跡部村山ノ下付城の西側対面（現三木高校テニスコート）には元久留美村病院が建てられていたが、それは方形の土塁に囲まれていた（註 3）。この間を東条道が通過していた。元病院の北西側尾根の字は「狐城」であるが遺構は見当たらなかった。その東に位置する久留美村大家内谷上付城は他の付城に比べて城内が広く主郭南東隅に櫓台と虎口がセットで存在する。それまでの三木城攻めに築かれた城を織田氏が改修したと推定する。さらに東に慈眼寺と慈眼寺山城がある。慈眼寺山城はこの付近の最高所で眺望が良い。「三木攻撃図」に別所重棟が初めて入ったのは当城であろう。これら三木城北側の丘陵に築かれた付城群は織田信忠の大軍が新築、修築したものであろう。

平井山の北側尾根上には竹中半兵衛が陣したとされる平井村中村間ノ山付城がある。その北側の字は「荒木谷」（チェリーヒルズゴルフ場）であり、信忠に同行した荒木村重の付城であったのであろうか。

三木城を軸に這田村法界寺山ノ上付城の反対側（東）のほぼ等距離に築かれていたのが和田村四合谷ノ口付城である。その東の高男寺本丸遺跡は別所氏により築かれた城であろうが信忠に占拠されたのであろう。眺望が良好な吉田住吉山遺跡（註 4）が改築されて和田村四合谷ノ口付城として使用されたと考える。

三木城の南側に築かれた付城を特定する事は困難であるが、『播州三木城地図』（註 5）では「武・竹塚」まで付城が築かれていたとする。『武家事紀』「三木攻撃図」には三木城の南側の付城に「蜂須賀（西）・浅野（東）」と記入されている。これらは明石道・兵庫道に対応していたものか。「武・竹塚」は兵庫道に接して三木城封鎖多重土塁線より外側のより遠い位置にある。ゆえに信忠が築いた初期の付城であったかもしれない。縦山（福井土塁 C・グリーンパーク北西端・註 6）の付城は多重土塁線に接続して宿谷が東に折れる位置にあり、西下に明石道、北は谷に面して西側の展望が良い。この東側にあって同様に北に谷を擁していたのは小林八幡付城である。三木城と間に谷という要害を配置するのは敵前に築城する場合には不可欠である。街道に面しても竹・武塚のように三木城より距離を取ればより安全であったであろう。

古田討死

『豊鑑』は天正 7 年初春、連夜闇に紛れて三木城内へ兵糧を搬入したとする。その経路近くの付城を守備していた神子田正治・古田重則・中西守之が搬入を阻止しようと戦い、搬入部隊を護衛していた石野氏満に古田が射殺された。別所氏はこの勝利に信長に和睦を請うも拒絶され、信忠の播磨下向となった。

信忠の三木城封鎖

『信長公記』によれば信忠が主要な家臣を伴い播磨に下り、越前衆を普請方とした。付城が 6 城追加された。この際に多重土塁線が築かれたと考えられている。別所氏も反撃したが数十人が討取られた。

前年 7 月に信忠が三木に布陣して以来 9 ヶ月、三木城周辺の森林は築城の部材、夜間の篝火、煮炊きの薪として刈り取られ失われていたと推定される。ゆえに逆茂木による封鎖線を構築出来ず、多重土塁線という土木工事で尾根の通路を塞ごうとした。土塁が古墳を外しており（註 7）地元民の動員が推定できる。土塁と土塁の間は通路として付城間を結んだ。それらは付城の外側（南）に設けられて外部から三木城内へ運ばれる輜重隊に備える配置であり、三木城側から付城を守るように配置されたものではない。

多重土塁線と連携する付城は西から「這田村法界寺山上」、「納戸口」（朝日ヶ丘団地で消滅）、「高木大

塚」、「高木大山」、「縦山」（福井土塁 C）、「小林八幡神社」、「城山土塁西」（註 8）、「二位谷奥付城 C」と考える。二位谷土塁 B の延長は三木町福井と別所町小林の字境であって東端は釜が谷池に下り、その先に「きのこ公園北」が狭い尾根上に築かれた。昭和 38 年撮影の空中写真では「きのこ公園北」は樹木が切岸を示し西端には谷が入り堀切の代りとなった。「城山土塁西」は老の口への道に接し、北側で兵庫道と合流する。

法界寺から北側の平野部は小河川などを堀として封鎖線とした。法界寺山上付城の西からを流れる長治川は北に流れ美囊川に合流する。合流位置の東に和田井堰の取水位置から水路があって金剛寺谷川（旧美囊川の北側）を渡る。その水路渡河位置の東隣に鳥町河原付城（註 9）がある。その東から北へ鳥町と大村の境をなす杉井谷川があってそれは大村坂の麓から流れている。別所重棟が慈眼寺山城から鳥町河原城主に入った時期は早くて秀吉着陣後であろうか。

秀吉の三木城封鎖促進

前述の秀吉書状写しから織田信忠播磨下向の後、秀吉が三木城包囲を単独で徐々に狭めた事が確認された。『播州征伐之事』は君ヶ峰城を天正 7 年 5 月の丹生山・淡河城の記事の後に記述する。つまり多重土塁線の延長線上に存在した「きのこ公園北」から同じ尾根を 750m 三木城に近づいた位置に君ヶ峰城が設けられた事になり、これは秀吉の単独築城に相当する。

二位谷奥付城 C は多重土塁線にリンクしているが、二位谷奥付城 B と共に秀吉の増築であるのかもしれない。二位谷奥付城 A の南側、二位谷土塁 A は当城の背後を守るための土塁ではなく、二位谷奥付城 A が築かれる前段階の三木城側に向けた最前線の土塁であったのではないだろうか。それは多重土塁線（福井城山土塁）より三木城に 500m ほど近づいて築かれている。

近年発見された八幡谷南付城は小林八幡神社付城より谷を渡り北側対岸 250m に築かれている。宿谷から東に延びる谷を両城で封鎖していたと考えられる。谷を隔てた八幡谷南付城は小型で三木城により近く、多重土塁線と同時期に築かれたと考えるよりその後に秀吉により追加して築かれたと考えるべきである。

明石道峯構付城は旧明石道・宿谷を隔てて縦山（福井土塁 C）の北西対岸 300m 三木城寄りに築かれている。この両城により明石道を塞ぐ配置となっていた。当城の発見当時、多重土塁線より谷を隔てて北側にあり主郭東側虎口が平入りでその堀が法界寺山上と同様に付城としては深いので元は別所氏の支城ではないのかとの意見があった。しかし、主郭西側虎口の脇に櫓台があり、前面に外柵形の原型となる自然地形の小曲輪があるのは小林八幡神社付城と同じ設定であり、Ⅱ曲輪の虎口が折れを伴うので秀吉方の付城と判断した。当城は八幡谷南付城と同様に多重土塁線と接続せず、多重土塁線と同時期に築かれたと考えるより、後に秀吉の単独の追加築城として宿谷の対岸に築かれた考えるべきであろうか。

平田大村合戦後封鎖線縮小

9 月 10 日の平田大村合戦後、秀吉は三木城包囲の範囲を狭めて東は大塚、北は長屋、西を平田、南を八幡山とした。つまり東側は二位谷川を境とし、君が峰の西の松ヶ丘山頂（註 10）から大塚と芝町間の崖面、井谷池から井谷川（旧長屋村・北側の字は出張）が美囊川に至る。美囊川対岸は六ヶ井堰主用水路（大溝）があって、三木中学校の西（平田）を結ぶ。六ヶ井堰主用水路から支水路（丸加佐溝）が美囊川方向へ流れていた。美囊川の対岸は八幡谷川が美囊川近くまで流れている。その上流は八幡谷上明石道付城 A の東の谷に至る。その先の山上に三谷上付城があって尾根続きに二位谷奥付城 A に至った。

『播州征伐之事』は高さ一丈余りの築地に二重塀を設けて塀の間に石を入れたとするが、そのような遺構は見当たらない。文献上の表現だけであってそのような遺構が実際に設けられたのは疑問である。

別所重棟は三木城開城時に美囊川対岸の新宿に付陣していた。三木城本丸直下美囊川の「赤が瀬」を渡れば字新宿侍屋敷である。そこは別所家臣団の屋敷地との伝承があり六ヶ井堰主用水路（大溝）の南側に位置する。主用水路の北側では旧三木市民病院本館の位置が方形の畑地であり周辺是水田であった。



三木城側最前線（大堀切）

秀吉に攻められた三木城の最前線は宮ノ上要害東側とされていた。しかし、昭和 38 年国土基本図によりそれは更に 400mほど東南側（現関西電力福井変電所東の谷）と判明した。守備したのは岡村氏であろうか。その対面側の尾根上（現関西電力高压鉄塔）は鉄塔建設前に単なる削平地であり土塁は無かった。ここは浅野長政の仕寄り位置と推定できる。それは二位谷奥付城より 450mほど三木城側にあたる。

脚注

- 註 1 村井祐樹「中世史料との邂逅」2024 思文閣出版 浅野宛別所長治書状の「理可申」が判明した。
- 註 2 兵庫県 50 cmメッシュ CS 立体図参照 尾根の各頂部に築城されている。
- 註 3 「礎」兵庫県立三木高等学校創立 50 周年記念誌 1974 兵庫県立三木高等学校 現校舍建設前写真
- 註 4 『三木市吉田住吉山遺跡群』2011 兵庫県考古博物館 元は南北朝期築城の志染陣と判明した。
- 註 5 『播州三木城地図』1993 三木城復興の会 原本は江戸時代に東這田で作られ讃岐へ伝えられた。
- 註 6 多くが失われて付城ではなく福井土塁 C として指定した。1985/12/3 国土地理院空中写真を参照
- 註 7 5 号墳側の土塁の歪みは地元民が避けたと考える。『高木古墳群・高木多重土塁 1』平成 12 年
- 註 8 福井 2110 と西駐車場 空中写真以外に手掛かり無く総合調査報告書作成時に後年の検討とした。
- 註 9 別所町近藤 186・190 1948/9/25 米軍及び 1961/6/6 国土地理院空中写真を参照
- 註 10 1974 年当時頂部に高压鉄塔が設置され遺構は無く北西尾根西側に堅堀が見られた。



三木城跡の伝天守台



三木城跡より付城群のある山々を望む



鷹尾山城跡に残る堀切

主な城郭用語解説

- 縄張（なわばり） 城郭の曲輪・虎口などの配置プラン
- 曲輪（くるわ） 堀や切岸で囲われた兵が守備する城内の空間
- 主郭（しゅかく） 城の中核となる曲輪
- 切岸（きりぎし） 曲輪の縁に設けた防御用急斜面
- 土塁（どるい） 曲輪の縁や遮断線などに設けられた土手
- 虎口（こぐち） 曲輪の出入り口
- 櫓形（ますがた） 土塁等を矩形に設けて虎口を守備する施設
- 土橋（どばし） 堀に設けられた土の橋
- 堀切（ほりきり） 尾根を切断する堀
- 櫓台（やぐらだい） 櫓を設けるための壇
- 横矢（よこや） 塁線・虎口に設けた折れにより側面から防御する施設

編集後記

NHK 大河ドラマは 1961 年「太閤記」、1981 年「おんな太閤記」、2002 年「利家とまつ」、2006 年「功名が辻」、そして今年の「豊臣兄弟!」と三木城が登場しました。2002 年頃、当時の文化財担当者と秀吉に攻められた三木・鳥取・備中高松の三城でシンポジウムを企画しようと話しました。2004 年には水野正好先生、小和田哲夫先生に中井均先生をお招きして市政 50 周年記念歴史シンポジウムが催され、三木城と付城群の国指定へと動き始めて 2013 年の指定に至りました。その後 CS 立体地図・赤色立体地図が用いられ各地の付城・陣城の研究が進みました。本日、文化庁の補助金を得て当初の三城に丹波八上を加えての開催となりました。このシンポジウム実現にご尽力ご協力いただきました各位に深く感謝申し上げます。

三木城夏の陣 2026 シンポジウム籠城・攻城戦 資料集

発行日：令和 8 (2026) 年 8 月 23 日

編集・発行：三木甲冑倶楽部 (〒673-0404 兵庫県三木市大村 410-2)

表紙装丁・印刷：山本書院グラフィックス

発掘調査時 三木城攻めの織田方の付城



君ヶ峰城：主郭西端より北西 II曲輪は通路に面して土塁を配するが内部は傾斜した(1988)



二位谷奥付城：III曲輪
土塁上に掘り込み 右奥は主郭櫓台(1998)



加佐山城：北より見た主郭
土塁に虎口が見当たらない(1992)



高木土塁：現市営団地部分の南側土塁線を西より見る(1997)



小林八幡神社付城：主郭を南東より見る 奥に櫓台(1993)